

此の作、非常な好評を博したので、氏は同年の暮、バンコック府に開かれた暹羅日本美術展覧會にも同一の構圖のものを書き、暹羅の皇室に献上した。

川端龍子氏が、同じ昭和六年に開いた個人展覧會に四季花鳥を出品したが、その夏は「薰風」と題して、柳に五位鶯を畫いたが、此の五位鶯も潑瀾たる生氣漲つてゐた、昭和九年の秋、日本美術協會には、八木岡春山氏が亦五位鶯で評判を取つた、彫刻には、昭和九年の日本美術院展に、宮本理一郎氏の作があつた、これは雛で、その形が面白かつた。

## ◇

**鶯の種類** さて鶯の種類はかなり多く、日本に於て見られるものだけでも、十數種に及んでゐる。即ち普通に白鶯と呼ばれてゐる中鶯、小鶯、大鶯、こも、白、唐白鶯をはじめとして、紫鶯、へら鶯、黒へら鶯、青鶯、五位鶯、さ、五位、はしぶと五位、みぞ五位、よし五位、臺灣みぞ五位、琉球よし五位、黒鶯、あま鶯、赤がしら鶯などである。

この中で、最も多く藝術に現はれるのは、白鶯の四種と、五位鶯、青鶯位のものである、その中でも小鶯が最も多い、此の種類はその名の通り形が小形で、日本内地でも最も多く見られ、季節に關係なく眼に觸れる、特長は頭部に二本の冠羽があり、鍔毛の先が上に曲り、脚が黒くして、趾は黄色、顔の眼の周圍の裸出部が蒼白色である。

中鶯は小鶯よりや、大きく、嘴は夏の中は黄色であるが、冬は黒色となり、頭に冠羽なく、鍔毛が尾より長くなり、脚は皆黒色である、此の鶯は、小鶯と共によく目につくのであるが、小鶯のやうに一年中見られず、冬になると暖帯地方に去つてしまふ。

大鶯は更に中鶯より大きく、小鶯や中鶯に比し極めて少く、夏の中はシベリヤから北支那あたりで繁殖し冬になると日本に飛來して冬を越す、日本では本州の中、昔は東京附近でもよく見られたものである、嘴の夏黄色で、冬黒くなる點は中鶯に同じく、顔の裸出部は綠色、鍔毛は尾より長く垂れてゐるが小鶯のやうに先が曲らず、冠毛は全然なく、脚は黒色である。

唐白鶯は全身雪白色なること以上の諸種に同じであるが、頭には十五枚乃至二十枚の立派な冠毛があり、鍔毛はあるが、小鶯や中鶯ほど長くない、嘴は黄色、顔の裸出部は綠色で、脚は黒く趾のみ黄色である。

こもも白は、中大鶯、風標公子、白漂鳥などと呼ばれ、印度から支那、馬來半島に分布し日本では千島の一部から北海道、本州九州にも見られる、よく大鶯と見誤られる、千葉縣蘇我町大巖寺境内はその繁殖地として有名であり、晝は海濱などに小魚などを漁り捕食し、夜は樹上に眠る、此の境内昔から杉の森と稱へて此の鶯の繁殖するもの數百千羽に上り、村民はその糞を以て肥料とし、その代償に鶯を保護してゐるわけである、夏は尾よりも長い鍔毛を生じ、嘴が黒色を呈してゐるが、冬は鍔毛なく、嘴も黄色になる。

**五位鶯** 五位鶯はよくその形も色彩も人に知られてゐる、漢名鷓鴣、別に雀子、灰雀子なども呼ぶ、日



本には到る處に見られるが、冬になると南の暖い地方に去つてしまふ、その幼鳥時代と成鳥とは著しく色彩を異にし、幼鳥の時は背から一面に褐色を呈し、これに細かい斑點があり背から兩翼には三角形した斑がある、星五位の名がある、長ずるに従つて色彩が變つて行き、成鳥は額から眉の周圍、頬から腮、咽喉の邊から腹へかけて白色であり、頭から背、肩の羽あたりは緑色を帯びた美しい黒色、襟の邊から細い飾り毛が二本乃至三四本出てゐる、多いものは八本に達するものもある、頸の脇、尾や翼は灰色、肥えたのもあれば、左程でないものもあり、主として夜活動をする。さ、五位や、よし五位など有名ではあるが、普通の五位はど藝術の上などに扱はれてゐない。

**青鷺** 青鷺は、蒼鷺、老等、青莊などの異名や別名がある、日本には到る處で見られ、支那にも臺灣にも棲息する、頭は白色、嘴は黄色、眼の脇から黒羽があつて、これは二枚の甚だ長い冠毛に連つてゐる、頸の前方にも白色の飾羽がある、背から尾へかけては灰青色、腹及び胸には著しい黒色の線がある、昔は鷺料理としてよく用ゐられたもので、鷺の中では一番美味とされたものであるが、藝術にはあまり現はれたものもなく、昭和九年の日本美術院展覧會に、小林草悅氏が出品した『水禽圖』には此の青鷺が畫かれてゐた。

鷺の配合と植物 鷺の繪畫に現はれたもの、中では、白鷺に於ても、五位鷺に於ても、柳に配せられたものが最も多い、次ぎは蘆である、次いで蓮鷺も屢々見る、『雪中柳鷺圖』の如きは、古來いろ／＼の人の筆に

見られるものであるが、雪中、我が國や支那に於て見られるのは小鷺であるから、鷺の中では、小鷺が一番數多く畫かれるといふことになる。

**畫題の鷺** 鷺に関する畫題も少くない、その主なものを擧げて見やう。

一鷺圖 楊柳に白鷺を畫く、鷺は路に字音通ずるからである。

一路平安 竹に鷺を畫く、竹は平安を意味するからである、北都には竹少く僅かに童子寺に竹があるのであつた、然もその竹僅かに數尺、人々その竹の爲めに平安を祈つた、此の畫題これに出づ。

一路功名 唯一羽の鷺を畫く、その功名に向つて翔るの象か。

一路榮華 芙蓉の花に白鷺を畫く、榮華と榮華と字音相通じてゐる。

雪 客 六客の一で、鷺の異名である。

寒菊双鷺 寒菊に二羽の白鷺を配したものの昨今あまりこれを見ない。

疎柳三思 枯柳に三羽の白鷺を畫いたもの鷺の姿もの思ふに似てゐるからで、此の畫題、甚だ面白い。

竹鷺圖 竹鷺は、柳鷺、芦鷺、蓮鷺に次いで多く畫かれる、竹の緑と白鷺との色の調和また佳い。

**五位鷺の傳説** 五位鷺には、有名な「鷺に位階を賜ふ」といふ有名な傳説がある、醍醐天皇、神泉苑に行幸の砌、池の洲崎に一羽の鷺の翼を休めてゐる風情に興を催させ給ひ、誰にても彼の鷺捕へ參れと仰せ出され



た、傍に侍ふ大臣、藏人にその旨を傳へたので、藏人は驚は鳥類飛行の翅、いかゞはせんと躊躇つたが、大臣は、よしや何處でも、普天の下、率土の中は玉地ぞといふので、藏人仰せに従ひ蘆間の陰から狙ひより捕へやうとするとパツと立つ、止むなく勅詔をと呼ば、り近けば、驚は神妙に羽を垂れ地に伏した、そこで藏人これを抱き、靱籠に供し奉つたので、御感斜ならず、五位の位を賜はり、勅にしたがふ驚は、神妙なれば放ちつかはせと有難い宣旨に、驚を放てば、驚は嬉しさうに飛び翔り、行衛も知らず去つて行つたといふ諸曲の『驚』がそれで、此の出所は『源平盛衰記』である。

**鶯娘** 驚を人になぞらへての作では、有名な鶯娘がある、いふまでもなく、白鷺が水邊に片脚立て、片脚をかゝめて立つ風情から思ひついたもので、舞踊では、長唄の地で非常に重いものになつてゐる『妄執の雲晴れやらぬ』といふ鼓唄から

せめてあはれとゆふぐれに、ちら／＼雪に濡驚の、しよんぼりと可愛らし、迷ふ心の細流、ちよろ／＼水の一筋に、うらみの外はしら驚の、水に馴れたる足ども、濡れて雫と消ゆるもの、われは涙にかはく間も、袖ほしあへぬ月影に、忍ぶ其夜のはなしをすて、縁を結ぶの神さんに、取あげられし嬉しさも、あまる色香の羞かしや。

といふ邊に、振の面白味があり、古く春信の『鳥驚道行』などにも、此の鶯娘が畫かれるのであるが、今日では、鏡木清方氏が得意の題材として、幾種かの作があり、山川秀峰氏にも、これを畫いたのがある。

**鳥驚合戦** 驚に關しては、まだ物語に一條兼良作の『鳥驚合戦』があり、『白縫物語』の中にも、鳥驚の合戦があるが、これは著者の前著『鳥』の中にも記して置いたから、こゝには省略する。

文學の方面では、古く『萬葉集』の第十六卷に、長意吉麿の

池神の力士舞かも白鷺の銚啄ほくひ持ちて飛びわたるらむ

の一首がある、白鷺が巢を作らうとして、木の小枝を啣へて飛ぶ姿を、大和の池上あたりでその昔行はれた力士舞の振りにたとへたのである、面白い歌である。

**裳毛のみだれ** 白鷺の特長は、何といふても、あの房々した裳毛にある、だから、和歌にも、これがよく現はれてゐる。

いづみ川あさ瀬もしく立つ驚のみの毛みだる、風の寒けき

衣笠内大臣

風のまく驚のみの毛にたとふなる心よわか身いつちかもせん

光俊朝臣

をちかたやきしのやなぎにゐる驚のみの毛なみよる河風ぞ吹く

後京極攝政

あゆのふすせこの岩間にゐる驚のみの毛なみよるかも河かせ  
など、何れも繪のやうな美しい風情を見せてゐる。

寂蓮法師

**漢詩の驚** 漢詩の方でも、白鷺は古來幾多の人々の詠賦に上つてゐる。



白鷺下<sub>二</sub>秋江、孤飛如墮霜、心閑且未去、獨去沙洲傍。

李太白

翦<sub>二</sub>得機中如<sub>レ</sub>雪素、畫<sub>二</sub>爲江上帶<sub>レ</sub>綠禽、間來相對<sub>二</sub>芽堂下、引<sub>二</sub>出烟波萬里心。

張喬

など有名なものであるし、楊誠齋の

窺魚翹立荷香底、慕侶低翻柳影中。

も、即ち、柳鷺圖そのまゝである。

俳句の方では、鷺の巢といふのが、春の季題にあるが、あまり句としては現はれてゐない、改造社の『歳時記』には左の二句がある。

五位の子の巢にゐて人に動かざる

鷺の巢に見覚えぬ樹はなかりけり

それよりも、古く蕪村の

夕風や水青 鷺の脛をうつつ

や、乙二

芹さげて出たりな鷺のすみかより

などの方が遙かに面白い、餘情がある。

## 二八 鶉 (う)

夥しい鶉の繪 近頃の日本畫に現はる、鳥の中で、鶉は極めて多い、その自然生活を扱つたものもあれば鶉飼の如き特殊の場合を畫いたものもあり、これを列擧する煩に堪へぬものがある、中で、評壇を賑はした作を擧げて、第十四回帝展出品荒木十畝氏の『玄明』、第十二回森白甫氏の『海邊所見』、勝田蕉琴氏の『磯なぎ』、故田村彩天氏の『鶉』、大村廣陽氏の『鶉』、十一回宇田荻邸氏の『流江清夜』、十三回福田翠光氏の『游淪追啄』、日本美術院の方では、第九回に富田溪仙氏の『岬』、同十八回に同氏の『退潮の鶉』、橋本靜水氏の『臘月』、西島廣造氏の『水邊初夏』、青龍社第一回に川端龍子氏の出品した『鳴門』更に同氏が個展に出品した、『海音圖』、『碧潭』廿一回院展の山村耕花氏の『愛撫巢』などがあり、『鶉飼』の行事をそのまゝ描いた大作では十二回帝展に出品した川合玉堂氏の作、七絃會に前田青邨氏が出した『鶉飼』第十回院展の近藤浩一路氏の『鶉飼六趣』などが擧げられる。それら、此の鳥の面白味や特長を捉へて畫面を構成してゐる。

宮本三天の名作 新畫の方では、かうして毎年如何なる展覽會にも、此の鳥を畫いた外が見えないことはない位に盛なのに反し、古畫では割合に少い、その中で、嶄然光つてゐるのが、宮本三天の鶉である、これ



は細川護立侯秘藏の名畫で、二天の作としては、鴉の作と共に好一對を爲すもの、筆致極めて雄勁、然も此の鳥を活寫して餘蘊なきもの、それから、佐竹侯爵家の舊藏に洞雲の作がある、これは非常に面白いもので約三尺幅の横物で、上には水上に姿を現はした鶉を畫き、下には淡墨で、水中の鶉を描いてゐる、構圖も新しく氣分も面白く、當時にあつては、極めて大膽な作といはねばならない。

訥言の『水中捕魚』 珍しい作としては、訥言に『鶉水中捕魚圖』がある、瀟灑な筆致で、水草を描いて水中の趣きを見せ、鮎を一尾仰へてゐるのであるが、よくその急所を擱んで、些の隙がない、訥言のかうした作は、全く稀れである、この名畫藤田雪齋家舊藏である。同家にはなほ、蘆雪の鶉飼といふ珍幅もあつた。

更に變つた方面では、北齋にもその作がある、枕の上に一羽の鶉を見せたもので、北齋一流の勁拔なる筆致である。

## ◇

鶉の種類 鶉の種類としては、日本産に四種ある、海鶉、河鶉、姫鶉、千島鳥である、此の中で、海鶉は長良川をはじめ、各地で鶉飼に使はれるので、繪畫に現はれたり、文學に出たりするのは大抵此の種類である、鶉といふ文字が直ちに黒といふ色彩を聯想せしめるやうに、全身黒色で、金屬性の光澤を帯びた羽毛、黄色で鋭く先の鈎形になつた嘴、眼の周圍の橙黄色の裸出部、かうした色彩と、飽くまで爛々たる眼光、逞

しい翼、そして水中を自由自在に潜行して巧みに魚を捕へる電光石火の早業、それは一種痛快な感じをさへ起させるので、好んで畫題に上せられるものである、鶉飼に用ゐる海鶉は、多く外海に棲息して、岩の上などに營巢するが、河鶉の方は、形は似てゐるが少し小型であり、松の木の上などに營巢する處が異ふ、生植期になると顔の裸出部の周圍に白い柔かな毛を生ずるが、これはその期間が過ぎると抜けてしまふ、河鶉の方は、特にこれが著しいので、『しらが鶉』の異名さへある。

姫鶉は名の通り更に小型であるが、色彩は異なり、頭から頸の上部が青銅色、首は紫色で、頭には小さい毛冠があるが、生殖期を過ぎるとなくなる、一寸面白いが、繪には殆んど畫かれない、前の二者は尾羽何れも十四枚であるのに、此の種は十二枚であるのも變つてゐる、千島鳥は、姫鶉によく似てゐるが顔の裸出部が橙黄色で、頸部も黒く、姫鶉のやうな特異な色彩は無い。普通人の目に觸るゝことが少いから、繪畫などにも現はれない。

## ◇

鶉飼のはじめ 鶉の習性を利用し、これを使って魚を捕へる所謂鶉飼は何時の頃から始まつたことであらう、その考證は私の前著『鳥』の中にも記して置いたが、序であるから、概略を紹介して置く。

鶉飼といふことを初めて試みたのは支那で、既に三千年前からこれを行つたといふ、支那では鶉のことを鷓鴣といひ、又は烏鬼とも呼んだ、日本にこれが傳へられたのは既に神代のことらしく、『神武天皇紀』には、



既に『養鶴部』の稱も見え、『萬葉集』第十九卷には、『清原歌』がある、曰く、

萬葉集の清原歌 あら玉の、年ゆきかへり、春去れば、花さき匂ふ、足曳の、山下とよみ、おちたぎち、  
 ながるさきだの、河の瀬に、あゆこさばしり、島つどり、うがひとまなへ、鶺鴒さし、なづさひゆけば、  
 わぎもこが、かたみがてらと、紅の、やしほにそめて、おこせたる、衣のすそも、とほりてぬれぬ。

反歌

としのはにあゆしはしらばさきたがは鶺鴒やつかづけて川瀬たづねむ

と、此の中の鳥つどりは鶺鴒の異名であり、且つ枕詞ともなつて居り、『さきたがは』は群田川で越中の國の地名、これを以て見ても、北陸には餘程古くから鶺鴒といふものが行はれてゐたことがわかる。また鶺鴒の場所としても大和の吉野川、伊勢の盧城川、越前の叔羅川などが現はれ、美濃には早くから『鶺鴒郷』の名が聞えてゐた。山部赤人もなほ『萬葉集』に

阿部の鳥鶺鴒の住む磯に寄する浪間なくこのごろ大和しおもほゆ

玉藻刈る辛荷の島に島回する鶺鴒にしもあれや家念はざらむ  
 などの作を遺してゐる。

長良川の鶺鴒 併しながら、鶺鴒の最も盛な所としては、矢張り美濃の長良川が第一で、これは土地での名物となつてゐるばかりでなく、日本の年中行事の一として、名が世界的に轟いてゐる。

此の長良川で使ふ鶺鴒は、尾張國知多郡篠崎の海岸で捕へる海鶺鴒に限り、これを冬の中に四で誘きよせ、捕へると直ぐ目を縫ひ合せて長良村に送り、眼を開かせ、羽を切り毎日槍繩をつけては川中を游がせ、二週間程これをさせてから古い鶺鴒の仲間に加へ、魚を捕る方法を習はせる、これを『餌がひ』と稱へ、まだ人に慣れない荒鶺鴒の中を『嘴掛け』と呼ぶ、かうして訓練すること二年位で、鶺鴒に使ふことが出来る、そして一羽の壽命は凡て十六七年とせられて居る。

鶺鴒舟と鶺鴒匠 鶺鴒を使ふのは鶺鴒匠である、鶺鴒匠は頭巾を風折烏帽子のやうにかぶり、胸あてをかけ、腰袋を纏ひ、手に繩を握る、船の舳には八尺ほどの火皿の中に松明が紅蓮の焰を吐いてゐる、鶺鴒匠が一人で操縦する鶺鴒の数は十二羽であるが、中鶺鴒匠の頃では四羽位しか操縦出来ない、鶺鴒船の中には、鶺鴒匠が一人、中鶺鴒匠が二人、船頭が二人乗込み、月のある夜や、雨後を除き、毎年五月十一日から十月十五日まで行ふことになつてゐる。

鶺鴒の繪 此の鶺鴒の情景を繪にしたものでは、曩に擧げた川合玉堂氏の作が、中々の大作である、これは第十二回帝展の出品で、氏が態々同地に臨んで具さに研究を重ねたもの、それから第一回七絃會に前田青邨氏が出品したもの、水墨を基調とし、氏一流の雄勁な線の活躍に依つて纏めあげられたもの、此の筆致はあまり類例を見ない、近藤浩一路氏の作は、水墨で、濕ひのある筆致、殊に洋畫の遠近法などを極めて巧みに應用した立派な作。



十畝氏の『玄明』 荒木十畝氏の『玄明』は人物を現はさず、作業を終つた鴨の憩ひの瞬間を寫したものの、暗の夜に、燃さしの篝の光ももの寂しい、そして船ばたに翼を休める鴨の姿には、何か人生の一面を暗示してゐるやうにも思へる。

面白うやがて悲しき鴨舟かな  
と、芭蕉の名句も、繪にしたら、やがてかうした一場面を描き出すことであらう。

## 二九 鳩 (には)

鳩の姿 鳩は夏の季節によく畫かれる著名な水禽で、普通に、『かひつぶり』の名で知られてゐる、漢字で書くと鴝鳩で、鴝とも記し、刀鴨、油鴨の異名もある、俗に『むくつちよ』『一町くぐり』『八町もぐり』などいろ／＼の方言もある、何れにしても、巧みに水を潜るといふことから來てゐるのであるが、刀鴨、油鴨といふのは、此の禽、脂肪が豊富なので、此の脂肪を刀劍に塗ると錆びないといふので、かうした異名がつけられたわけである。

その種類 動物學上では、『かひつぶり』科といふ一科を爲し、普通の『かひつぶり』即ち鳩の外に、『はしじろかひつぶり』『赤あしかひつぶり』『耳かひつぶり』『かんむりかひつぶり』などがある、普通の『かひつぶ

り』が最もよく知られて居り、夏も冬も、本邦で見られるが羽色が著しく異つてゐる。

鳩の浮巢 その巢は有名な『鳩の浮巢』で、水草など集めて巧みに作り、これに三個乃至六個の白い卵を生み、巢は水のまに／＼に浮いてゐる、親鳥が巢を離れる時は、また水草など採つて來て蔽ふて置く、その産卵營巢は夏の交なので、俳諧では、唯鳩といふ時には秋の季節に入れてゐるが、鳩の浮巢といふ時は、夏の季節としてゐる。

色彩と形態 普通の鳩、即ち『かひつぶり』は、小鴨より小さく體よく肥え、嘴は短かくして鋭く、その基部から眼にかけて、小さい白色部のあるのが著しい特長である、色彩は夏と冬とは、全く變つてしまふ、即ち夏は背が黒褐色で、腰の邊淡い栗色、胸は褐色、頬から頸にかけて赤栗色、腹は白色である、これが冬になると、背の色も著しく淡くなり、頸の邊の赤栗色も淡い褐色となり、胸など白くなつてしまふ、かうした感じから、繪畫などでは、冬の季節にこれを畫かず、多く夏の季節に畫くわけであり、蹠足も此の鳥の特長の一である。『はしじろかひつぶり』や、『み、かひつぶり』『赤走りかひつぶり』など、それ／＼に形の面白味はあるが、普通種に比し數が少いから、自然畫人などの寫生に載らず、従つて作品に現はるゝことも少いのである。

宗達の名作 何處の湖にも沼にもこれが姿を見、東京ではお濠などによくこれを見受けるが、繪畫に現はるゝ時には、蓮の花に添へられる場合が最も多い、その代表的作品としては、宗達の『蓮花馬回圖』と『蓮花



水禽』とを擧げなければならない、前者は酒井正吉氏の所藏で、宗達の作中でも有名なもの、この馬回は鳩の異名であらう、羽色を夏鳥として見ると少しくそくはぬ所もあるが、形は正しく鳩で、蓮の墨色の素晴しさは何人も驚くばかりである、後者は前山久吉氏の藏で、前者ほど高踏的ではなく、やゝ説明的になつてゐるが、宗達の作中優れてゐるものであることはいふまでもない。

**雪信の作** 珍しい作では、狩野雪信に燕子花これを配したのである、梅と鶴と中に靈昭女を畫いた三幅對の一つであるが、これも中々よく畫けてゐる、秋暉には『花溪游禽』と題して、芙蓉咲く水邊に鳩が游泳してゐる處を畫いた作があるが、少しく硬く情味に乏しい嫌がある。四條圓山の作にも數あるが、前立て、擧ぐる程のものもない。

**紫峰氏の蓮** 現代の花鳥畫に就いてこれを見る、その最も印象の深いのは、榊原紫峰氏の『蓮』である、これは曾て國畫創作協會に出品されたもので紫峰氏はこれを畫かんが爲め、毎朝未明に巨椋池に赴き、その静寂なる氣分を畫かうとしたもの、夢のやうに咲く蓮花の傍には、一羽の鳩が將に水を潜らうとしてゐる、情景一致誠に得難い作である、氏には此の外、枯芦の間に鳩を畫いた作もある。

**大觀氏の紅蓮** 横山大觀氏が、第八回の院展に出品した『紅蓮』にも一羽の鳩が畫かれた、徐烈張りの大作で、當時有名なものであつたが、大正十二年の大震災に鳥有に歸してしまつた、此の紅蓮の雄大さ、鳩の活躍ぶり、共に忘れられぬ印象をとめてゐる、小品には、眞菰に鳩を畫いた作もある。

此の外、荒木十畝氏には燕子花に鳩を配したものがあつた、堅山南風氏が第十五回の院展に出品した『微風』は蓮池を畫いたが、鳩の姿態面白く、中村岳陵氏も同時に『流泉四題』を出品し、その中の『渦旋』には此の鳥が重要な役割を勤めてゐる、田中咄哉州氏も好んで鳩を畫く、展覽會の出品にも二三回之が畫かれたのを記憶してゐる。

**鳩の文學** 文學の方面を見る、古く『萬葉集』を見ると、四卷に『天皇に獻れる歌』として、

鳩鳥のかづく池水こゝろあらば君に吾が戀ふる情こころ示さね 大伴 坂上郎女

があり、また十一卷には

念おもふにし餘りにしかば鳩鳥の足あし沾れ來しを人見けむかも 柿 本人 鷹

がある、『かつく池水』といひ、『足沾れこし』といふ中に、此の鳥の習性が見える、鳩の足は瓣足で、一指一指、膜のあることも著名である。

**浮巢の歌** それから浮巢も昔の歌人のこゝろを動かすこと深かつたと見え、よくこれが歌はれてゐる、『夫木集』の中にも

唐崎やにほの浮巢のいかにしてさすらひわたるよをたのむらん 順 德院 御製

蘆の葉につなく浮巢も氷りつゝすみあらしたる冬のにほ鳥 土 御門院 御製



みしまえのにはの浮すもみたれ蘆の末葉にかゝる五月雨のころ  
浪の上に行へもしらぬ浮葉かなすたちにはの雛どり  
などある。

一八四  
家隆卿  
家長朝臣

俳句にも面白いのが澤山ある、二三擧げて見やう。

鳩の巢の一本草をたのみ哉  
鳩の巢の浮出けり宵月夜  
内川や鳩の浮巢になく蛙  
鳩の巢に親鳥戻るおもみ哉  
鳩の巢に鳩のとまりて眠りけり

一  
成美茶  
其角  
吟江  
楊堂

三〇 秧 雞 (くひな)

夏川の水葱ニホヒおもだか花咲きて涼しき暮に水雞啼くなり

千種有功

扉を叩く秧雞 夏の夕から曉かけて、かたかたと戸を叩くやうな秧雞の聲、耳を澄せば船ばた叩く水の音にも交つて何となく物思はせる、その聲を扉叩く音になぞらへて、人待つ戀心などに通はせたのは流石に多

感な我が祖先の歌人たちである。

くひなだにたく音せば櫃の戸を心やりにもあけて見てまし  
その聲を聞くにつけても、直ぐ偲ばれるのは枕に通ふ水の音、永福院はこれと  
かげしげき木の下闇のくらき夜に水の音してくひな鳴くなり  
と詠じてゐる。

和泉式部

秧雞の歌 更に田園情趣の深い作を擧げて見ると、井上文雄家集の

あふち散る林の奥の水車臼つきやめば水雞鳴くなり  
室の戸のあか井の末のいさら水あふちこぼれて水雞鳴くなり  
などゝなつて、益々詩趣深くなつて来る。

芭蕉の句と水雞塚 俳句の方では、夏の重要な季題となつて、古來幾多の名吟が残されてゐる、先づ芭蕉の

水雞啼くと人のいへばやさや泊り  
はその随一で、此の句は『有磯海』に收められ、『山田氏の亭にとめられて』と題してゐる、佐屋は尾張國の海東郡にあつて、此の句以來水雞の名所となり、いまでも水雞塚が建てられてゐる。  
芭蕉はなほ、大津の湖畔亭でも、  
此の宿は水雞も知らぬ扉かな



の一句を遺し、又『白川に住何云に文をつかはすはしに』と記して一句

國守の宿を水雞にとはふもの

を『伊達衣』の中に録してゐる。

秧雞の句 既に芭蕉が、かうして名句を遺してゐる、その衣鉢を傳へる人々に、名吟のあるのも偶然では、ない。

夜あるきを母は寝ざりける水雞哉

これは其角の句、親心さこそ思はれる、此の外

水音は水に戻りて水雞かな

月の出て川筋白し水雞鳴く

木母寺を晝から叩く水雞哉

四阿の闇をめぐるや鳴く水雞

など、とり／＼に面白い。

千	代	女
召	波	
白	雄	

秧雞のいろく 秧雞は秧雞科といふ一科を爲し、鶉など、共に水邊の禽の一つであるが、『くひな』と呼ばれてゐるのも澤山ある、『大くひな』『ひめくひな』『縞くひな』『緋くひな』などは我が國で見られる種類

であるが、此の外に『臺灣くひな』『南洋大くひな』『高麗緋くひな』『鼠くひな』など、いふものもあつて、それ／＼特長をもつてゐる。

扉を叩くのは緋秧雞 扉を叩く音に、その聲を擬せられて居るのは此の中の『緋くひな』で、一名を『夏秧雞』ともいふ、日本では北海道から本州、四國九州、朝鮮邊にまで分布し、薩南の種子島や屋久島にも見られるといふ、その形は鶉に似てゐるがそれほど美しくなく、額板もなく、頭から背にかけては橄欖褐色、顔から胸、腹へかけては葡萄酒色、嘴は緑褐色、脚は紅色を呈してゐる、雌は全體に黒味が勝ち、雌は眞黒である、その扉を叩くやうな啼き聲は、雄が繁殖期に雌を呼ぶ聲に外ならない、水邊に巢を營み、八個から九個ほどの卵を生み、これが巢立つて雛となり成鳥となる頃、時は既に秋、彼等は遠く南洋の方へ去つて越冬する。緋水雞が南へ去ると、入り代りに現はれるのが冬水雞で、これは嘴も緋水雞より長く、全身褐色に多くの斑點があり、脚は淡綠色で矢張りよく發達してゐる、姫秧雞は秧雞の中では一番小形で、日本では夏にだけ見られる、過眼線が褐色で、褐色の羽毛に白と黒との斑點があり、尾筒には白い縞が横に幾筋かを劃してゐる、幼鳥は下部が白いが、成鳥は鼠色となる。

秧雞の繪 文學ではかうして情趣深いものとなつてゐる水雞も、繪畫の方では至つて貧弱である四條派の人々の中で、景文に菱に水雞を添へた瀟灑な作がある、それから景年には雨中の葉櫻に秧雞を添へた作があ



るが、前の作には遠く及ばない、探幽にも芦に水雞の名幅があつて異彩を放つてゐる。現代の人々の作では、田中咄哉州氏が昭和十年の個展に出品した『水邊明く』が餘情の深い作であつた。

◇  
水雞の鳥の夜すがらに、たゞきあけて置いてさ、はやさみだれ、雨に色ますあやめのことわいのく、山ほととぎす、またの東雲もないものか、何ぞのやうに、待つ宵く  
——松の葉——

### 三一 鵒 (ばん)

**北齋の名作** 香雪齋藤田男爵家の所藏品の中に、北齋の『茨花鳥雞』といふ作があつた、茨花といふのは鬼蓮のことで、その下に二羽の鵒が畫かれてゐた、鵒の異名としての鳥雞といふのは、出所不明であるが、畫かれたのは將に鵒であり、これに鬼蓮といふ餘り人の畫かぬ植物を配してゐる點などが如何にも皮肉で北齋らしく、作としても甚だ面白いものであつた。

**愛らしい小禽** 元來鵒といふ鳥は、形も愛らしいし、その色彩も美しいので、繪にはよく現はれて來る、先が黄色で基部から額板へかけて紅色の嘴、頭から背へかけて黒が、つた橄欖色、そして比較的大きく發達した綠色の脚、その長い指翼角と上尾筒に印象深く見える白羽、かうした姿で水澤などに餌を探してゐる處

などは、全く繪のやうである、そこで自然これが繪になるのである。

**鵒と繪畫** 著者の手記にある鵒の作を擧げて、松本双軒庵舊藏の應翠筆『藤に鵒』、外山家の來章の『花菖蒲と鵒』杏所の『芦鵒』など、それ／＼各家の特長をよく現はし、是眞にもこれと同じやうな芦に鵒の作がある。現代の人々では、昭和九年京都美術展覽會に出品された今中素友氏の『はぐくみ』は、鵒が雛を育て、ゐる珍らしい構圖のもの、昭和八年には郷倉千靱氏が個人展覽會に水禽と題して之を描き、第十五回の帝展出品品谷口英雄氏の『淀の城址』には、傍に繫いだ船の中に鵒が潜んでゐる。

◇  
**敏捷な活動** 鵒は秧雞科に屬し、北海道から本州へかけて棲息し、九州にも分布してゐる、雛は黒く、成鳥は前述の如く美しいが、冬はその紅色の部分は變化してしまふ、水中の小動物などを餌とし、非常に敏捷な鳥であるが、飛翔するより歩行に強い、それはその指の發達を見ても知られる、その性、鬭争を好み、雛の中から、性質が荒く、絶えず挑みあつてゐる。普通の鵒の外に大鵒がある、形大きく、似てはゐるが、嘴から額板白色で、極くかすかに紅を帯びて居り、そして足が辨足である。

**鵒の額板** 此の嘴や額板が此の鳥の特長となつてゐる處から、支那には梅首雞の名がある、中々に洒落れた名ではある、それから方目鳥、田雞、骨頂など、いふ異名もある、獵鳥として味のよいのでも知られてゐるが、飼ひ鳥としてもよく人に馴れるので愛せられる。昔は、和歌などに現はれた『をすめ鳥』を鵒に充てた



學者もあつたが、をすめ鳥は鶺鴒ではなく溝五位の別名であり、又、河鳥といふ説もあるが、河鳥は別にそのものがある。

◇

鶺鴒の文學 鶺鴒はかうしてよく知られてゐる鳥にも拘らず、割合に文學上には縁が遠い、だが俳句の方では流石に夏の季題に入れられて、有名な

鶺鴒一羽御狩にもれていく程ぞの外

鶺鴒鳴くや西日はづる、菅の中

澤潤れて鶺鴒の渡り來ぬ山路草

鶺鴒のよる小窓設けつ草の庵

鶺鴒鳴くや曉の忍沼ひろくと

鶺鴒啼て淋しき晝や葦採り

など、それ／＼に趣きが出てゐて、此の鳥の姿もよく寫されてゐる。

鶺鴒の歌 古歌などには全く見えない、それは多く水雞の方に興を惹かれたからであらう、新しい短歌の雜誌の中に、珍らしく三首ほど見出した、次に引いて置かう。

白雄

雅窓

藍雨

青々

秀峰

村雨

鶺鴒の子は遠く遊ばず垣の根の霜とけ土にかけうつりつ、  
鶺鴒の子は水を浴ふると池水をかきやき散らし幼かりけり  
鶺鴒の鳥はいづこと知らぬ垣の根のおどろ明るく冬日透くなり

山下陸奥

### 三三 鶺鴒 (からす)

忌まる、鳥 鶺鴒は都會といはず、鄙といはず、到る處にその姿を見せてゐるが、ともすれば嫌はれ勝ちである、それは、その羽色が眞黒で美しさをもたぬこと、啼く音の濁つて感じのよくないこと、その食性が婪貪で、他動物の腐肉死屍、おかまひもなく食べること、庭園や山林の樹木に群れてその樹を枯らすこと、殊に啼き方に依つては、いろ／＼と凶事に結びつけられ、鳥啼きというて忌み嫌はれる。

その一面 併しながら、鶺鴒は決してさうした一面ばかりでない、太陽の異名を金鳥といつて、その象徴とし目出度いものもなつてゐるし、夜明け鳥も、ほんのりと曙の空に漆黒の姿して飛ぶさまは感じのよいものであるし、八咫鳥の傳説は、金鶺鴒の由來と共に、我が建國の物語に少からぬ光彩を添へてゐるのである。

鶺鴒の名 更に鳥は昔から『鶺鴒』の文字を以て呼ばれてゐる位で、雛が親に育てられて成鳥となると、今度は自から餌を求めて來て、これを啄み、親鳥の嘴にさし入れて養ふ、俗にいふ反哺の孝である、事實の有



無は姑く措いて問はぬとしても、かうして親孝行の鳥とされ、三枝の禮ある鳩と並び稱せられて来たのである、そののみでなく、その食性の婪貪にして、死屍腐肉と雖もこれを食ふ習性は、人の生活の上には、一種の清掃夫となつてくれるもので、衛生の上から見ても、鴉の勞を多とせねばならぬわけである。

鴉の種類 鴉の種類は、世界中に分布して、その數、百八十種に及ぶといふが、日本で見られるものは種々僅かである、いま「からす」といふ名のついてゐる種類を擧げると

嘴太鴉、渡り鴉、嘴細鴉、をさ鴉、こくまる鴉、星鴉、嘴長星鴉、深山鴉

等である、此の中、嘴太鴉は最も廣く分布し一般に知られてゐるもので、東京邊で見られるものは此の種類で、名の通り嘴が太く、全身黒色であるが、背面には紫黒の光澤ある金屬性の色彩がある、都會にも棲息すれば、田園にも巢を構へ、海岸にも居る、渡り鴉は日本では北海道、千島、樺太あたりでなくては見られぬもので、鴉の中で一番大きく、顔も瘡猛である、渡り鴉とは呼んでゐるもの、さう遠くへ渡るものではない、嘴細鴉は老鴉小嘴鴉なども呼び、里鴉とも呼ぶやうに人里近く到處に見られる、嘴太に比して嘴は細いが、それでも他鳥に比すると嘴は大きい方である。をさ鴉は琉球に産する特別のもので、形小さく長氏の發見にかゝるので、その名を冠してゐる、以上は全身すべて黒色であるが、こゝに深山鴉といふのがあつて、嘴の基部や頭の羽毛が抜けて裸出してゐる種類がある、深山鴉と名づけられてはゐるもの、深山には居ら

ず、海濱に多いといふのも妙である、黒丸鴉は唐鴉とも呼ばれてゐる、下腹部白く、上部は紫黒色、首は背にかけて白色の環状を爲す、形は小形である、星鴉、嘴長、星鴉は黒褐色に白色の斑點が散布し、他の種類とはまるで變つた姿である。この外、河鴉があるが、これは名だけ鳥というてゐるが、全然別種に屬する。

東洋畫と鴉 鴉はかうしたあまり好かれぬ鳥ではあるが、繪にかくと誠に面白い、殊に東洋畫では、墨色を出すことが一つの技となつてゐるので、鴉の如きは、その方面の技を發揮すべき好個の畫題といはねばならない。

牧谿の濡鳥 その好適例として、川崎男爵家舊藏の牧谿の「濡れ鳥」を擧げる、これは、支那人のよく畫く嘴の白い鴉で、一羽は空を翔り、一羽は水に浴してゐる、その鴉二羽の描寫は如何にも無雜作であるが、鳥の姿はよく活躍し、翔つてゐるものには、かすれた渴筆を利用し、水浴の方には潤澤な墨が使はれ、よく題意を活かしてゐる、抱一が箱書をしてゐる名幅である。

宗達の名作 宗達にも有名な一羽鴉がある、淡墨で輪廓を一部描き、上墨で纏め、嘴を思ひ切つて大きくし、嘴太の特長を強調した、大徳寺の大龍和尚これに「寧來御史府中栖、莫向昭陽賈裡啼」と讀してゐる、如何にも宗達らしい面白い作である。

一休の自畫賛 珍しいものとしては、尾州徳川家に一休禪師の「飛鴉自畫讚」がある、遠州の箱、眞珠庵



の極めのある名幅で、讚に曰く

萬歲榮華一夢春、春風落花起紅塵、玉顏青鬢終憔悴、怨在寒鴉不在人。

と、また山陽にも面白い「枯木寒鴉」の作がある、これは松本双軒庵舊藏である、倪雲林風の枯木數幹に飛墨數點、これが鴉である、讚して曰く

倪迂作竹、自題有言、我畫竹、觀者或以爲蘆荻、或以爲楊柳、今余爲鴉、人必不認爲鴉也、然夕陽已沒、蒼烟罩林、當此時、空際點々、何辨翼脛尾。

洵に空際點々、何辨翼脛尾である、山陽ならではと微笑を禁じ得ない。

華山の傑作 華山には「春柳雨鴉」の名作がある、これは「秋柳風露」との對幅で、長野の小坂順造氏の舊藏である、風と雨と柳を畫きわけ、これに黑白の鴉を配す、殊に、雨に濡れて柳の枝間にとまる鴉九羽のそれ／＼の形の面白さ、これは華山三十九歳最盛時の作といふ、如何にも味のある作である、此の外、醍醐三寶院の什寶たる等伯の群鴉屏風も逸することは出来ない、畫面一杯に十數羽の鴉を畫いたのであるが、姿態千變萬化を極め、然も筆力雄勁を極めてゐる。

此外蕪村には、「雪中鴉圖」のよい作があるし、同じやうな構圖で、氣分のまるで變つてゐる岸駒の作もあり、蘆雪には、鳥と雀と双幅になつてゐる面白い作が目に残つてゐる。

墨仙氏の佳作 近代及び現代の人々では、永井一禾氏が鴉を得意として、盛にこれを書いたものだが、特に名作として推賞されるやうな作はない、島田墨仙氏には、水墨の「濡れ鴉」の名作があつた、降り頻る雨の中に、鴉が一羽濡れて立つた簡單な構圖であつたが、如何にも情趣の豊かな作であつた、この作は巴里に於ける日本美術展覽會に出品され、彼地に残つてしまつたので日本では見られない。

百穂の作翠嶂の「飢餓」 平福百穂氏の遺作中には、柿と鳥の大幅がある、水墨で柿を手一杯に畫き、朱果を點し鴉を極く大膽に畫いたもの、百穂氏の味がよく出てゐた。榊原紫峰氏にも「雪中群鴉」の作がある、その數十羽の鴉が實に行届いた寫生に依つて活躍してゐる、西山翠嶂氏にも、近頃評判のよかつた二つの鴉を主題の作がある、一は「飢餓」と題したもので、鴉が數羽、一匹の蟲を奪ひ合つてゐるもの、かうした構圖の作は、支那の古畫にも類例はあるが、筆致は洗練されたものである、いま一つは昭和九年の珮々會に出品されたもので、梧桐の落葉の中に一羽の鴉を畫いた、これもよい作であつた、堅山南風氏には「曉露」と題した作がある、夕顔畑に鴉の下りた處を畫いたもの、鴉の姿態眞に迫り、奥村士平氏が昭和八年の日本美術院出品の「鴉」も、よく寫生されたもので、これは枯柳に五羽の鴉が配されてゐた。更に石崎光瑤氏が、第十二回の帝展に出品した「惜春」その前年望月春江氏が出品した「朝露の畑」は、南瓜畑に鴉を配したものであつたが、矢張り評判のよい作であつた。



枯樹寒梢凍欲冰、野鴉翻影若爲情、錦鳩呼雨煙林外、紅杏香中過一生。

王 惲

月明無葉樹、霜滑有風枝、啼澁飢喉飢、飛低凍翅垂。

白 樂 天

からすとふ大輕率鳥の眞實にも來まさぬ春を兒ろ來とぞ鳴く

萬 葉 集

朝鴉早くな鳴きそ吾背子が朝けの容儀見れば悲しも

同

### 三三 鴿 (せきれい)

鴿の種類 鴿は、鴿科に屬する小鳥で、普通我々の眼に多く觸れるのは、黄鴿、背黒鴿、白鴿の三種であるが、此の外にまだ、岩見鴿、頬白鴿、爪長鴿、臺灣白鴿などがある、この中、黄鴿は最も多く、人家の附近にも現はれ、東京邊では、時に電線などにとまつてゐるのを見かけることすらある、背黒鴿は山間谿谷や、野邊に多く、人家に近い處には少く、白鴿は多く山間に棲息するが、前二種よりは少い。繪畫などに畫かれるのも、此の三種に限られてゐるやうなものである。

親しみの深い鳥 鴿は昔から藝術には縁が深い、殊に繪畫にはよく現はれて來る、何故に此の鳥が斯く

藝術に縁が深いかといへば、『古事記』にその名が最も早く現はれてゐるばかりでなく、その形が實に美しいからである、嘴細く尾長く、頭から尾へかけこの優しい線、脚の形、それは小禽として實に典型的のものであり、黄鴿にしても背黒鴿にしても、色彩亦美しい、それ故、山間谿谷など畫いた作にはよく岩の上などに背黒鴿が點出されるし、庭や野の植物などに、黄鴿の配合せられる場合も少くない。

その形態習性 此の三種の色彩を今少し精しく記すと、背黒鴿は、頭から背にかけて黒く、尾も亦黒いが、額から眉が白く、下腹も亦白く、嘴細く、脚は細いが指がよく發達してゐる、白鴿は一寸背黒に似てゐるが、頬の邊に白色の部分が多く、幼鳥時代には鼠色してゐるので、薄墨鴿の名がある、成鳥でも冬は薄くなる特長あり、時に濱邊などに現はれる、黄鴿は腹から尾へかけて黄色であり、白と黄と黒とが程よく調和を見せてゐる。黄鴿と白鴿は、カムチャツカ、シベリヤ方面で繁殖し、南の方へ渡る、黄鴿は本州の一部でも繁殖する、背黒は本州でも北海道でも繁殖し、臺灣邊まで渡るものがある。

鴿の古名雅名 鴿は、和名を『にはくなぶり』或は『しりたゝき』と呼ぶ、古歌の『稻負鳥』も、鴿のこ

とあるのを、古歌に  
伊弉諾伊弉册二神時、有鴿飛來搖其首尾、神見之而學得交道。



逢ふことをいなせ鳥の教へずば人も戀路に惑はましやは  
などといふてゐる、實際、岩の上などにあつて、微妙に尾を動かす處は他鳥にはあまり見られない處である  
稻負せ鳥 この稻負はせ鳥が鶉かどうかといふことは、古來學者の間にもいろ／＼と論ぜられて來たの  
であるが、最近では全く鶉と決定したやうである、和歌の方では、なほ「いもせどり」とも呼び、また方言  
には「いたゞき」といふ處もある。併し明治以降の歌人は、矢張鶉をそのまゝに詠じてゐる。

あかときに鶉來り遊ぶなり磯のホテルの石の階段

與謝野 寛

鶉が朝の露臺になける時ほのぼの山はくもりなりけり

吉植 庄 亮

風を強み瀬木にとまるとたゆたへる鶉の尾に川波あがる

同

鶉の來鳴くこのごろ籾柑子早いつきぬ冬のかまへに

伊藤 左 千 夫

わが庭の檜葉のしげみに春さればせきれいの來て疾く巢喰ひけり

阿 部 鳩 雨

俳句の鶉 俳句では、秋の季節になつてゐる、人に依ると冬の季節に入れてゐるが、鶉が多く人の目  
に觸れるのは秋になつてからなので、秋に加へるのが正しいとせられてゐる。

世の中は鶉の尾の隙もなし

凡 兆

鶉や垢離場へ下る 岩傳ひ

横 凡

鶉や潮來 教へて 岩傳ひ

蓼 太

鶉よこの笠叩くこと勿れ

子 規

菊の花見て來て居るか石叩き

可 南 女

など、それ／＼に面白く、好箇の畫題となつてゐる。

狩野派の繪と鶉 繪畫に現はれた鶉を見ると、狩野派などには簡楚な筆で、かなり氣の利いた描寫を  
見せてゐる、古く元信の『雪笹鶉』など見ると、その呼吸がよくわかる、永徳にも竹と鶉と双幅になつて  
ゐるのがあるが、中々味がある、常信は『四季花鳥屏風』の中に、これを畫いてゐるが、よく寫生してゐる、  
四條圓山では、應舉によい作があり、ビゲロー氏蒐集品にあつた芳園の中蓬萊、左鶉、右鴛鴦の三幅對の  
如きも、四條派としての特長を最もよく現はしてゐる、景文は、芙蓉に鶉を配し、土佐で光起は、蓮に鶉  
を畫き、田中訥言は、菊に鶉を畫いて、何れも秋の情趣を寫さうと試みてゐる。

雅邦の作 近代では、雅邦がよくこれを畫いた、鶉の姿など、如何にも洗練された筆で、心憎いほどよ  
く活躍してゐる、或は蘆の葉の間に畫いたり、岸波に一羽添へたり、紙本の半折などには中々名品がある。

大觀氏の作 現代の作家で、よく鶉を畫くのは横山大觀氏である、第十八回日本美術院展覽會に出品し  
た『紅葉』六曲一双の如きは、絢爛目を眩する程の美しさであるが、その波の上には一羽の背黒鶉が飛んで  
ゐる、此の波と、鶉を擴大したやうな作が、別に『鶉』の題下に個人展覽會に出品されたことがある、川



合玉堂氏もよく之れを畫くが、その代表作とも見るべきは、淡交會に出品された『河原の夏』で母子草咲く河原にこれを書いてゐるのが情趣深く、荒木十畝氏も『春汀鶉鴒』などの題下に野梅咲く水邊にこれを書いた作が多く、昭和八年の讀畫會展覽會出品『氷田』の如きは、紙本に水墨で、面白くこれを書いてゐる。  
 廣業と栖鳳合作屏風 竹内栖鳳氏にもよい作があるが、曾て寺崎廣業が、六曲一双に梅と竹を描き、『これに添へる鳥は栖鳳先生に』と指名されたので、栖鳳氏は梅の幹には鶉鴒、竹には雀を畫き添へたが、此の鶉鴒など實によく急所々々を掴んでゐる。

この外、鶉鴒の畫かれた作品を擧げて見ると、凡そ左の通りである。

柳原紫峰	清流鶉鴒	畫集所載
川端龍子	白流	昭和六年個展出品
荒井寛方	霧	東京會出品
伊東深水	淨晨	帝展出品
小林古徑	鶉鴒	三越繪畫展
高木保之助	早瀬の波	十二回帝展出品
加藤英舟	巨椋早涼	同上

### 三四 雀 (すゝめ)

野鳥の中で、凡そ雀位人に親まれてゐるものは無からう、人里に群れ、人家に巢喰ひ、庭に戯れ、田畑を漁る、かうして人に近づいて生活してゐることから、藝術とも自然交渉が深くなつてゐる。

花鳥畫は雀から 殊に注目すべきは、東洋畫獨特のものといふ花鳥畫は、抑も雀から創つてゐるといふ一事である、元來、東洋畫も、その極く古いものには花鳥畫といふものはなく、六朝の宋の時代に顧景秀、劉胤祖があつて『鶉雀圖』を書き、北齊の劉殺鬼は『闘雀』を描き、唐に入つて劉孝師が鳥雀の動作を畫いたといふこれらが、花鳥畫の先祖ともいふべきもので、それから、花卉に翎毛蟲魚を配するやうになつたといふ、鳥類を畫かうとしたものが、先づ雀に眼をつけたことは、極めて自然なことであり、當然のことと思ふ。

かうして花鳥畫が雀に端を發した位故、雀を畫いた名作など割合に多く傳へられてゐるのである。  
 名作『雛雀圖』その中で、有名なのが淺野侯爵家所藏の無落款『雛雀圖』である、籠の内外に五羽の雛雀を配したもの、小品ではあるが、その生態の描寫眞に迫るものがあり、宋朝花鳥畫の代表的傑作の一と稱せられてゐる、牧谿にも『竹雀』の面白い作がある、墨色で十分に畫き出してゐる處流石であり、周之冕にも『桃雀』の極密の作があり、井上侯爵家には、孟玉圃の『竹雀圖』があつた、此の外、宋代から清朝に至るまで幾多



の名家によつて畫かれてゐる。

雪村の『竹雀』 我が國の畫人の作にも、雀は殊に多い、竹雀、梅花群雀、雪中喜雀、いろいろに畫かれてゐる。中にも雪村の『竹雀』は、雀の飛翔する形に工夫を凝らしてゐるが、此の風は、更に狩野派あたりに及ぼしてゐる、狩野派といへば、玉樂に有名な『梅雀圖』がある。これは團男爵家の秘藏で、柳に鶴と双幅を寫してゐるのであるが、此の雀は眞に迫つてゐる、玉樂は小田原北條家の畫師で、永祿頃の人といはれてゐるが、その詳傳は不明である、松花堂も亦よく『竹雀』を畫いた、これは雪村張りで、雀の姿態などには雪村の遺響がよく見える、元信、永徳、探幽、常信あたりにも竹雀は枚舉に違もない。

華山の傑作『睡猫驚雀』 南畫では、華山に傑作がある、その隨一は菊池惺堂氏舊藏の『睡猫驚雀圖』である。畫面の大部分は、大なる太湖石を以て占められてゐるが、その途中に白猫が睡り、上は二羽の雀が、猫をのぞき込んでゐる、猫が主眼であるが、此の雀の姿態が實に素晴らしい、華山は、此の圖に

碧眼烏圖禽有魚、印看驚雀坐階、春風漾々吹花影、一任東郊鼠化鴛除。

と題してゐる、それから埼玉大澤氏舊藏品に『桃花喜雀圖』がある、此の圖には唯一羽の雀を桃花の下枝に配しただけであるが、軀を逆にした皮肉な姿を畫いてよく躍動してゐる、この外、『梅竹双雀』とか『秋花双雀』とかいふやうな畫題のものも少くない、椿山も亦師風を繼いで、『梅竹群雀』などよく畫いた、時に牡丹に喜雀を配したものもある、圓山四條、琳派にもいろいろある。

栖鳳氏の雀 現代の人々では、竹内栖鳳氏の雀が有名である、これは寧ろ大作といふのでなく、一羽二羽位畫いた小品によいのがあり、殊に雛雀の地上に遊ぶ處を畫いたのが世に多く流布されてゐる、兎に角、栖鳳氏の雀といふものは手に入つたものである。

横山大觀氏にも雀の作はあるが、多い方ではない、荒木十畝氏は亦雀を得意とする、芭蕉葉に數羽の雀を配したものなど、誠に手に入つたもの、時に刈り干す稻に雀を點出した『豐稜』の作など、これに畫かれた雀の種々の姿態は寫生の妙を極めてゐる。なほ大作としては、郷倉千靱氏が第十五回日本美術院展覽會に出品した『豐饒群雀』の如き、鳴子の繩にとまつた雀の群れが中々面白い、母子の雀を畫いた作は中村岳陵氏にも、故小茂田青樹氏にもある。

圖案の雀 唯に繪畫ばかりでなく、雀はいろいろの方面に現はれて來る、たとへば、竹に雀は、仙臺伊達家の定紋であり、中に圖案化されたるふくら雀は、子雀の親よりも肥えふとりたる所から名づけられたのであるが、その翼を擴げた愛らしさが、丁度光琳派の千鳥のやうに實に手際よく單純化されて、面白い圖案となつてゐる。

竹と雀の縁 更に雀が繪畫や、圖案に扱はるゝ場合、如何なる植物が添へられるかといへば、何といふても竹である、『竹雀圖』は最も多數を占めてゐる、これは竹林に雀の群棲する自然現象を捉へたものに過ぎない。



いが、一面、竹の緑と雀の褐色が極めて色彩上の調和を保つてゐるにも依るであらう、次で多いのは稻穂に雀である、秋になつて、稻の穂が漸く稔らうとする頃になると、雀は何處からともなく集つて来て此の穂を啄む、そこで農家では案山子を立てたり、鳴子を張り廻らしたりしてこれを追ふ、案山子も鳴子も、かうした役目があるのであるが、それが繪畫的にも非常に面白いので、案山子や鳴子が稲田に描かれる、此の外桃や梅に雀を配したり、或は草原に雀が餌を漁つたりしてゐる所を描いたものは、數限りもない位である。奇抜な例では、景文に玉蘭に雀をとませたのがあり、秋暉には、紫陽花に雀を配したのもある、雪中にもよくこれを描くのは、此の鳥、渡りをせず、絶えず姿を見せてゐるので、かく四季それ／＼の景致に配せられるのである。

◇  
**雀の二種** さて雀は燕雀目の雀屬で、本邦に産するのは、普通種と『にふないすずめ』の二種である、但し

普通の雀でも、専門家の方では、その棲息地により、臺灣雀、樺太雀、朝鮮雀などと分けてゐるが、これは全く鳥學者の方の分類で、一般的には行はれてゐない、『にふないすずめ』は、普通の雀が雌雄全く同色なのに比し、やゝ色彩を異にし、雄は眼の周圍の黒點を缺き、咽喉部の黒色部も少く、雌は全く此の黒色の部分が無い、そして白色の眉がある、『にふないすずめ』の名は、一に入内雀、一に饒奈雀と書く、その入内雀といふ名については、『大和本草』に次のやうな傳説をのせてゐる、それは、實方の中將、罪なくして東北に流

されたが、明け暮れ、都の空を戀ひしたひ、つひにその靈化して雀となり、飛んで都に上り、内裏の臺盤所に入つて食物を漁つたと、それから、此の名がある。

◇

**雀の習性** 雀の習性は既によく人に知られてゐる所であるが、その多く人家の簷に巢を構へる所から、瓦雀の名がある位、また時とすると、非常に群を爲すことがある、それは丁度稻の穂が、これから稔らうとする頃で、八九月の交である、此の頃は、春に産んだ雛が巢立つて盛に餌を漁る時であり、且つ親鳥の方も雛を育てたあとで軀が衰弱してゐるから、これが回復の爲め貪食となるのである、又、一つには、稻のまだ十分に稔らず乳汁のやうな時を雀が最も好むので、全く熟し切つてからは、此の群集もだん／＼少くなつてしまふ、繪畫などに畫き現はす場合には、此の邊の細かい注意も肝要であらう、それから、その産卵時期は春の四五月頃であるが、若しその雛や卵が他の爲めに奪はれたりする時は、直ちに次の産卵をはじめ、故にかうした場合に限つては、別に産卵の時期はないわけである。

**雀の跳び方** その跳び方も特長があり、決して左右の脚を交互に動かすのではなく兩脚を共に動かす、そこで古書にも『躍て歩まず』と書いてゐる。

雀に関する文學、詩歌等はあまりによく知られてゐるし、數も多いからこゝには省く、なほ、これについては私の前著、『鳥』を参照せられたい。



三五 鴿 (ひたき)

鴿の藝術 鴿は藝術上にも、中々深い交渉をもつてゐる、殊に近頃の日本畫のやうに、自然描寫が盛んになつて來ては、勢ひ目に觸ることの多く、そして色彩の美しい鴿などが、取入れられることが多いのである。

二つの分類 さて一口に鴿と呼んでも、鴿と名のつく鳥は、鴿科と、鸚科と分れてゐて、多少形態色彩の上にも違ひがある、即ち、常鴿しやうひたき、瑠璃鴿、野鴿といふやうな、よく知られてゐる方は、純粹の鴿科ではなく、鸚科に屬し、黄鴿、さめ鴿、こさめ鴿、えぞ鴿等が、鴿科に屬してゐるのである、また習性もそれらに違へば、我々の目に入る時期もそれらに違つてゐる。その、主な點を左に記して見やう。

常鴿 常鴿、冬鳥、十月頃に東部シベリヤ方面から渡つて來て、四月から五月にかけて去つてしまふ、その數も多く、人の目に觸ることが多いが、本州では繁殖しないやうである。色彩は、頭から背にかけて灰色、翼の中央に著しい白色の斑あがるので紋付鳥の名がある、其他は黒く、尾羽は中央の二枚丈けが黒く、他は褐色、胸から腹へかけて橙黄色、但しこれは雄の羽色で、雌は淡褐色で頭から背にかけて黒褐色である。瑠璃鴿 瑠璃鴿、これは漂鳥で、本邦でも繁殖する富士山麓あたりでは、六月から八月にかけて營巢し、

産卵する、一巢に大抵四個の卵を生む、色彩は小形で美しく、背は暗青色、腰から上尾筒、雨覆の一部は空色、風切羽と尾羽が褐色、外縁丈けが青い、雌は背がオリブ色で、上尾筒と尾はや、雄に似てゐる。

野鴿 野鴿は夏鳥で、富士山麓あたりでは四月上旬に現はれ、五月から七月にかけて産卵し、九月には姿を見せなくなる、その繁殖期には叢の中に潜る習性があるので、『かやもぐり』の方言があり、鳴聲は低いが清々しい。色彩は夏と冬と著しく變化するので有名である、夏は頭から顔、背にかけて全部が黒く、下尾筒は白く、風切羽と尾羽は黒褐色、それが秋から冬になると、黒い部分が全く赤褐色になつてしまふ、雌は單調で色彩の變化に乏しい。

黄鴿 黄鴿は本州到る處に見られるが大抵四月下旬に現はれ、五月中旬から七月にかけて繁殖を營み、十月頃南方に去る、兩翼を動かし、尾羽を上下する著しい習性がある、色彩は頭から背、尾の先が黒く、顔には黄色の眉があり、咽喉から胸、腰にかけて鮮やかな橙黄色、翼には白い斑點がある、支那には水仙花鴿の雅名もある。

さめ鴿 さめ鴿は夏鳥で、五月頃渡來し、十月頃には去る、その羽色は黒味を帯びた褐色で、腹は白く、雌雄殆んど同色である、小さい昆虫などを常食とする。こさめ鴿は前者によく似てゐるが、形は小さい、四月中旬に現はれて五月から六月に至つて産卵し、十月には南方に向つて去る、形態、色彩、殆んど前者に似てゐるが、さめ鴿には、腹に一寸斑があるが、こさめ鴿に至ると全くこれがない。



此の外、鶺鴒の名のつくもの數種あるが、常に見る著しい種類は以上に過ぎない。

繪には常鶺 鶺鴒はかう種類は多いが、繪などに畫かれる場合は常鶺が最も多い、否寧ろ之れに限られてゐるといふても大過ない、時に黃鶺が畫かれることがあるが、極めて稀れである。灰色の頭部と、背や顔の黒と胸や腹、尾の橙黄色が程のよい調和を見せてゐるからである。

これを畫いたものは古來少からずある、宋代のものにも、木犀の花に此の鳥を畫いた密畫がある、鳥の寫生實に行届いてゐた、これは載せて英文『端方蒐集宋之畫冊』にある、我が朝の畫人の作にも、極めて多い、吳春には、有名な松竹梅の三幅對があり、松に鶺鴒を配し青梅に鶺鴒を點出してゐる、聊か季節が違ふてはゐるが出來は面白い、吉田楓軒翁舊藏に光起の薔薇と鶺鴒の作がある、これは取合せが變つてゐる。

珍らしい楊月の作 雲谷派の楊月にも、珍らしく此の鳥を畫いた作がある、もと松浦伯爵家の藏幅で、中に嚴子陵、右に柳と鶺鴒、左に樺と此の鳥を畫いた三幅對で、筆勢中々に雄勁、構圖も變つてゐる、小田海隱には『時雨紅葉』の美しい作があり、常鶺を飛ばせてゐる、矢張り珍らしいもの、一つである。

現代の人々の畫いた話 現代の人々の作は擧げて數ふるに違もない、荒木十畝氏の大作の一つ、『殘照』には石榴や山茶花の中にこれを畫き、別に『石榴小禽』の作もある、福田平八郎氏もよく此の鳥を畫く然も氏は此の鳥の形に工夫して、細長く裝飾味を加へて畫いてゐるのが、京都では一つの型となり、後藤を拜するも

のも少くない、『野の雪』はその代表的なもの、上村松篁氏の十四回帝展出品『春園鳥語』にもさうした影響が見えた。

此の外、川端龍子氏は『春園』と題して、草上に之を配し、西澤笛畝氏は、『仙桃』にこれを點出し、富田溪仙氏は『紫陽花』に之を描き、堂木印象氏の『早春』と題した作には梅に鶺鴒を畫いた、此の外神原紫峰氏の『牡丹小禽』の作も之であれば、森白甫氏の『春雪』にも、萬年青と野薔薇に鶺鴒が見える、岸浪百艸居氏の、山南天に配した作なども珍らしい構圖といふことが出來やう、此の外まだいくらかもある。

ひたきの語源と歌 鶺鴒の『ひたき』といふ名は、火燒で、燧石で火を打つ音にその鳴く音をたとへたわけである、實際、空のよく澄み切つた晩秋の野に、ヒィヒィカチ／＼と此の鳥の啼く音を聞くと何ともいへぬ爽かな氣分になる。

狐雨あがる樹の間にとびて來て春の鶺鴒は聲もしめれり 木俣 修

日にしばし鶺鴒きて啼く春先に梅おほよその花を開きぬ 志村 潮

これは春の鶺鴒の歌であるが、

百敷にすみか定めよひたき鳥なれがやどりも庭に見ゆめり 源 師光

おもひかね柴とりくぶる故郷をなほさびしとやひたき鳴くなり 寂蓮法師



などは矢張秋の歌になつてゐる。

三六 鳴 (しぎ)

晩秋の情趣 門田の稻は黄金の波をうねらせ、空は晴れて一織の雲さへない晩秋の野を歩くと、水邊から慌しく立つ鳴の群れ、思はず立ちどまつて耳を澄ますと、遙か彼方に静寂を破る銃聲が聞える、鳴は狩獵として一番目ざされる鳥なのである。

鳴立澤 東海道の大磯には、鳴立澤の名所がある。西行法師の遺跡で、

ころなき身にもあはれは知られけり鳴立澤の秋の夕ぐれ  
の一首が人口に膾炙されてゐる、『回國雜記』に

しぎたつ澤といふ所にいたりぬ、西行法師こゝにて、心なき身にもあはれはしられけりと詠せしより、この所をかくはなづけけるよし、里人かたり侍りければ、あはれしる人の昔を思ひ出て、鳴立つさはをなくくぞとふ。

とある、かうして鳴は秋とは離れぬ縁に結ばれてしまつてゐるのである。

古歌の鳴 古歌を見ると、鳴を詠じて秋の風趣をいひ現はした名歌が少くない。

からころもすそ野のいほのたび枕そでよりしぎのたつ心ちする  
あかつきの鳴の羽音はしぐれにてすすのしのやに月そもりくる  
しもかれのくさの下寝やさむからし曉ふかく鳴そたつなる  
など何れも情趣が深い、それからは古歌には、鳴の羽搔がよく詠まれる、例へば  
明けぬなり鳴の羽かきかそふねばかけのたれをの永き夜なれと  
待ちわびて思ひたえにし秋の夜にたれあかつきの鳴の羽かき  
の如くである、此の鳴の羽搔きといふのは、此の鳥の習性として、夜更けてから、曉かけて羽を搔くのであるが、その音が何ともいへぬ寂しさを感じしめるからである。

秋の旅鳥 鳴は鶉の文字も用ひる、鳥學上では鳴目鳴科に屬し、雁や鴨のやうに、夏季北シベリヤ方面で繁殖し晩秋になつて群をなし渡つて來る、かくて一二ヶ月は姿を見せるが、それから更に南の國をさして去つてしまふ、その特長としては、嘴が比較的長く、種類に依つては、内側に曲つてゐるものもあるし、外側に反つてゐるものもある、焙烙鳴、中杓鳴、大杓鳴、針腰中杓鳴などは前者に屬し、反嘴鳴は上に反つてゐる、それから變つてゐるのは篋鳴で嘴の先がスベート形に擴がつてゐる、脚は長く、四指を有してゐるが、唯一種「みゆび鳴」だけが前三指である。此の長い嘴は、水田や水澤などに降りて、餌を漁るに便利なやうに自然



から賦與されたもの、その餌の多くは蟲類である。

夥しい種類 鳴には種類が極めて多い、俗に四十八鳴といふ位であるが、その中でも、草鳴、磯鳴、田鳴、小鳴、當年、山鳴、青鳴、大杓鳴、中杓鳴、雲雀鳴、玉鳴、濱鳴、襟巻鳴、三趾鳴、雷鳴、針尾鳴などよく知られてゐる、殊に田鳴は最もよく知られて居り、秋季、獵が解禁になつて、その銃口に狙はるゝのも此の種が多い、水田に多く見る處から、此の名があるのであるが、鳴といふ文字を見ても、此の種類の最もよく知られてゐることがわかる。

俳句の鳴 俳句などに現はれた鳴を見ても、一番多いのは此の田鳴である。

刈跡や早稲かたゝの鳴の聲

牛呵る聲に鳴立つ夕べかな

鳴遠く鉄すゝぐ水のりねり哉

鳴立つや凡夫家路の急がるゝ

芭	支	燕	白
蕉	考	村	雄

繪畫の鳴 鳴は繪畫にも時々あらはれて來る、四條團山あたりの秋の花鳥には水草に配したりして間々見ることがあるが、記憶に残るほどの名作もない。

近世の人では、荒木寛畝翁に『雨中鳴』の作がある。水墨で蘆を描き、一羽の鳴を配し、これに斜に降り注

ぐ雨で情趣を深めてゐる、栖鳳氏には『秋涼』と題した作がある、矢張り鳴一羽を畫き、細線で水を添へてゐるのに過ぎぬが、十分に題意が現はれてゐる、荒木十畝氏は『林梢文錦』の大作に、山鳴を畫いてゐる、秋の林の美しさに、山鳴は配合も面白く、細かい寫生が主になつてゐる、故速水御舟氏の作には『川霧』と題したものがあつた、これは大鳴一羽を畫いたわけであるが、鳴の姿態はよく研究が屈いてゐる、宇田荻郎氏は、第十四回の帝展に『梁』を出品したが、この中にも鳴が一羽描かれてゐる、堂本印象氏にも『首夏』と題した作に、魚籠に河原撫子を配し、これに鳴一羽を畫いた作があるが、これは少しく季節にそぐはぬ點がある。

### 三七 四十雀 (しじうから)

四十雀とその形態 四十雀は、四十雀科といふ一科をなし、これには、五十雀や山雀、柄長、日雀、菊戴きなどが含まれてゐる、四十雀はその中でも、最も人に親しまれてゐる小鳥で、人里近くに棲んで人を恐れずよく庭などに訪れて來ては輕快敏捷な姿を見せてゐる。

本邦到る處に棲息し、色は頭と頸の脇、喉胸の上部が黒色で光澤があり、頬から耳羽にかけては純白で、此の白色の部分は半圓形を爲してゐる、後頸から背にかけて黄綠色、後方に至るに従ひだん／＼と青味を増し、腰から上尾筒は灰青色、翼は黒褐色で外縁は灰色内側には白い縁がある、かうした複雑な色彩ではある



が、特長があつて美しく、その樹から樹に移り渡り、餌を漁る有様は極めて愛らしいものである。  
**習性と營巢** 本邦では四季ともに見られるが、その棲息する處は松杉科の樹木の多い處を好み、樹木の皮の間に潜む昆蟲などを捕食したり、松笠にとまつて、この實を啄んだりする。四季の中、一番目に觸れるのは、秋から冬へかけてであつて、丁度錦木の實が眞紅に染まり、山茶花の蒼が綻びやうとする頃が、一番よく目にとまる。そして『ちんけんちーちんけんちー』といふやうな囀り方をする、その巢は、石垣の間、樹木の洞穴、時には郵便の受箱や石燈籠の火袋の中などに、動物の毛や、糸類などを集めて作り、中に六個から十個位の卵を生み、その卵も形が變つてゐる、その産卵は五月から六月にかけてである。



**名稱から來た迷信** 四十雀はかうして、人によく知られ親しまれてゐるにも拘らず、時とすると、甚だ嫌はれることがある、それは四十雀の名稱が、『四時カラ』で、空虚を意味することになるので、縁喜を祝ふ職の人々などは、甚だしく忌むのである。併し、それは此の名から來た問題でつまらぬ迷信であり、愛すべき小禽である。

**四十雀と文學** 殊に晩秋初冬の野外など、此の鳥故どの位趣きを深くするか知れない、正岡子規の歌に  
 杉垣をあさり青葉の花をふみ松へ飛びたる四十雀二羽

とあるのは、まことによく四十雀を見てゐる作で、そのまゝ立派に繪になつてゐる。古歌には少く『夫木集』

に寂蓮法師の作唯一首

朝まだき四十からめそたゝくなる冬こもりせるむしのすみかを  
 あるが、これも實に珍らしく、また四十雀をよく見てゐる。

俳句の方では秋の季題に入つてゐる、名句も中々多い。

老の名のありとも知らで四十雀

は流石に落つきのある句、その人生觀の一部が此の句を通して知ることが出来る

先づ來たと竹に知らせて四十雀

崩しては數へ直すや四十雀

何事にさはぎつつくぞ四十雀

四十雀鳥のまどはぬ山路かな

などとりぐに面白い。



**四十雀の繪** 繪に畫かれる時は、多く晩秋から初冬へかけての場合が多い、もとより小禽のことであるから、この鳥を主とした大作などはないが半折などに、一寸此の鳥を描いて樹の枝などをあしらつた氣の利いた作は少くない、殊によくこれを書いてゐたのは蘆雪と景文である、四條派の人々には比較的この鳥を畫い

芭蕉

浪化

朱拙

慶友



たものが多いのであるが、此の二人は特別である。

『蘆雪と景文』 先づ蘆雪には『木蘭薔薇群鳥』と題して、梢上十數羽の四十雀を畫いた作が、藤田男爵家舊藏の大幅にあるし、東京の説田鶴翁所藏品にも、薔薇に四十雀を達者に畫いたものがあり、ビゲロー蒐集の四條圓山作品中にも、淡彩竹に群鳥の幅がある、これには十八羽の四十雀が畫かれてゐる、蘆雪は餘程此の鳥が好きであつたと思はれる。

蘆雪の作は、同じ四十雀を畫いても、十數羽乃至數羽群れてゐる處を畫いてゐるのに對し、景文の方は、僅かに一二羽で秋の情趣を寫さうと試みてゐる、先づ藤田家の四季花鳥圖に面白く此の鳥を配したのをはじめ、近江淺見家藏品には、秋草に四十雀の極めて瀟灑な作がある、薄と葛と龍膽とに一羽の四十雀を添へた丈けなのであるが、何ともいへぬ趣きがある、双軒庵舊藏品には、『曉禽紅樹』がある、中を有明月とし、柳鶯の圖と共に三幅對を爲すもの、得意の題材である。

應舉の作 應舉の作にも四十雀はよく現はれて來るが橋本辰二郎氏藏の、『菊花群禽圖』は珍しい、これは中央に岩石を描き、これを中心に菊花數種を現はし、岩の上には連雀と大瑠璃、桑鴈を配し下の菊には猿子一羽、地上には鶉二羽、飛び立つ翡翠あり、上部には、五羽の四十雀が、或は菊のかげに潜み、或は高く舞ひなどして彩りも濃やかにしてゐる、流石に寫生は手に入つたもので、些の間然する處がない。極密着色の中に力の入つた作である。

四條派の人々では、芳園にも之れを見る、秋草の咲き亂るゝ上に、數羽の四十雀が飛んでゐる構圖など、蓋し彼の得意とする處、ビゲロー氏蒐集の二曲半双の屏風に、その代表的作品が見られた。一蝶にも名作がある。

『春草の落葉』 近代の人々では、川端玉章翁の遺作によくこれを見るし、菱田春草の落葉にも、日雀と四十雀が數へられる、川合玉堂氏も、晩秋の花鳥を畫くとよくこれを配する、錦木の紅葉したのに、此の鳥は色彩の上から調和するので、畫く人が中々多い、玉堂氏にもあれば五雲氏にもあり、句佛上人の作にもある淡交會の第四回に出品の『野末の秋』は齒朶の葉と笹とこれに四十雀を畫いたのであるが洗練されたる構圖であつた。

此の外、西山翠嶂氏には『晩秋』と題して、笹に四十雀を畫いた横物があり、山村耕花氏は『淺春』の題下に野薔薇の紅果に此の鳥を配した作がある、中々効果的であつた、川端龍子氏には『深秋好晴』の題で、松にこれを畫いた作が畫集に現はれてゐる。

### 三八 椋 鳥 (むくどり)

八百あひの大浪のごと群れ立ちて楓の老木をかこむ椋鳥



椋鳥の大群 晩秋から初冬へかけて、椋鳥は群を爲し、林から林、森から森へと渡つて行く、それは餌を  
求むる爲めの動きである、時にその大群は一齊に芝生の上や草原に下り、足の刻みも細やかに慌しさに餌  
を漁るが、その先達とも見ゆる一羽が颯と立つと、一群は忽ちこれに續いて飛び立ち大浪のやうなうねりを  
見せながら程近い樹立の中へ入つてしまふ、著者の此の歌は、そのほんの束の間の寫生に過ぎない。

噪林鳥の名の如く 繪筆を持つ人も、よくかうした光景を畫く、斯くの如く群れ立つ小鳥、それは椋鳥が一  
番多く目つ著しい、支那では此の鳥の一種である唐椋鳥のことを噪林鳥と呼んでゐるが、噪林鳥は必ずし  
も唐椋鳥には限らない、我々の常に見てゐる椋鳥も將に噪林鳥である、時に椋鳥を白頭翁と呼ぶ人もある、  
白頭翁は別にあるもの、此の鳥の別名として認めても差支へあるまい。

その形態 椋鳥は椋鳥科といふ一科を爲し、その種類には前の唐椋鳥や、小椋鳥がある、唐椋鳥は支那の  
産で、時に日本に渡つて來ることもあるが稀である、小椋鳥は多は南國に渡るので、平常我等の目にするの  
は普通の椋鳥である、その姿を見ると大さは鵜位で、體は灰褐色であるが頭は黒く、目の上と頬の邊に白羽  
があり、尾筒も白く、嘴は黄色であるが先は黒く、脚は強壯でよく歩行し、翼もまた強い。

小椋鳥 小椋鳥は形や、小形で、頭部白く頬の邊に栗赤色の部分がある、中々美しい、唐椋鳥は頭部が灰  
白色でほのかに紅を帯び、背は淡褐色、翼は黒く唯肩と雨覆が白い、尾羽も黒いが、先端が白色を呈してゐ  
る、雌は兩者とも淡褐色が基調で、雄のやうに色彩の變化はない。

習性 椋鳥の名は、椋の實の熟するころ多く飛來し、その實を好んで食するから名付けられたものであるが  
實際は、椋より椋せんたんの實を好んで食べる、これは農林省の葛精一氏の調査に詳しいが、『和漢三才圖會』には  
既にこれを書いてゐる、この外、動物性食餌も多く、水田に下り稻の切株に潜んでゐる螟蟲など捕食し農業  
上裨益する處極めて大である。

異名いろいろ 本邦では到る處に見られる種類だけに、方言なども多く、椋落し、椋わり、椋喰ひ、椋ば  
り、むぐ、ほうねんどり、たけすいめ、ぎいぎい、ぎやぎや、ぎやぎやむくどり、など枚擧に遑もない  
俳句の椋鳥 文學の上では、俳句の秋の季節に入れられ古來幾多の名吟が残つてゐるが、太祇の

椋百羽命拾ひし羽音かな  
は將に絶誦である、此の外

椋鳥や梢に寄する波の音

は、矢張その群れ立つ状と、羽音とを十分にいひ現はしてゐる。

椋渡る桂の且加茂の暮

は椋鳥を通して見た都名所圖會である。

椋鳥の森吹き越る羽風かな

支考

几董

桃處



椋鳥や夜も白川の關の上

は、共に椋鳥の移動を詩題にして居り、

遁れ飛ぶ椋 一 群や森の月

は矢張これを繪にしまつてゐる。

二二〇

花 讚 女

召 波

繪畫の椋鳥 繪畫には餘り畫かれてゐない、風景畫に此の鳥の群飛してゐる處を描いたのはあるが、花鳥畫としては少い、古く文晁に銀杏に椋鳥を畫いたものがあり、吳春には寒椿にこれを配したものがある、明治の畫家では省亭にこれがよく見られる、然に椋鳥を描いたり、秋の雜木に配したりしてゐる、達者さを見るが唯それだけである、現代の作家の中では、勝田蕉琴氏の作に面白いものがあつた。

椋鳥の職 文政七年七月二十五日より、日々七時過より、夜に至るまで、椋鳥と雀と合戦あり、處は

小石川馬場と、眞光寺と、金性院と、又加州侯の屋敷の森にて噛合ふ、殊に湯島金性院にては、數人見物影しく鳥の死骸多く、誠に一奇事なりとて第三右衛門も金性院へ見物に罷りこし候、見物の人々群集にて、寺内に容易に入ること成り難しとなり。

— 宮川漫筆 —

### 三九 鴝 (ひよどり)

鴝の飛び形 初冬から早春にかけて、訪れて来る小禽の中で、鴝は私の好きな鳥の一つである、いつものやうに双眼鏡を懐にして、明治神宮の外苑から、青山墓地の邊をあてもなく歩いてゐると、突然、鴝が甲高い聲を立てながら、此方の樹から彼方の樹へと飛んでゆく、その飛び方、翔り方の美事さ、私は數多い小鳥類の飛び方には少からず注意を拂つてゐる一人ではあるが、鴝位、そのスタートが美しく、抑揚のある飛び方をする鳥も少からう。

彼れは注意して見てみると、決して定めた方向にむかつて、一直線に飛ぶことはない、必らずとまつてゐた枝よりや、高い程度に飛んで行き、一度はや、それより高めに、一寸低く波状を描き、またや、高く飛んで、目ざす樹の枝に達する。たとへば、いま流行する流線型の柔かなライン、鴝の飛び方は、將にそれである。だから鴝の飛び方を見てゐて、四十雀などに眼を移すと、如何にもそれが慌しさうである、實際目まぐるしいほどに慌しい、同じ寒い時の鳥ながら、かゝる習性が違ふものと驚かれる。

鴝の渡る餌 鴝の高い樹の枝にとまるのは、唯一つの運動であらうが、低い處から飛び出す時は、大抵は



餌を漁つてゐた時である、そこには、珊瑚珠を綴つたやうな落霜紅の果があつたり、南天が朱玉を捧げてゐたり、時とすると、山茶花がその蕊をあらはにむき出して、外の花弁が、一片二片風にこぼれたりしてゐるのである。鴨は南天の實を好む、落霜紅の實も好きである、萩葉の實も赤いが、これは好きかどうか見たことはない、南天の實をあつらひの嘴でつく姿の面白さ、これは一寸他に類がない。

鴨と南天の實 籠に飼つた鴨に南天の實を投げてやる、彼は飼ひ主の手の内を、じつと眺めてゐて、やがて投げられた紅い果が籠の中に達すると、ものゝ美事に受けとめる。

鴨と山茶花 山茶花をつつくのは、その花の蜜が好きだからといふ、丁度鴨がおとづれて来る頃は、山茶花の咲く頃であるから、蜜を求めるには都合がよい、併しいつまでも山茶花は咲いてゐない、山茶花の花が見られなくなる頃は、紅梅がチラホラ咲き出す、鴨の眼は忽ちこれに注がれて、紅梅の枝へ訪づれて来る、身を潜めてこれを見てゐると、あの嘴の先で、紅梅の花弁を千鳥形に啄んで捨てる、啄んでは散らす、食べたのではない、玩弄にするのだ。そして一寸蜜をつついて見る。

鴨と紅梅 私は曾て狩野元信の繪に、鴨が紅梅を啄んでゐる作を見て、その行き渡つた自然觀察に敬服したことがある、と思ふとまた常信に南天と鴨を描いた作があり、それを見て驚いた、古人でも名を成すほどの大藝術家になると、決して御座なりの藝でお茶を濁してはゐない。ちやんと自然を觀察して、その微妙なる色彩の配合や、周囲の情景を極めて美事に消化してゐる。

椿咲くころ 山茶花散り、紅梅褪せ、さて鴨はまだ此の地を去らない、花は入り代つて蕨椿の天地となるあの光澤美しい葉影に、鄙の少女の顔でも見るやうな野趣のある蕨椿の紅、これこそは鴨が、第三に好むところの花である。

椿の花の咲く頃になると、鴨はあまり高く飛ぶことをしない、その飛び方が極めて緩くなる、それでゐてよく甲から乙へと移りゆく道の順序を誤らない。

蕨蔭の椿、それがまだ落つるに早いと見る間に若し末枯れた鶯かぐらや、ぬかごや、莖のみ残つた、あのこづちなどの間に紅が散らしてあつたら、それは間違なく鴨の訪れたあとである、その紅を求めて慕ひ寄つた時の鴨の嬉しさうな姿、あの風色した羽色を極度に緊張させて、冠羽を立て、……私の双眼鏡は幾度かそれに近づかうとして、まだその目的が達せられない、近づいて『しめた』と思ふ時、早くも鴨はツイと、それは美事な波状線を描きながら、次の世界に飛んでゆく

やぶかげの椿あまたに散りしけりこや鴨のしわざなるらむ

千種 有功

と詩人は既に此の情景を立派なものにしてゐる。そして繪畫以上に深い餘韻を漂はしてゐる、私はつくづくと我が双眼鏡の力不足をおもふ。



家隆卿の逸話 鴨は飼鳥としても面白く、妙に人なつこい習性が、十分に人の愛撫を恣にするだけの力を備へてゐる、それにつけても思ひ出すのは歌人藤原家隆卿の逸話である。

宮内卿であつた頃、家隆卿は鴨の名鳥を二羽ほど飼つてゐた、一羽には『をぎのは』と名付け、一羽をば、『はやま』と呼んだ、そして『をぎのは』はその息の隆祐のもとに預け、手もとは『はやま』を置いて寵愛した、『をぎのは』はかく隆祐の手で任吉の別荘で飼はれてゐたが、よく隆祐に馴れてゐたので、隆祐はこよなきものにこれを愛した。

ある時、俄かに父家隆卿のもとから使が来た、その用事は、久しく『をぎのは』にあはず急に逢ひたくなつたから使に持たせ遣はせ、その代りに『はやま』を預けるといふのである、隆祐は、父の命とて否むことが出来な、さりながら『をぎのは』に別れるのも心残りである、そこで筆を執り

すずしさは、やまのかげもかはらねどなほ吹きおくれ萩のうは風

一首を添へて父に送つた。

家隆卿はこれを見て感じ入り、さほどに名残惜しくば、『をぎのは』を手許に置くべし、と、また一首を詠みつかはされた、その歌に

これもまた秋のころぞたのまれぬはやまにかはる萩のうは風と。

後久我太政大臣家にも、一羽の鴨の名鳥が飼はれてゐた、それを家隆卿が聞き、矢も楯もたまたらず、所望に及ぶと

いかにせむ山鳥のをもながき夜をおいのねざめに戀ひつゝぞなく

と歌で答へた、『をもなが』といふのが、その鴨の名であつた、『定めてかへしありけむかし、たつねてしるべし』と、『古今著聞集』の著者は記して、その返歌を洩らしてゐない。

◇

石井林響と鳥鴨 故人になつた石井林響氏の手もとに、一羽の鳥鴨が飼はれてゐた、よく馴れてゐたし、形もよいので、林響氏の友人で、凡そ鳥好きの人々はみなこれをほしがつた、中でも一番血道をあげたのはこれも鳥には眼のない水上泰生氏であつた。どうしても僕に譲れとせがんだ末が、秘藏の仙厓和尚の幅と、交換することに話が纏まり、幅を送つてその鳥鴨を連れて歸らうとする、林響氏の愛顧三人、ことに此の鳥鴨を愛してゐたのが、わつとばかりに泣き伏してしまつた、流石の泰生氏も此の有様に驚いて、強いて持ち歸ることも出来ず、つひに話を戻して、すごくと仙厓の一幅を持ち歸つた、此の鳥鴨、いまは二代となり、林響氏の歿後、未亡人の手から山口蓬春氏の手へ贈られ、蓬春氏はこれを紙本に畫いて第二回の青々會に陳列した、彼は歌、これは繪である。

名妓采蝶と鴨 谷崎潤一郎氏の『春琴抄』には、鴉屋春琴と雲雀の話が面白く描かれてゐるが、徳川時代に



は、鴨を飼ふことが随分流行したものと見え、深川の名妓米蝶が、鳥鴨を飼ひ、何かに感じて放したことが古い隨筆に見えるし、三浦屋の薄雲の傳の中にも、山本の勝山が鴨を放したことが見えてゐる、探したらまだ面白いものが現はれやう、私の双眼鏡は、まだそこまでに届いてないのを遺憾とする。

◇

**鴨の種類** さて鴨は鳥學上、燕雀目に屬して鴨科といふ一科を成してゐる、そして普通の鴨の外に鴨といふ名のつく種類を擧げると、嘴太鴨、鳥鴨、黑鴨、臺灣鴨、琉球鴨、外に磯鴨があるが、これは鴨科に屬し普通の鴨とは、習性も全く違つた海濱に棲息する鳥である。

**我國特有の鳥** 鴨は我が國特有の鳥で、秋から冬にかけて多く人里近くに訪れて来る、頭が灰色で嘴の基部から頬にかけて栗色、翼や羽は灰褐色、腹は白く尾は比較的長く、脚は極めて短かい、時に頭の羽毛を立てるのは、よく人の知る處その鳴聲は甲高く、ヒーヨヒーヨと高く長く引く、『和漢三才圖會』には、その啼く音を、『奇異奇異と言ふが如し』と記してゐる、古名は『ひえどり』で、亞種が多い。

**鳥鴨と白頭翁** 鳥鴨は、漢名を白頭翁と呼ぶ、白頭翁の名は他鳥にも附けられてゐるが、この鳥が一番それらしい、その名の通り頭、頸、及び胸の上が白色で他は光澤のある蒼黒色、嘴に脚が淡紅色なので、形もよく色彩が殊に美しい、それ故この鳥は、昔から盛に繪に畫かれる、『模嶺畫譜』にも達者に畫いてゐるし、廣重の花鳥の中にもよく現はれて来る、もとは南支那の山嶽地方に棲息してたのであるが、支那人が早くか

ら飼ひ鳥として賞翫し、それが徳川時代に我が國に渡來したのである。

『和漢三才圖會』には次のやうに記してゐる。

按鳥鴨、狀類鴨而頭至臆正白、背翅至尾純黑光澤、腹灰黑嘴脚共紅、近年來於異國、養于樊中、能乳育其卵乎初七日、人取小蜘蛛爲餌、後如常、其聲亦似鴨、或作諸鳥聲亦有。

これに依ると、飼ひ方に依つては他鳥の聲を眞似せしめることも出来るやうである。

黑鴨は臺灣と海南島とに限り棲息するもので、全身黒色、嘴と脚とは紅色で、色彩の調和が美しい、そこで、飼鳥として時に人の愛翫する處となつてゐるのである、他の種類も擧ぐべき特長はあるが、藝術にあまり縁が無いから省略する。

◇

**鴨と文學** 文學の方面の鴨を見る、『夫木集』に收められてゐる三首、即ち

籠のうちにまた住なれぬひえとりは心ならずも世をすくすかな

土御門院御製

呼ひかはすてこのひえとり朝おきにかかまかへて世を過さまし

爲家卿

むれてゐるはるひえ鳥の水はみにえたふみたる、きしの山ぶき

源仲正

は有名ではあるが、さのみよい歌とも思はれない、珍らしいから收めたのであらう、著聞集の藤原家隆卿の歌は、前に記した通りである。現代の人の作には、流石によいものがある。



久保田 不二子

鴨の啼き交しある杜のなかに杉葉を拾ふ人の聲すも  
など實感であり、また畫の境地でもある、天田愚庵の歌集の中にも、よい歌がある。

八重椿咲きたる山に今日もかも來なきとよもすひえとりの聲

ひえ鳥はきはひなくとも我が植ゑし椿の花を踏みな散らしそ

花曇り春の日永をひえ鳥の聲聞く時は眠くもあらず

何れも、よく此の鳥の來啼く頃の情趣を寫してゐる。

俳句の方では、秋の季題に入れられて、昔から、いろ／＼な人々によつて吟ぜられてゐる、二三を引く。

鴨もとまりて惑ふか風の色

鴨の雲や渡りて日和山

せんだんの鴨に逃ぐる松の空

鴨のこぼし去りぬる實の赤き

鴨や赤子の頬を吸ふ時に

鴨よ南天折るな實はやらん

惟 然  
支 考  
呂 柚  
蕪 村  
其 角  
山 木

雲舟の枯木鴨 繪畫に現はれた鴨を見やう、比較的支那の繪に少く、日本の作に多いが、唯鳥鴨は支那の

繪にも屢々散見する。普通の鴨を畫いた作では先づ雪村の『枯木鴨』の名作を挙げなければならない、これももと鳥津公爵家の什寶で勇勁なる筆に枯木を現はし、これに鴨が斜に構へてとまり、下に竹を添へてゐる、簡素な筆であるが、鳥の姿態眞に迫り、よく其の活動的な處を捉へてゐる。

元信の作 元信もよくこれを畫く、同じく舊鳥津家の『柳に鴨』の名作がある、これは右に雪中雀、左に雪中水仙鴉の三幅對となつてゐるのであるが、柳の枝の優美なる、その枝に翼を休めて一聲啼いてゐる姿を實によく描いてゐる、同家にはなほ元信の『菊鴨』があつた、野菊咲きみだるゝ中に、漆の細枝がスグ／＼と伸びてこれに鴨がとまつてゐる、この方は頭の羽毛を立て、存分に啼いてゐる、構圖が中々面白い、元信にはなほ越前松平家の什寶にも枯木に鴨を描いたものがあり、紅梅に鴨を畫いた作も時々見受けた。

松榮の柳鴨 元信の子、松榮の作にもよく鴨を畫いたものがある、鳥津家にあつた『柳鴨』の作などその鴨の筆致が元信に紛ふ位よく似てゐる、松榮の作は温健そのもので、子の永徳のやうな覇氣はないが、よき元信の後繼者として、立派にその地歩を保つてゐる、徳川伯爵家には梅に鴨を畫いた作があつたが、これなどもどうかすると元信に間違ひさうに見える、此の外、楊月にも『柳鴨』があり、玉樂にも梅に鴨の名作がある。

雅邦の作 明治以降の人の作では、橋本雅邦に時々これを見る、濱松中村氏舊藏の『雪中鴨』の如きは、雅邦の面目極めて躍如たるもの、雪をいたゞく柳條の優雅さ、これに翼を休めつゝ何物かを凝視する鴨の姿も眞に迫る。玉堂氏も鴨が巧みである、枯葉二三枝に残る櫟の木の梢に鴨を點じた如き、中々に瀟洒なる出來



榮である。更に展覽會の作品で記憶に残るものは、永田春水氏の「雪暗れ」がある、第十一回帝展に於て特選となつた氏の傑作、眞背垣に積る雪、その際に一もとの竹がそり立ち、烏瓜が萎れたまゝに絡つてゐる、その枝の上に鴨が一羽、全體の畫面を引締めてゐる。

最近の作 第十回の日本美術院展覽會には、古莊肇成氏の「實徳と鴨」の變つた作がある、櫛の結實した枝に數羽の鴨の群れてゐる圖で、取材が變つてゐる、此の外、昭和九年の東京會に、森白甫氏が出品した「冬日」、その翌年の青々會に、中村岳陵氏の「春朝」、これはつるもどきに鴨を配した珍らしい構圖、同じ年、小室翠雲氏の個展にも、楳に鴨を配した作が好評を博した、此の外、榊原紫峰氏の作にも、「雪中鴨」と、「茶の花と鴨」の作があり、第二十回の日本美術院展覽會には、里内三郎氏が、「早春鳴禽」と題し、雜木林に數羽の鴨の鳴いてゐる圖を出品してゐる。

白頭翁 白頭翁、即ち烏鴨を畫いた作では、古く徽宗皇帝に、石榴とこの鳥を畫いた作があり、徳川家の舊藏品に錢舜舉の「白頭翁圖」がある、我が國の人では景年畫譜にも見えるし、廣重の版畫にもよく現はれ、光起は竹に白頭翁を畫き、對山は「紅白桃花幽鳥」の作に、二羽の鳥鴨を畫いてゐるが、これは構圖が中々に面白い、故石井林響氏は此の鳥を愛したこと既に記した通り、遺作にはよくこれが現はれて來るが「野趣二題」の中の樹林から顔を出してゐる白頭翁は面白い、その二代目を山口蓬春氏の畫いてゐること、既に記した通りである。

四〇 百舌 (もず)

晚秋の天地に甲高い聲 澄み渡つた晚秋初冬の空、森や林の高い梢の上に、甲高い百舌の聲を聞くと、季節の感じが蔞々と身に迫る心地がする、百舌がかうして梢高くとまつてゐるのは、あの鋭い眼から、おのが餌になる小動物の姿を一目に見渡す爲めで、かくしてその何物かの姿が眼に入るや、電光石火、これを襲つて捕へてしまふ、その早業は、全く水も溜らぬ手際である。

百舌の草くき 百舌は、鴨と書き、又伯勞の異名がある。その習性の一として、捕へた小動物を樹の枝や草の莖などに突刺して置く、所謂「早業」「草莖」で古くから知られてゐる、「萬葉集」にも

春されば百舌鳥の草くき見えずとも吾は見遣らむ君があたりをば 作者不詳  
 垣根にはもずのはやにえ立て、けりしでの田長に忍びかねつ、

といふのがある。百舌がどうして、かゝる草莖のやうな業をするのであるが、それにはいろ／＼説がある、先づ曉晴翁の「雲錦隨筆」の記載が面白い、曰く  
 歌林良材に曰く、鴨の草莖といふは、鴨は時鳥の者總にて有りけるが、杓手を取つて返さざりしに依



て、其代りには人様の物を草の莖にさし挟めるに云ふといへり、是を鴟の早賢とも云へり、斯の如き諸説は證なる本説なしと雖も、後人取用ひて讀める歌も有るにや、藻鹽草に曰、  
 鴟のはへにへと云ふことをして、萬の草莖に生たる蟲もしくは、蛙などを取つて、さして時鳥の爲にとて我身は隠るゝといへり、八雲の御説に説々あり、此説に過べからずと云々、鴟は時鳥の沓手をとりにて今四五月の程に奉らんとて隠して隠れ、其料にて草莖はする也、郭公は夫を尋ぬとて呼ありくによりて時鳥の名を得たる也、此呼歩く時鳥は木の鴟也、彼隠れて歩く鴟は本のほとゝぎす也、また時鳥の異名を沓手鳥といへり、一説に沓手鳥、此鳥前生に沓を作つて賣けるを鴟、沓を買て値を乞はるゝ故に鴟は此鳥の來る時は木の下、竹の中に隠れて見えぬ也。

これは唯傳説に據る興味本位のものであるが、百舌が此の草莖をする習性については、いろ／＼學者の間でも問題になつてゐた、併しこれは食する時の便利な爲めに動物を刺し貫きこれから食べやうとする時、何物かに妨げられ、そのまゝになつたのではないかといはれてゐる。

◇  
**百舌の種類** 百舌の種類もかなり多い、先づ普通種の外に、稚兒百舌、赤百舌、大百舌、大唐百舌、高砂百舌、唐赤百舌などが數へられる、普通種の百舌は西比利亞の東部や北支那方面に棲息し、秋になると本州あたりに渡つて來る、雄は頭から體の上面赤褐色であり、背から下は橄欖色、過眼線の邊黒く、上に横に細

い白線があり顔の下半から咽喉にかけて白色、尾は長く黒色、雌は顔の白色の部分が褐色、それから、翼に白色の部分がない。

**赤百舌** 赤百舌は其名の通り、頭部から背へかけて褐色が鮮かであり、額の白線が極くはつきりしてゐるそこで白眉紅尾伯勞の異名がある、腹は白色で、兩側が淡褐色を呈す。唐赤百舌は、赤百舌より幾分大きく、色彩もよく似てゐるが、胸から腹へかけて黄か、つてゐる、大百舌は頭から背尾へかけて薄水色で、過眼線は黒く、初列風切羽も基部が白色で、先が黒色である、大唐百舌は、大百舌とやゝ同じ色彩であるが形は大

きい。  
**稚兒百舌** 稚兒百舌は頭部から背へかけて、美しい水色で、背から翼、尾に至るまで褐色、これに不規則な斑がある、咽喉から胸、腹は白色で百舌の中では一番色彩に變化がある、雌は暗色に富み、横側に斑があり、幼鳥は赤褐色で鮮かな斑點がある、何れも嘴が黒くよく發達し、尖端が鉤形に曲つてゐる、嘴の附近に粗な毛が生へてゐる。

◇  
**史實に見た百舌** 百舌は古くから知られてゐる鳥で、文獻に見えた例も少くない、『日本書紀』十一に曰く仁徳天皇六十七年冬十月庚辰朔甲申、幸河内國石津原、以定陵地、丁酉始築陵、此日有鹿忽起野中走之、入役民之中而倒死、時異其急死、以其瘻、即百舌鳥自耳出之飛去、因視耳中、悉咋割剝、故號



其處、曰百舌鳥耳原、是之縁也。

と、『曆林間集』に曰く

鴟、一名伯勞、又名馱也、應陰而穀物、鳴則將寒候也、以五月應陰氣之動、陰爲殘賊、蓋賊害之鳥也  
と何れも、その殺伐なる性を現はしてゐる。

かうして百舌は、草莖などする習性から、殘虐性を帯ぶる鳥のやうに思はれてゐるが、その餌とする動物類は、野鼠をはじめ、田園に害を爲す昆蟲類などが多いから、人の生活の上から見ると、非常な利益を與へてくれる鳥といはねばならない。

萬葉の歌 文學の方では、疊に擧げた『萬葉集』の一首の外、更に十卷に『鳥を詠める』と題して

秋の野の尾花が末に鳴く百舌鳥の聲聞くらむか片待つ吾妹

作者 不詳

の一首がある、よく秋の情景が現はれてゐる

鴟の聲やみて暮れゆく木の間より夕月さして嵐たつなり

木下 幸久

も、晩秋の光景が、此の鳥を透して出てゐる更らに新しい人の歌では

水渡り百舌鳥の鋭聲は聞えしが更に鳴かねは何處とも知らず

半田 良平

と、これも野邊を歩いてよく經驗する處である。

俳句の百舌 俳句では秋の季節として重要なものだけに古來秀句少からず、凡兆の

百舌鳥啼くや入日さし込む女松原  
の如きは、將に百穂の繪にでもありさうな情景である。

鴟啼くや夕日の残る杉の末  
鴟啼くや一番高い木のさきに  
藪陰や卵のからに鴟の啼く  
鴟の聲勸忍袋切れたりな  
鴟啼いて風腥き木の間哉  
など、それ／＼に面白い處を狙つてゐる。

也 有  
一 茶  
白 雄  
一 茶  
關 更

宮本二天の名作

美術に現はれた百舌鳥では、先づ長尾欣彌氏藏、宮本二天の『枯木鳴鴟』が何といつても第一である、これはもと内田董作氏の秘藏した名幅、雄勁簡粗な筆を以て、此の鳥の特性を美事に描寫し、些の隙もない、後人以て彼が劍法の極意を筆に現はしたものと云ふ、傳へ云ふ、渡邊華山一日四谷を歩き、一店舗に此圖を發見し値を問へば二朱だといふ、然も華山懷中に半錢の持合せがない、併し食指動いてやまず、同藩の與力の許に駆け込みこれを購はしめたと、箱書に『文政庚辰嘉平月四日審鑑云々』の文字がある。その他百舌の作 百舌を畫いて形の眞に迫るものでは、なほ前田侯爵家藏、雪舟の花鳥屏風をも擧げなけ



ればならない、これは左の隅に現はれてゐるのであるが形が如何にもよい、抱一にも「秋景花鳥」の作があつて巧みにこれを寫してゐる。

新しい處では、淡交會の第一回に出品された下村觀山の「紅葉鷓鴣」を譽げなければならぬ、此の百舌は觀山が自から幾十度となく寫生した結果によつたもので、その遺作展に草稿が出品されて、始めてその苦心に感嘆させられたものである。

珍しい構圖としては、第十九回院展に長野草風氏が出品した「秋畦」がある、田の畔に雁來紅が眞赤に燃え、そこに百舌が飛んでゐる處を畫いたのであるが、飛翔中の百舌を畫いた例は蓋し少いと思ふ。此の外、鶴原紫峰氏の「荷菊に百舌」は力作であるし、速水御舟氏の「百舌の巢」は大正十四年に自邸で開いた個人展覽會の出品であつたが、その巧緻、觀者を驚かせたものである、彫刻では吉田白嶺氏が十九回の院展に出品した「百舌鳥の子」が珍しい處を狙つて居た。

百舌鳥の子を籠につるせば鷓鴣と籠の内外に相歎く聲

久保田 不二子

#### 四一 鷓鴣 (つづみ)

鷓鴣の渡り 野山の木々が霜に色づき、冷たい晩秋の風がその梢を揺がす曉かけて、空には幾群かの渡り鳥

が過ぎて行く、その影の小さくなつて見えなくなるまで見送つてみると、何となく一種の哀愁をさへ感じて来る。鷓鴣の群である。

時にその鷓鴣の二三羽が、黄ばんだ葉の僅かに残る木々の枝などにとまつて餌を漁つてゐるのを見ることがある、時にはまた地上の落葉の上などに見受けることもある、そして此の鳥は何となく晩秋初冬のわびしい感じを増してゐるのである。

その種類 鷓鴣は鷓鴣科といふ一科を爲し、普通種の鷓鴣の外、種類極めて多い、虎鷓、小虎鷓、眉白、黒鷓、赤腹、白腹、眉茶しない、八丈鷓などがある、普通種の鷓鴣は、その形状や色彩もよく知られてゐる處で、色は背が黒褐色、顔は過眼線の上に頬白のやうに白い眉があり、咽喉は黄白色、胸から腹にかけて灰白色地に黒色の著しい斑點があり、嘴は淡褐色、脚は褐色である、此の鳥は夏季に西比利亞地方で繁殖し、晩秋の候になつて大群をなし我が國に渡つて来る、石川縣から長野縣、栃木縣あたりは、此の渡りの通路になつてゐる處から、小高い山上などに霞網を張り、これを捕獲する、多い時には一朝で數百千羽に上ることがある、これが麴漬などになつて、盛に各地に賣出される。

黒鷓 黒鷓は、やゝ小形で、羽色は其名の通り、背面の全部、喉、上胸まで眞黒色、腹部は白くこれに黒の斑點がある、嘴と脚とが黄色であり、雌は褐色が勝つてゐる、この種は普通種とは反對に夏鳥で、北海道から本州、九州各地の山間に繁殖し、冬になると南洋の方面に渡つてしまひ、四月頃日本へ歸つて来る。



赤腹 赤腹は、大きさ形は、普通の鵜と大差はないが、雄は肩がなく、頭と背は橄欖色、胸から腹にかけて両側が褐色、真中は白い、北海道から本州各地の山間にて繁殖し、冬になると暖地に向つて渡る、その巢は松や樅、榊、榛の木のやうな木の枝に巢を営み、その巢の中には泥を入れる習性があり、五月から八月にかけて三個乃至四個の卵を生む、北國のものは關東以南へ、關東邊のものは更に南へ渡るが、大なる群をなさず。

肩白はやゝ大形で雄は全身白色で、眼の上に肩の如き白い斑が長く引いてゐるのが特長である、雌は褐色で、腹は灰色の地に淡褐色の斑點がある。樺太から北海道、本州で繁殖し、四國や九州でも見られるが、冬になると南へ渡る。

◇

ぬえの正體は虎鵜 虎鵜は一名鬼鵜、一名「ぬえしない」「ぬえ」など、呼び、支那では頓雞の名もある、全體が褐色で、これに半月形の斑を散布してゐるのが、虎鵜の名稱の起りである、面白いのは、昔の鵜といふのが此の鳥であるといふことである、それは既に『大和本草』にも

鵜、鬼ツグミと云ふ、常のツグミ三倍ほど大なり、星多し、山中にあり、鵜の字、順和名に唐韻を引けり、中華の書には鵜は怪鳥なりといへり。

といひ、『和漢三才圖會』にも

按、今世稱鷓者非惟鳥、而洛東及處々深山多有之、大如鳩、黃赤色黑彪似鷓、晝伏夜出、啖木杪、其喙上黑下黃、鳴則後竄應之、聲如曰休戲。と明記してゐる、夜出で、甲高い聲で鳴くので怪鳥視せられたのであらう。

併し一方では、此の鳥を地獄鳥だの冥土の鳥だの心中鳥だのと不吉な名で呼んでゐる、それは此の鳥が、添ひ遂げられず心中した若い男女の化身であるといふ傳説から來てゐるし、此の鳥の雌雄が鳴き合せると死人が出るの、此の鳥の姿を見ると其年に凶事があるのといふいろくの迷信が手傳つて來てゐるからである、夜、異様な聲で鳴くばかりに、かうして忌まれるのは、此の鳥に取つて不幸である、その聲が一種の哀調を帯びてゐるので、西行も

さらぬだに世のはかなさを思ふ身にぬえ鳴きわたる明ぼの、空と詠じてゐる。

◇

繪畫の鵜 繪畫の方では、近頃よく比の鳥が畫かれる、それは多く、普通種の鵜であるが、時に黒鵜、赤腹、虎鵜なども畫かれることもある、昭和九年環堵畫藝展に小室翠雲氏が出品した『雨霽』と題した作中の鳥は形状色彩紛ふ方なき虎鵜であるが、嘴の形が非常に變つてゐたので問題となつた、それから同年の日本畫會展には、水上泰生氏が、わざ／＼虎鵜を寫生して出品した、これは虎鵜が不吉の鳥であるといふやうな迷



信を打破し、此の鳥の趣味を知らしめやうといふ意圖から出た出品であつた、昭和十年秋の東京會には、小山大月氏が、『赤い實』と題し、かまつかの枝に比の虎鶉を配してゐた。黒鶉を畫いたのは、第十一回の院展に、古莊肇成氏が『栗』と題した作中に、この鳥を數羽畫いて居たのが記憶に残つてゐる。

普通の鶉を畫いたのは、昭和七年の革内會に、川崎小虎氏が畫いた作、それから、第十二回の帝展に望月春江氏が、『短かき秋の日』と題し、零餘子の絡む雜木の枝に配した鶉も印象が深い、昭和九年の讀畫會展覽會には、森白甫氏が、落葉の上にこれを畫き、速水御舟氏の『冬日』には、落葉した柿の木に三羽の鶉が畫かれた、昭和十年秋の白日莊展に、山口蓬春氏の『冬』も、鶉のわびしい姿が人目を引いた、なほ二十一回日本美術院展覽會に、里内三郎氏の出品した『鶉場曉色』は霞網にかゝつた憐れな鶉を畫いた作であつた。鶉の彫刻 彫刻では、吉田白嶺氏が、第十七回に出品したのが刀のゆきかひ、此の鳥を寫し刻んで眞に迫るものがあつた。

山裾の柿の木に鶉群れ立ちて朝に見ゆる春のうす霜

森 三郎  
中 鳥 銈 子

黒鶉さはな鳴きそねはそばの母をおもひてわがあるものを

## 四二 鶉子鳥 (あとり)

放庵氏の近作 鶉子鳥はあまり繪畫にも描かれてゐないが、小杉放庵氏には、これを畫いた作が二三ある一は昭和八年の秋に開かれた水墨畫の個人展覽會に『山禽』と題して、紅葉を綴つた野薔薇にこれを配し、一は昭和九年の春の多聞洞展覽會に、『横竹小禽』と題して畫いてゐる、一寸毛色の變つた面白い鳥であるが、飼ひ鳥などには少いので、自然繪畫などに現はれることも稀なのである。

放庵氏は、日ごろこの鳥を飼つてゐるので、自然親しみが出て繪畫に取入れたわけであらうが、その感想を『工房小閑』の中、『籠鳥』の項で記してゐる。

あとりといふ鳥を、五六年前故郷の山村で、いかると共に買つて來た、いかるは何と鳴いたか、今にして覚えてゐない、それほど平凡なものであつたら、聖徳太子の斑鳩寺、いかるかの宮は、珠數かけ鳩が集つたからといふ説と、いやこれは、いかるの鳥だといふ兩説ありと學者に聞いた、大さは銀鳩の小さなものほど、嘴太く、キョトンとして、ちとばかり間のぬけたる姿、三年ほどで死んでしまつた。あとりは今も生きてゐる、鳥も年経れば白髪になるか、此頃彼れの黒かつた頭が目立つて斑らになつて來た。この鳥はだんまり屋で、容易に鳴かず、時としては、りやあと一聲鳴くを聞く、いかにも錆のある低い



落ついた調子、いさゝか無氣味にも思はれるが、姿は雀程で、黒と茶の羽紋至つて可愛らしく活潑な動作。

と、兎も角も、餘り顧みられぬ小鳥が、かうして藝術家の眼に觸れて來たのである。

◇

群をなして飛ぶ鳥 繪畫に描かれたものは、右の放庵氏の作位であるが、文獻には、いろ／＼の方面で、なか／＼物繁く現はれてゐる、それは多く此の鳥が群を爲して飛翔し、人々を驚かしてゐるのである。

史實に見えたる『あとり』 『日本書紀』などの記す處に依ると、最も古い記録では、

天武天皇の七年十二月、鴛子鳥天を蔽ひて西南より東北へ飛ぶ

とあるし、次で同九年十一月辛丑には

鴛子鳥天を蔽ひ、南方より西方に度る

とあり、更に仁明天皇の承和十四年には

群鳥億萬、日を繞り上下す、日中より黄昏に至る、仰て空中を見るも何鳥なるを知らず、又この月數々

群鳥有り、遲明西方より東方に渡る、その多きこと天を覆ふ、終始を見ず、諸の故老に訪ふ、皆未だ之

を聞かざるものなり。

とある。これは明かに鳥の名を記してゐないが、小原桃洞はこれに註をして

これ阿止里の遅く去るものなるべし。  
といふてゐる。

鴛子鳥が、大群をなして飛來したことは、その後も屢々ある、『常陸國誌』第四卷には

古老相傳、東南海中有鳥、無知其大小遠近者、鶻燕、鴛子鳥等、常來自此鳥、其來必乘東南風、來、其去必乘西北風去。

とあるし、慶長六年正月には、上野箕輪附近にも飛來したことがあり、その前年十二月にも現はれたといひ

『和漢三才圖會』にも

近頃攝州天滿之寺院、鴛子鳥群飛、不知幾千、而爲鳥林木皆隱矣、如此三四日、人亦群集、以爲奇怪、然無些吉凶焉、自古以遲返群飛、兒女爲怪異也。

とある。同書は正徳年間の出版であるから、寶永年間のことでもあらうか、その後、享和三年出版の畑維龍の『四方の硯』にも

さりし年、嵐山のほとりの竹林に、つねに見なれぬ鳥のむらがりあつまることあり、阿止里といふ。と記し、鴛子鳥に就いての考證を掲げ、伴蒿蹊も、その著、『閑田耕筆』の中に

あとるといふもの、過ぎし寛政七卯年、秋冬をへて明る春まで、嵯峨天龍寺の林に群飛す、都下の人も亦群聚して見にゆけり。



と記し、『日本紀』その他に現はれた此の鳥の記録を掲げてみる、江戸にもその後、安政四年丁巳に群飛襲來したことを、『武江年表』に見えてゐる。

◇ 名稱のいろいろ 鶺鴒あとり鳥の名稱は何處から來てゐるのであらう、漢字を用ひての名稱には、鶺鴒鳥の外、鶺鴒子鳥、鶺鴒子鳥、鶺鴒嘴鳥、鶺鴒鵲、胡雀、花雞と、これ何れも此の鳥の別名である。その和名『あとり』と呼ぶのは、『あつとり』といふことで、『集まる鳥』の意味であらうとは、『大言海』の記す處である。

萬葉集の歌 『萬葉集』第二十卷の防人の歌の中には、刑部虫鷹はが有名なる

國めぐるとりかまけり行き廻り歸り來までに齋はひて待たぬ

の一首がある、國土を守護する防人の職務は重い、併し住みなれた家を離れて任地に向ふ心は寂しい、だが既に赴任の時は來た、鶺鴒鳥が喧しく國めぐり飛び交ふやうに、旅立たねばならぬ、家のものよ、歸り來るまで齋はひて待てといふのである、この一首を見ても、鶺鴒鳥が群をなして大空を飛ぶのが、深い印象をとめてゐたかゞわかる。

鶺鴒鳥の歌としては、此の一首の外に、『袖中抄』に

あまたゆひゆたひたゆたふ雲間よりきこえやすらんあまどりのこゑ

があり、藤爲忠朝臣集には

さへづりしあとの聲に時過ぎて柴とる事をうちわすれけり。

の一首がある、『袖中抄』の『あまどり』は『あとり』のことであるが、これに就いては、『閑田耕筆』には更にあまどりとは、空の雲の中に住て、大かた人にもしられぬ鳥なり、其鳥、六月晦日七月になる程に雲の中に巢を作りて子をうむが、風など吹て雲いたくさわぎて其巢破ぬべければ、わびてなくなり、其時ばかりぞ世の人鳴聲をもきくと或書にかけり、まことゝも覺えねど、古双紙にしるしたれば書載るなり。と記してゐる、群れて空を翔るといふことから、かうした臆測も生れたのであらう。

『和漢三才圖會』の説 寺島良安の『和漢三才圖會』には、その形容に就いて記して曰く

按和名抄注云、此鳥群飛、如列卒之滿山林、故名鶺鴒鳥也(鶺鴒者、鶺鴒字之誤乎)此鳥、常棲山林、不時有群飛出于寺院叢林、百千成群蔽天、狀似雀而大、背太圓、頭頸灰蒼有柿斑、領黃赤、背白、背蒼黑帶赤、有黑斑、胸腹赤黑、腹下黃白、翅尾黑、脚黃白、肉味黃不可食。

貝原益軒の説 貝原益軒の『筑前國續風土記』には、

深山に在り、秋月の山中、甚だ多くむれ飛ぶ、又た平原に多し、出て群をなす事あり、此の鳥甚だ多く群飛す。諸國に異なり、古へより然り。

◇ 形態と習性と 鶺鴒子鳥は、鳥學上からは燕雀目の雀科に屬し、雌雄や、色彩を異にする、即ち雄は頭上か



ら背にかけて黒色を呈し、多少淡い處がある、雌は灰褐色で顔や頸側は頭上と同じだが首の處にやゝ白い斑があり、風切羽は黒色の中に灰白色の個處があり、雨覆の上部は雄に白い部分がある。

その部分はかなり廣く、歐洲から北部亞細亞に及び、日本には秋季群をなして飛來する、先に例を擧げたやうに、昔は東京の空にもその大群を見ることが出来たが、今は殆んど見られず、唯近縣に於て鶴を捕ふべく張つた罫網の中にこれを見ることが出来るばかりである、勿論肉は味がよくなく、加工するばかりである。

俳句の『あとり』

小苦きもあはれに木曾の鴉子鳥哉

斯くも來て斯くも取らるゝ鴉子鳥哉

皆ながら食はるゝものかあとりの斑

日蘭に雲とむれ飛ぶあとりかな

青 \*

同 \*

同 \*

星 路

### 四三 啄木鳥 (きつつき)

鏡花の『啄木鳥』「あ、啄木鳥だ」、眞上に居る、氣を取られて立つのに指を引込めるや否や、はつみにるもりが水の上へ、赤い口を二つ並べた、狙つた獲物に飛かゝる、機が正に熟した處らしい、たゞ一息で指を噛まれる處であつた、同時に突立つたのに驚いたか、綺麗な啄木鳥は中に道を隔てた旅館の樹立へ

移り込んで隠れた、飛ぶ姿は白いあやめの花の宙に翻へるやうであつた、一羽の青げらである。

——泉鏡花 啄木鳥——

啄木鳥の種類 青げらの飛ぶ姿を、白い花あやめが宙に翻へるやうだとは、成る程美しい形容である、青げらはいふまでもなく啄木鳥の一種である。

その啄木鳥には、いろいろ種類がある、そして何れも美しい色彩の持主である、『青げら』は、その美しい種類の中で、随一のものであるが、繪などに現はれるのは、多く『赤げら』である、『赤げら』と呼んでも、赤い羽毛は後頭部と、下腹部、下尾筒丈けで、頭部は黒く、額から眼の周圍は褐色、背は黒色、翼は白と黒の横縞となり、尾は中央の二枚丈けが黒く、外側は、白地に黒の横縞がある。嘴は緑褐色で、その基部から頬へかけて形の黒い斑も面白い、本州の北部には『蝦夷赤げら』があつてよく似てゐるし、滿洲から朝鮮にかけては『嘴太赤げら』が居る、普通の赤げらの褐色の部分に白色で、名の通り嘴が太い、北海道には『大赤げら』が居る、此の種類は、普通の赤げらに似てゐるが、頭に頭巾をかぶつたやうに赤い羽毛がある、『大赤げら』と稱せられる種類は、大抵、此の赤頭巾組である。

青げらは、本邦特有の種類で、頭と眼の下に紅色の横縞があり、他は大體橄欖色系統であるが、背が美しく、翼は褐色が勝ち、腹部には細かい斑がある、『山げら』、『臺灣山げら』などは、此の『青げら』に近い色彩を有し、此の外、琉球には『野口げら』といふ特殊の種類を産してゐるし、『小げら』にも種類は多いが『赤げら』



ら』や『青げら』ほど美しくはない。

啄木鳥は、かうした種類の總稱ともいふべきもので、此の鳥の特長としては、嘴が非常に堅牢で、舌は長く伸ばすことが出来、巧みに此の舌を樹皮の間に挿入して中に潜む蟲類を啄む便がある、四指が二本づつ相對し、樹木の登攀に便になつてゐるが、時には三本のももある、コツ／＼と樹幹を突くので此の名があり樹木の洞などを巢として四五個の卵を生み、主として昆蟲や木の實などを食としてゐる。

寺つゝきの傳説 啄木鳥の一名に『寺つゝき』といふのがある、これは、佛教の渡來から之を信ずる蘇我氏と反對の守屋氏が互に相争ひ、遂に守屋氏は敗北し、蘇我氏は勢ひに乗じて、各地に寺院を建立したが、攝津に四天王寺を建立し、その造營漸く成るや、何處からともなく無數の啄木鳥が現はれて、寺の軒といはず柱といはず處嫌はず、あの強く逞ましい嘴で突き傷け、寺を滅茶々々にしてしまつた、誰いふとなく守屋の怨靈が啄木鳥となつて寺を傷けるのだと、それから此の鳥に『寺つゝき』といふ名がつけられた、支那では、『列鳥』又は『斲木』などといふ。

啄木鳥の歌 檜の木にけらのうつ音けた、まし氷張る湖の汀なりけり 川田 順

これは諏訪湖か、田澤湖が、森閑とした冬の朝、このコツ／＼の音を聞くのも何となく詩趣が深い。

うつろ木に餌食あさりて啄木鳥の冬枯木立啼きうつらむ 平福 百穂

これは矢張り畫人の歌である、その啄木鳥を聞く境地、それが既に繪になつてゐる。

俳句の啄木鳥 俳句では秋の季題に入つてゐる、姿は美しいし、その木を啄む音に俳味があるので、矢張りそれが中心となつて幾多の名吟を生んでゐる、二三擧げて見やう。

啄木鳥の柱をたゝく住居かな 曲 翠

啄木鳥の啄き登るや 葛の間 浪 化

手斧打つ音も木深し 啄木鳥 蕪 村

啄木鳥の目利して居る 菴 哉 一 茶

啄木鳥の音や銀杏の散がてら 支 考

などそれ／＼に面白くないか。

○ 題一の名作 啄木鳥を繪にしたものは、屢々見受けるが抱一に素晴らしいのがある、それは西尾家の傳來で『秋檜啄木』と題し、『寒梅鴛鴦』と双幅になつてゐる、西尾家は遠州横須賀の藩主で抱一が特に西尾家の爲めに腕を揮つた名作である、檜の幹に赤げらが啄いてゐる、下には尾花に烏瓜が絡つて、それが眞赤に色づいてゐる。

百穂の作 近い作では、平福百穂遺作中に松樹に啄木鳥を畫いた作がある、松は得意のものであつた丈



によい出来であつた、荒木十畝氏の大作『林梢文錦』にも、啄木鳥が活躍してゐる、此の外、廣瀬東畝氏の絶筆となつた帝展十回作品『深山の秋』、池上秀畝氏が昭和七年の東京會に出した『幽谷響』、第十五回院展に大智勝觀氏の『諦聽』、速水御舟氏の昭和九年秋の東京會展出品『紅葉啄木鳥』、小室翠雲氏の昭和十年個展出品『霜の朝』、川端龍子氏の『秋啄』、岸浪百草居士の『露葉霜條』、京都の三輪異勢氏が如月會に出品した『春律』などが、擧げられる。

◇  
啄木鳥のごとく 空山一鳥啼かぬ夕暮、不圖前の松山のなかに、いかにも單調な枯淡寂然たる木を叩く音を聴くことがある、孤獨なる啄木鳥の木をつゝく音である、わたくしは閑古な啄木鳥の木を叩く音を愛する、黙々として歌はず、鳴かず、空山の寂寞を一つ音にこめて木をつゝく啄木鳥は、また歌以上の静かなるもの、玄なるものをわたくしの胸に響かす、夕暮の薄暗は松山の徑をつゝみ、爐の火に迫る啄木鳥はなほ々暮れの戸を叩くごとくかすかに木をつゝくことを止めない。

——吉田絃次郎——啄木鳥のごとく——

#### 四四 鶉

(つじら)

徽宗皇帝の『水仙鶉圖』 鶉には名畫が多い、その中でも、淺野侯爵家秘藏の徽宗皇帝筆、『水仙鶉圖』は、何といふても第一に推さねばならぬ傑作である、徽宗皇帝は、皇帝として決して治績は擧らず、その末路の如き、殆んど正視するに忍びないやうな悲劇的最期を遂げてゐるが、藝術家としては實に素晴らしい傑作を遺し偉大なる畫業を完成してゐる。

此の鶉の圖は、極めて簡單な構圖で、唯一羽の鶉と、その上部に花と葉を見せた水仙と鶉の背後に土坡を表はした一線あるに過ぎない、然も此の鶉の姿態の如き、寫生の極地に達して森嚴の氣自から襟を正さしむるものあり、水仙亦精緻の中に雄勁なる筆意を以て、よく鶉の生氣を輔けてゐる、花鳥畫もこゝにまで來ると、神品といふべく一種宗教的信念をすら生ぜしむるものがある。

李安忠の鶉 鶉の名手としては、同じく宋時代の人、李安忠の名を逸することは出来ない、李安忠は徽宗皇帝の宣和畫院を出仕して、南宋の頃、紹興畫院に戻つた人、丁度李迪と同期の藝術家である、鶉の外にいろいろ動物を畫いてゐるのであるが、鶉は最も得意としたものであり、日本にも李安忠の作として傳へらるもの數點あり、何れも鶉の姿、堂に入つてゐる、その一つは島津公爵家舊藏のもので、極く小品であるが、



鶉を手一杯に描き、表装を臺貼とし、これに光起が粟穂を畫いてゐる、光起が自から畫き表装をする位であるから、如何に此の小品が貴重なものであるかを察せられる。

前田侯爵家舊藏の一點は、同じく堅七寸九分、幅七寸六分の小品であるが、雌雄の二羽を畫き、雄は嘴を以て羽毛を淨め、一は仰向いて居り、傍へには鴨趾草の花が咲いてゐる、その描寫は極めて精緻であり、よく構圖が整つてゐる。箱は探幽が書いてゐる。

いま一つは根津嘉一郎氏の所藏で、洲濱の中に一羽の鶉を畫き、草を配したのであるが此の鶉は、やゝ正面に近い姿を畫いてゐるのが珍らしい、何にしても李安忠の鶉は、品に於て徽宗皇帝に一步を輸つてゐるにしても素晴らしいものである。

張氷涯の鶉 李安忠に次いで、鶉の名手としては張氷涯をも挙げなければならない、張氷涯も花鳥には名を得た人丈けに、『君豪觀左右帳記』には中の部にその名を記して居り、特に『鷹、彩』と付記してゐる、我が國に傳へられてゐる處では、もと紀州家にあつた『飛鶉圖』が珍らしい、圓窓の中に、鶉の飛翔する處を手一杯に畫いてゐるのであるが、あまり他に例を見ない。

小栗宗丹の作 我が國の畫人の中にも、鶉を得意としたものは少くない、その中で、紀州家傳來の小栗宗丹の『野菊鶉圖』は有名な作であるが、これは前田家傳來の李安忠と同一構圖のもので、唯、草が鴨趾草つゆくさと野

菊と變つてゐる丈けで、鶉の雌雄の姿態など全く同一であり、却つて生氣に乏しい遺憾がある。

土佐光起の作 土佐家では光起によくこれがある、著者の手記にあるものでも、吉田楓軒氏舊藏、鶉と菘菜すなわを畫いた『秋草鶉圖』、石川縣樋爪家の『一本菊鶉』、淺田家の『粟鶉圖』などがあり、殊に粟穂に鶉を配した作が多い、土佐家ではなほ、光吉にもあれば、光芳も畫いてゐる。

南畫の方面では竹溪がよくこれを畫く、双軒庵の舊藏であつた横物の『秋草鶉』には、竹洞がこれに賛してうづらなくゆふべいかにと訪ひくれば秋風さむし深草の里

を書いてゐる、蓋し得意の壇場である、榛山にも『野菊鶉圖』の力作があり、野菊咲き亂れ、粟の穂の垂る、處、三羽の鶉を點出し、一は叢より地上を目がけて飛び降りやうとし一は之を仰ぎ、一は無念無想に餌を漁つてゐる、三羽三態それぐの形に妙味あつて、よく周圍の情景に調和してゐる。

珍らしい鶉の繪 珍らしいものでは、東京博物館に性曉の鶉圖がある、雛を育て、ゐる構圖が珍らしく、性曉の作は極めて少數であるといふ、雛といへば、井上侯爵家傳來のものに楊月欄の雛鶉といふのがある、あまり見ない構圖である、琳派では光琳に少く、抱一に多く、四條派では清の作に之を見る。

現代作家の作 現代の人々に依つても、鶉は屢々畫かれるが、殊に近頃に於て記憶すべきもの二三ある。その一は昭和十年の春、荒木十畝氏が讀書會展覽會に出品した中の『晩秋』で、これは、未枯れてゆく秋の曠



野に雌雄の鶉を畫いたものであるが、その鶉を畫くに當つては、初めに朱線を用ひ、これを基礎に筆を重ねてゐた、この朱線が如何にも效果的であり、色彩感を敦厚ならしめたか、當時觀客の等しく注目する處であつた。雌雄を正しく畫き分けたことも、李安忠以後少い例である。

同じ年の六潮會展覽會に、福田平八郎氏の出品した『初冬』も珍らしい構圖であつた、それは既に素枯れた草原の中に鶉を潜ませた構圖で、如何にも才が利いてゐた、それと黄土色の草と、鶉の羽色との對照が面白かつた、同じ會に山口蓬春氏も『春野』と題して『鶉』を畫いた、これは蒲公英や土筆の萌え出た春の朗らかな構圖で、『初冬』の荒涼たると、よい調和を見せてゐた。

この外、平福百穂氏の遺作中にも、鶉と秋草を畫いた小品のよいものがあり、川端龍子氏には『双鶉』の力作があり、土田麥僊氏には鶉の屍を描いた作がある。なほ各展覽會等に出品された鶉の作を挙げたなら、それこそ際限のない位である。



**鶉の形態** 鶉は鳥學上からは雉科の鶉雞目に屬してゐる、雉科の中では一番小さい鳥で、西比利亞の東南から滿洲、蒙古、支那、朝鮮から本州に分布し、我が國では北海道、東京地方で繁殖し、冬になると臺灣邊にまで現はれて来る。

**羽毛色彩の變化** その繁殖期間は五月から八月に至る頃までで、その頃になると雌は喉の邊が美しい栗赤

色を呈して来るが、冬になると消えて白色の月形のやうな斑が現はれて来る、雌は淡褐色で變りはない、その背から翼、尾筒へかけての色彩は白と黒の交錯した、一種特殊な色調を呈し、短は殆んど無きに等しく、軀が肥えて圓く、それにまた一つの特色がある、『和漢三才圖會』は、これを記して

本綱、鶉大如雞雛、頭細而無尾、有斑點其肥、雄者足高雌者足卑、其性畏寒、在田野、夜則群飛晝草伏、人能以聲呼取之畜令鬪搏、其性淳不越橫草、窟伏淺草無常居而有常匹、隨地而安、其行遇小草即旋避之、亦可謂醇矣、蝦蟇得爪爲鶉、又南海有黃魚、九月變爲鶉、而盡不爾、蓋始化咸終以卵生、故四時常有之、駕則始田鼠化、終復爲鼠、故夏有多無。

と、蝦蟇が爪を得れば鶉になるといひ、南海の黃魚が九月になると鶉になつたりするといふなど、その色彩から來た妄説に違ひないが如何にも面白い。

**營巢産卵** その巢は高原の草の根際などに、枯草を集めた極く粗末な拵らへ方であり、その中に十個までの卵を生む、卵には褐色の小さい斑があり近來食用にして珍重されてゐる。

**鶉飼養の流行** 肉は食用として、鳥類の中で、一二を争ふ美味であり、その季節も、麥鳥、雪鳥といふて春先と冬の中が一番美味とせられて居り更に徳川時代から、此の鳥を飼ふことが流行し、鳴く音を競つたことが、隨筆などによく現はれて来る、『鶉合せ』がそれである、『嬉遊笑覽』に曰く

江戸には南部より多く来る、近年明和安永の頃、鶉合の事流行て、大諸侯競ひて是を飼はれける、鳥籠



は金銀を鑲め、唐木象牙螺鈿高麗繪にて、皆一雙づつに作らせ裝束は足かけ天幕金欄猩々緋のたくひ用ひざるものなし、其會日には江戸中鳥好のものは是また件のことく、美を盡しよき鳥をえらひ持出で、勝負をなす、鶉は朝をむねと啼ものなれば、必朝早く會あり、飼鳥屋は江戸中のもみな集りよしあしを聞わけ、甲乙をさだめ角力番付の如くに東西を分ち一二を以てするす大奉書を横につぎて書付、東西壁の上に貼付、もし一となれば、鳥屋共に祝儀として目錄を遣す、此費許多なり。といふ位で、その音にいろ／＼位づけを爲し等級を定めた、なほ此の鶉の流行、それにまつはる物語などは著者の前著『鳥』にも記したから、こゝには省略する。

鶉の文學

文學の方では、古く『萬葉集』から鶉の歌が散見する、十六卷に

十一卷には

ひと事をしげしと君を鶉なく人のいにしへにあひひてやりつ

の一首があり、この外四卷にも八卷にも鶉の文字の現はれた歌がある。

萬葉以後の歌集には、鶉も漸くことしげく現はれて來るが、繪に粟穂と鶉とを配したもの、多いやうに、和歌でも鶉と粟は縁が深いと見えて

作者未詳

うづら鳴く粟つのはらのしのす、きすきそやられぬ秋の夕べは

皇太后宮大夫俊成

わかせこか狩にのみくるあはつ野に鶉なくなりくさかくれつ、

二條大皇太后宮肥後

鷹のこを手にはすねえどうつらなく粟津の原にけふもくらしつ

法橋顯昭

たかのこはまろにたはらむてにすゑてあはつ原の鶉かりせん

よみ人知らず

などがある、鷹狩の獲物に、いくつ鶉が狙はれたことであらう、この外、多くの歌に現はれたものを見ると大方は鶉の聲に秋の寂しさを歌つたものである。

俳句の方でも、鶉には中々名吟がある、許六の

粟刈れば野菊の下に啼く鶉

は、さしあたり前に擧げた小栗宗丹の繪の姿そのまゝである。

粟の穂をこぼしてこゝら啼く鶉

も、直ちに繪になる。

出合ひたる心はなんと啼く鶉

その姿から見て、かうした感じもびつたり來る、光起あたりになりさうである。

鳴け鶉邪 騒なら庵もたゝむべき

歌にするならば、良寛の氣持となるであらう。

惟然

北枝

一茶



更に支考は、その『百鳥譜』の中に、

深草に住なる鶉は、其聲すみやかにして世をはゞからず、山にもちかく、水にも遠からず、粟の穂の静かなる時は、こゝにも出てあそぶべし。

といふてゐる、鶉に對して、よくその情を抒べてゐる。

漢詩の方でも、矢張粟との關係が深いと見えて、林景清の詩の中にも、

秋入二郊原二粟正肥、山禽成隊啄二斜暉。

の文字がある。

飲啄飛鳴各後先、當時操筆想中傳、生來野態无拘束、萬里秋風自在天

王 佐 才

なども鶉をよく描いてゐる。

◇

旅順は旅鶉 鶉は滿洲に多く、毎年少からぬ鶉が捕獲される、そして鶉の渡りをする道筋なども實によく

知れ渡つてゐる、旅順は、即ち鶉の渡りをする順路に當るので、昔は旅鶉と書いたものであつたが、それが今の文字になつたのであると、これは近頃滿洲から歸つた人の話の一節である。

——島田墨仙氏談——

### 四五、雁 (がん)

好畫題「芦雁」 繪畫に現はれた雁を見ると、蘆雁が最も數が多く、その筆者により、筆致や構圖もそれぞれ變つてはゐるが、雁と蘆とは誠に好個の配合であり、これを表現するに水墨よく、着色また佳、そして東洋畫獨特の筆致を發揮する上に於て、四君子に次ぐ重要なものである。

雁の形が極めて面白く、嘴から頭部、背から胸・翼の色調、脚の状、鴨などは違つて十分に筆意を見せることが出来るし、蘆が亦竹とは變つた味を發揮することが出来る、若しそれ、上部に月を畫いて、月下蘆雁とする時は、更に構圖の上に縦横の技倆が揮へることになる。

それ故、昔から、北畫といはず、南畫といはず、畫人は争うてこれを畫いた、だから名畫として傳へられる處のものも少くない、以下著者の記憶に残つてゐる作を列挙して見やう。

羅窓の作 先づ最初に羅窓の筆である蘆雁の双幅を擧げる、これはもと郷男爵家の襲藏で、右に飛雁を畫き、その下に一羽、左に二羽、この一羽は飛翔してゐる一羽を見てゐる、蘆葉は極めて簡單に畫いてはゐるが、生氣瀟灑として面白く、流石に鳥の名手丈けあつて、左幅の後ろ向になつてゐる雁の如き實によく畫けてゐる、羅窓の雁では、九州の大村家に傳へられたものにも名幅がある、これは前の作よりは遙かに密たも



ので、右の上部に『羅窓筆』の落款があり、安信の極がある、蘆葉は細密な寫生風で花穂を現はし、雁は二羽その向きを反對にしてゐるが、左に體を向けた一羽は首を回らして水邊の方を見つめてゐる、此の雁の姿態眞に迫るものがある。

惠崇の芦雁 『君豪觀左右帳記』には、蘆雁の名手として惠崇の名が擧げてある、その作として我が國に傳はつてゐるものでは、佐竹侯爵家舊藏の双幅がある、縦四尺二寸三分、幅二尺一寸二分の大幅で、左右で四羽の雁を畫いてゐるが何れも形眞に迫り、蘆の筆致も面白く、流石に蘆雁の名家の筆と感嘆せしめられる、その首の描寫の巧みさ、羽毛の墨色の效果、全く一點一劃の加減を許さず、素晴らしいものである、惠崇の筆では、神戸の川崎男爵家にも一點あつた、これは蘆雁ではなく、規模も前者ほどの大きなものではなく、圓窓の中に、雁十羽を畫き、眞孤と蓮葉が背景となつてゐる雁の姿態は、舞ふもの泳ぐもの、それ〴〵に姿態に變化があつて面白く、此の畫人の如何に雁の研究に深味があつたかを推知することが出来る。

牧谿の作 牧谿にも素晴らしい蘆雁の作がある、元、松浦伯爵家の秘藏で、寧一山の賛がある、素朴な筆で雁三羽を重ねて畫いてゐる技巧と、背景をなす蘆の筆致の優れてゐることが特筆に値する、牧谿はその畫材の範圍極めて廣いが雁は殊に得意としてゐたらしく、世に傳ふる所の瀟湘八景の一なる『平沙落雁』の如きは、その構圖の妙、人をして三嘆せしむるばかりでなく、雁の姿態も千變萬化を極め、應接に遑もない、此の、『平沙落雁』は、牧谿の傑作たる『瀟湘八景』の一つで、もと豊臣秀吉の愛玩する處であつた。この外、舊紀州

家の所藏には呂紀の作もある、例に依つて克明なる寫生本位の作であるが、雁の羽毛の描寫等には、流石に一つの特色を有してゐる。

二天の傑作 日本の畫人の手になるものでは、先づ第一に細川侯爵家の宮本二天筆、蘆雁六曲一双を擧げなければならぬ。これは二天としての力作であるばかりでなく、恐らく、蘆雁を畫いたもの、中でも大作として擧ぐべきものである、右半双は白雁で、左端には松の老樹を現はし、下は直ちに沼澤として、蘆荻繁り右方は浮洲となつて、前後に十數羽集まつてゐる、左方は雪景で、右端には柳の樹を配し左方は土坡となり、蘆荻を背景としてゐる、雁は眞雁で、多く土坡の上であり、一羽は高く翔り、下方の二羽はこれに相呼應してゐる、雄勁枯淡、二天一流の筆致でよく雁のあらゆる姿態を寫してゐる、殊に雪を頂く柳のあなた、一羽の飛翔して居るあたり、筆は最高調に達してゐる。

雪舟の芦雁 雪舟にも素晴らしい作がある、越前松平侯の舊藏で、中白衣觀音、左右蘆雁の三幅對である、何れも眞雁で、右は飛雁であり、左は土坡の上にある、墨色極めて鮮かに、雁の姿態もよく整つてゐる、常信探幽の外題、安信の添狀も揃つてゐる名品、雪舟にはなほ中に達磨を畫き、左右を蘆雁とした作もある、狩野家の人々 狩野家の人々にも蘆雁は中々多い、簡略な筆で、よく詩的な構圖を見せたのは、舊大村伯爵家所藏であつた尙信の横物である、江月和尙之に賛して曰く



蘆葉風寒葦水邊、雁奴斂羽打安眠、不傳蘇武帛書去、閑却忠心十九年。

と、賛も面白いが、凡そ蘆雁を畫いて此の作位、簡略な筆を以てしたのも少からう。尙信は蘆雁を好んだと見え、諸處にこれを見る。この外、探幽にもあれば、常信にもあり、古く元信もこれを畫いてゐる。

◇

**南畫の蘆雁** 南畫の方面に於いても、蘆雁の作は極めて多い、先年松本雙軒庵氏の賣立に現はれた、竹田の『寒月蘆雁』は、竹田の作中でも、優秀の部に屬するもので、竹田は、これに題して曰く、

影橫斜月天連塞、夢繞黃蘆雪覆洲、肅愍于公之句

田憲并題

と、如何に得意の作であつたかがわかる、華山にも、素晴らしい作がある、同じく『月下蘆雁』で、二羽の雁は月下の水中に游泳し、一羽は草根を嘴にしてゐる、蘆葉の間から満月を見せた構圖は如何にも雄渾の感じを與へる、天保丁酉、華山四十五歳、最も技の圓熟した頃の作である。

此の華山の作に一寸構圖が似てゐて、また別の趣きを見せてゐるのが椿山にある、華山は水邊に圖を取つたが、この作は陸上とし、土坡の上を二羽の雁が歩み、上から覆ひか、つた蘆葉の間から満月を見せた、これは濱松市の中村藤吉氏が愛藏品であつた、彼我對照して見ると、また特殊の興が湧く。

**玉蟾の名作** この外、別派のものとしては、京都相國寺に玉蟾の『蘆雁』がある、六曲半双に十羽の雁を畫き、右方に蘆、左方に松樹を畫いてゐるがよく整ひ、筆も潤ひがある、雪舟を慕ひ、元信の畫風に私淑した

玉蟾の筆には、またさうした感じがよく現はれてゐる、そして蘆雁は殊に得意としたもの、その系統に望月玉泉あり、亦、蘆雁の佳作がある。

一方また蘆雁で有名なものに、熊代熊斐の作がある、熊斐は沈南蘋の高弟で、一家を爲した人、南蘋の寫生に加へて、筆に自家の工夫を加へ、その作世に推賞せらる、蘆雁ではいま橋本辰二郎氏所藏のものが、その代表作とされてゐる、構圖は矢張『月下蘆雁』で、雁の姿態は寫實の妙を極め、葦はや、南畫風に筆致の味を見せてゐる、淡彩を加へてゐる點など、狩野派の人々の作とはまた變つた趣きがある、落款には『丙戌仲秋繡江熊斐寫』とあり、明和三年、熊斐五十四歳の時の作である。

琳派の人々の作では、もと因州池田家の什寶であつた双幅の面白いものがあり、光琳には大澤百花潭舊藏の『月下蘆雁』がある。

◇

**『平沙落雁』** 雁を畫いたもので、山水として扱はれてゐるのは、前にも擧げた『瀟湘八景』中の『平沙落雁』である、瀟湘八景とは、支那の湖南省にあつて、湖南瀟湘の二の水が落合ひ、洞庭湖に注ぐ處で、風光絶佳爲めに詩人墨客の吟詠に上り、名家の筆になるもの少からず、始めて之を繪に畫いたのは宋の宋迪であると云ふ、それから益々有名になつて、馬遠、米友仁、王可訓等にその作があり、殊に、玉澗、牧谿の作が世に喧傳されてゐる、玉澗の『平沙落雁』は俗に雁の繪と稱せられ



點々隋群舊處棲、蓼花蘆葉暗長堤、天寒水冷難成宿、猶自依々怨別離

の賛があり、僧珠光の愛蔵であつたが、天正五年岐阜中將信忠に傳へられ、更に豊臣秀吉の手に入り徳川家康へ移り、家康から更に秀忠まで傳へられてゐることは明白であるが、その以後の消息が不明になつてゐる『瀟湘八景』の一として『平沙落雁』の描かれたものは、前の玉潤や牧谿の外に啓書記、雪村、元信、相阿彌永徳、山樂と種々の人によつて畫かれて居り、近代では橋本雅邦に名作があり、第六回の文展には寺崎廣業と、横山大觀氏とが共にこれを畫いて評判を取つたものである、平遠山水として、雁の配置にも、それぐ特長があつて中々面白い。

雁と人物 更に雁に人物を配したものは、蘇武の雁信が、昔からよく畫題となつてゐた、日本のものでは、源義家が、『雁行の亂れを見て伏兵を知る』といふ物語を繪にしたものでこれは大和繪にはよく現はれるもの、藤田男爵家には訥言の作があつた、『曾我物語』の一節である兄弟雁行を見て父母を慕ふの圖また、大和繪にはよく現はれるのであるが、特に取立て、擧ぐる程の作もない。

『初雁の御歌』 雁に關係の有る作としては、鏑木清方氏の筆である明治神宮聖徳記念繪畫館壁畫の『初雁の御歌』をも逸することが出来ない、これは明治十一年の秋九月、明治天皇が北陸御巡幸の砌、赤坂假御所に在した時の皇后宮、昭憲皇太后宮が、御旅の空を偲ばせ給うて、折柄鳴き渡る初雁の聲に  
初雁を待つとはなしにこの秋は越路の空のながめられつゝ、

と詠ませられた御事蹟を寫し奉つたもので、萩の花咲き亂れた御苑に玉歩を運ばせ給ふ御姿を謹寫し、雁の群れが空を渡つてゐる、これは、はじめ吉川靈華氏が揮毫の豫定であつたところ、靈華氏が逝去したので清方氏が筆を執ることになつたのである。

この外、雁を畫いた作には、蓮を配したものがあるし、尾花に添へたものがあるし、更に奇抜なものには等禪の作に、椿に雁、薔薇に雁を畫いたものがあり、岸俗の作には『芙蓉遊雁』と題して、芙蓉に眞雁と白雁を配したものがあり、白雁には白鷹と雪を畫いて『三白』とした玉晋卿の作もある。

現代畫家の背廳 現代の人々でも、蘆雁の作はかなり多く、荒木十畝氏の『十畝畫集』に收められた圖の如きは、非常な努力のものであるし、榊原紫峰氏もよく蘆雁を畫く、國畫創作協會に出品したもの、如きはその代表作で、當時評壇を賑はしたものであり、更に枯蓮に双雁を畫いたもの、雪中の蘆雁などいろ／＼に趣をかへて畫いてゐるし、故平福百穂氏にも、墨色を面白く見せた蘆雁の作がある。

吉田登賢氏の『銀河』 變つた趣向としては、吉田登賢氏が、昭和九年の日本畫會に出品した『銀河』で、これは、銀河に白雁を舞はせてゐる、白雁だけに面白く、十五回の帝展には井上恒也氏の『みぞれ立つ』といふ作があつて、多くの雁の飛ぶ處を畫いてゐた、更に近くは兒玉希望氏が、昭和九年の暮、關荷美堂の展覽會に『霜晨』と題して、月前の群雁を畫いた作など記憶に新しいものである。



雁の種類 さて次には雁の種類である、寺島良安の『和漢三才圖會』には、眞雁、白腹、雁金、白雁、菱喰（のり）等を挙げ、左の通り記してゐる。

眞雁 蒼黒而胸腹有白黒斑、其嘴白脚黃其肉脂多美。

白腹 即眞雁未長而腹白無斑、故名、或曰腹白、其肉軟極美。

雁金 大如白腹雁而全體蒼黒額白、眼邊黃、嘴赤而細、其脚黃也、稀捕之其肉稍劣

白雁 全體白而翅翮黒、嘴與脚赤色其肉脂少、凡中秋白雁先來、而雁金次之、遲仲春眞雁先歸而三四月

白雁歸、眞雁遲來速歸、俱雌雄並爲行列、如失偶則唯一羽來住、爾凡夜止宿中換居、謂之打更。

菱喰は、鴻として別に記してゐる、曰く

鴻 音洪、雁之大者也、多集鴻渚故字從江、俗云菱喰

按謂菱喰、狀類雁而大背頸俱灰色、翮深黒其尾本白未黒、腹白脚黃、嘴黒而鼻邊有黃條、其肉味不劣於雁、脂亦多臭香有似鶴肉。

一種有加豆羅麥、狀小於鴻而頸俱灰色頸有柿色斑、腹白嘴正黒、而扁其翮尾皆同鴻。

此の外に雁の種類としては、さかつらがん（酒面雁）らふばしがん（蠟嘴雁）黒雁などが數へられる。

眞雁 これらの雁の種類の中で、最も多く藝術に現はれるのは眞雁である、額と嘴の基部が白色を呈して

ゐるので、支那では白額雁と呼んでゐる、雁の中では最もよく知られてゐるもので、以前は東京の空にもその行列を見ることが出来たのであるが、今は見られなくなつてしまつた。

雁金 雁金は、眞雁に似て形は遙かに小さく形のよい種類であるが、一體に少數で、千島から北海道、本州で稀に見られるのであるが、學界では珍貴のものとしてせられてゐる。

白雁 白雁はシベリヤや、北部アメリカ等で蕃殖し、冬になると支那、蒙古、日本あたりへ渡つて來る、全身名の通り雪白色なので、支那では、雪雁と呼んでゐる、色のあるのは嘴が紅紫色を呈してゐると、脚がや、似た色彩を有すること、それから初列風切羽が一寸黒いだけである、此の種類も、繪畫などに盛に現はれてゐる處を見れば、日本にも多く渡來したのであらうが、今日では稀にしか見られなくなつてしまつた。

菱喰 菱喰は、鴻雁といはれ、また支那では大雁といふやうに大形である、その菱喰の名は、渡來期に沼澤に降り、好んで菱の實を食べるからである、眞雁などに次いで、よく繪に描かれる、眞雁との區別し易い點は、額と嘴の基部の淡褐色な點で、時々白色の斑點を見ることもある。

黒雁 黒雁は名の通り黒色であるが、頸の所に白色の輪狀をなしてゐる處がある、嘴も、脚も濃黒色、下腹と上下の尾筒だけが白色で、著しい色彩の上の特徴をもつ、北極アメリカ、ベーリング海峡邊に棲息し、冬になると渡りをする、滿洲支那から日本では樺太千島、北海道本州にも稀に見ることが出来る。

此の外、本邦に産するものに、四十雀雁がある、頭から腮へかけて黒色であるが、頬に白色の部分があり



頸にも白色の輪状した羽毛がある、四十雀雁の名は、此の頬の色からつけられたものであらう、別に頬白雁の名もある、シベリヤの北岸あたりで蕃殖し、冬になると我が國にも渡來する、近年までは埼玉や千葉縣下に百數十羽群をなして飛來したといふ、今日では僅かになつてしまつたやうである。

**酒面雁** 酒面雁は東部シベリヤから、カムチャツカ方面で蕃殖し、冬期我が國が樺太から千島、北海道、本州へ渡來し、支那の江蘇省邊まで渡るその酒面雁といふ名は、此の雁、頭から顔にかけて赤土色をしてゐるので、丁度人が微醉のやうな顔といふので此の名がある、嘴の基部には狭い白色の部分があり、體色は概ね灰褐色、腹に褐色の斑紋がある、此の種類は、鶯鳥の原種であるといふので有名であり、その爲めか、支那では、原鶯の名があり、又、洪雁とも呼ばれてゐる。

鰲嘴雁は濠洲の原産で、昭和になつてから飼鳥として渡來したものであるから、藝術には交渉はない。



**雁の習性** 雁の習性に就いては、古來よく知られてゐるが、『本草綱目』には、雁の四徳を擧げてゐる、曰

雁有四徳、寒則自北而南、熱則自南而北、其信也、飛則有序而前鳴後和、其禮也、失偶不再配其節也、夜則群宿而一奴巡警、晝則啣蘆以避繒繳、其智也。

と、寒ければ北より來り、熱ければ南より北に去るといふことは、餘りにも著名なことでこれは、その生活

に順應する習性であることいふまでもなく、飛ぶに序あつて、前が鳴き後のこれに和することも、渡りをする鳥の自然に慣はしとなつたことであり、寝る時、一羽は必ず起きてゐる、絶えず警戒し、危急の際は、聲を立て呼起すといはれてゐる、それから、雁は一雌一雄であることも知られて居り、卵は海岸の凹地に産む、一方が死ねば終世他の異性を求めぬといふのも正しい、なほ、四徳の中に嘴に蘆を啣へて繒繳を避くといふことがある、此の繒繳といふのは、矢につける布のことで、つまり矢を避けることになつてゐるが、此の口に物を啣へるといふことから、奥州外ヶ濱邊では雁風呂のことが傳へられてゐる。

**雁風呂** 雁風呂は即ち、雁が渡る時に、皆小さい木片を啣へて來て、海を渡る時、疲れ、ばこれを水に泛べてとまり翼を休め再び飛び、陸地に着くと落して捨てる、漁夫がこれを集めて風呂を焚くので、雁風呂といふのであると、これは古い傳説で、戯曲にまで取入れられてあり面白いことではあるが、事實ではなく、一の傳説に過ぎない。

次に雁を、『かり』又は『かりがね』と呼ぶ理由に就いては、區々として定かならず、『言海』には『鳴く聲を名とせるか』といひ、『東雅』には、『カリ』は『かへり』といふことの轉訛といふものがあると記して居り、『かりがね』はその鳴く聲から取り、『雁が音』であらうといふ、今となつては何れを眞とも定め難い。



**雁の文學** 文學の方面を見ると、雁は中々に豊富である、『萬葉集』など繙く、雁の歌が三十餘首もある、



その中で、柿本人麿の

巨椋入江どよむなり射部人の伏見が田井に雁渡るらし

秋風の山吹の瀬のとよむなべ天雲翔る雁を見るかも

は有名である。この外十卷の作者不詳

秋風に大和へ越ゆる雁がねはいや遠さかる雲がくりつ、

は、實感であり實景である、當時の人々は、かうして雁の渡りゆくを見て、人の世の旅のことにまで思ひ及んだのであらう、同じく

天雲の外に雁がね聞きしよりはだれ霜ふり寒しこの夜は

の一首には、季節の感じがよく現はれてゐる、時には、雁の文携へるといふ故事から

常陸さし行かむ雁もが我が戀を記して附けて妹に知らせむ

物部道足

など、歌つたのもある。

春になつて、燕の來るところになると、雁は北の國をさして歸つて行く、この歸雁も昔から、幾百千人の吟

詠に上つたことであらう。

燕來る時になりぬと雁がねは本郷思ひつゝ雲がくり喧く

大伴家持

俳句には、秋の季題になつて居り、歸雁が春に入れられてゐる、流石に名作が少くない。

病雁の夜寒に落ちて旅寝かな  
鵲の橋かけ渡せ佐渡の雁  
遠山や身を打ちつけて風の雁  
番雁の面に風吹く蘆間かな  
連のない雁よ來よ〜宿貸さん  
など、それ〴〵に面白く、一茶には殊に雁の句が多く、中には、寂しい一茶の面影が句を透してよく見える  
のがある。歸雁の句では、

歸る雁田毎の月のくもる夜に  
順禮に打ちまじり行く歸雁哉  
風呂の戸を開けて雁見る名残哉  
などが面白い。

雁と詩文 支那の詩文にも、雁はよく現はれて來る。

數聲和月落、一點入雲橫。

の如きは將に、一幅の繪であり。

清音天際遠、寒影月中微。

芭蕉 許六 白鷗台 一茶

蕪村 嵐雪 几董

鄭夢同

徐鉉



は、その鳴く音を聞くやうな心地がする。

嘹亮孤雁夜色清、蘆花深處守殘更、華堂多少箏琶客、誰解燈前聽雨聲。 潘 際 雲

も、水墨畫の蘆雁を見る心地がするし、華堂多少箏琶客で、人物を點出する手腕も面白い。

此の外なほ 月裏參差影、風前次第聲、清商天外落、多少世人驚。

吳 愛

も雁の詩として何かしら感せしめる。

秋の雁の江天におくれ、時鳥の曉の雲にさけぶ、いづれにかさだめ侍らん、雁はあはれにほと、ぎすは悲し。

と夏冬の鳥にあはれをかけたのは、支考の『百鳥譜』であり。

雁の聲は遠く聞えたるあはれなり、鴨は羽の霜うち拂ふらんと思ふにをかし。

と記してゐるのは、清少納言の『枕草子』である、かうして雁は、繪に詩に歌に文に、それからそれへと、藝術の境地を續けて見せてくれるのである。

### 四六 鴨 (かも)

雁と姉妹鳥 鴨は雁と同じ水禽で、鳥學上からは雁鴨科として一つに扱ふべきであるが、藝術の上から、或は趣味の上から多少その趣きが變つてゐるので、鴨は鴨として獨自の存在價值を有してゐるわけである。

たとへば、雁の方は、餘り人里に近かず、畫題に現はれた蘆雁にせよ、平沙落雁などにせよ、何處にか荒寥たる感じ、寂しい氣分を味はせるに對し、鴨の方は、人の庭園の池にも集まれば、都會の水邊を求めても群がつて来る。東京の人々は、あの半藏門から櫻田門へかけての美しい辨慶堀に、毎年時を違はず渡つて来て、悠々と濠の水に遊び、時とすると、芝生の床に假寢の夢を貪る平和な姿を見るであらう。

雁は寂しく鴨は和やか、かうして同じ水禽ながら、鴨の方は何處となく人に親しみをもつてゐる、雁の寂しい感じに比し、和やかな氣分に満ちてゐるので、繪畫に現はれたものを見ても、自然さうした感じが出てゐるものが多い、春ならば、猫柳のもとに群れてゐる鴨、秋ならば野茨など實となる頃、汀に泛ぶところを畫いたりしてゐる、まるで雁とは環境が違つて来る。



鴨の名畫 鴨を畫いた名作を擧げて興味がある、先づ極く古い處では埃及カイロ博物館にある、古代壁



畫の鴨が有名である、眞鴨や巴鴨に似たやうな鴨が、幾つも幾つも列をなして畫かれてゐる、そしてその翼や尾の描法が、原始的で極めて面白い、ナイル河の天賦の恩恵に浴してゐたエジプト人には、かうしたナイルの河に自生する植物とか、その流に遊ぶ水禽の如き、特に親しみを以て眺められたのであらう。

徳宗皇帝の作 東洋の繪畫では、先づ徳宗皇帝の『鴨』の作を挙げなければならぬ、これは東山御物の一つで、丈は一尺二寸四分、幅は八寸四分の小品に過ぎぬが、嘴の先で、背の羽毛を掻いてゐる唯一羽の鴨を描いて、躍動眞に迫るものがある、その脚のしつかりと大地を踏んでゐる姿、羽毛の筆の精彩、鴨の畫中最高級に置くべきものである。

光琳の『飛鴨圖』 日本の作家では、光琳の『飛鴨圖』を逸することが出来ない、大澤百花潭家の傳來で、小坂順造氏の舊藏品である、眞鴨二羽、一羽は右に一羽は左に向きをかへて飛翔してゐる處を描いたもので、和かみのある筆で些の滯滞なく自然に描けてゐるのであるが、よくその生態を活寫し、大自然を見る目の少しも忽かせにせぬ點を觀取しなければならぬ。

元信の作 元信には、鴨と鴛鴦とを横物に畫いた作がある、土坡の上に唯漫然と翼を休めてゐる處を描いただけであるが、何處となく畫面が大きく悠暢迫らざるものがある、流石は元信の作である。これは井上侯爵家の舊藏であつた。

松榮にも、柳の下に鴨を畫いた瀟灑な作がある、一見平凡な構圖であるが、仔細に見ると、鴨の形の上に

も相應に苦心が見える。

探幽の作で記憶に残つてゐるのでは、もと松方公爵家にあつた四季花幅四幅對の中の冬の部である、これは素晴らしい密畫で、これほどの細かい筆を使つたものは、探幽の作中でも澤山はあるまい、その冬は雪中の圖で、松の老樹を畫き、これが蔭に丹頂一羽居り、下には鴨や鴛鴦が遊び、上には壽帶鳥その他の小禽類が群れてゐる、一點一劃も苟もせぬ堂々本格的の花鳥畫である。

應舉の鴨 應舉も鴨をよく畫いた、純寫生派で、生態の研究は中々行届いてゐた、彼が如何に寫生に苦心したかは、帝室博物館藏する處の寫生圖巻を見ればわかるが、その扱ひ方は如何にも手慣れ切つてゐる、松本双軒庵の秘藏品であつた『雪中南天に鴨』の圖の如きは、蓋し好適例の一つであらう。

秋暉の作にもよく鴨を見る、『秋汀双鴨』といふやうな作は、その得意とする處で、圖を纏める手際も中々鮮かである、清暉にも柳に双鴨等の作があつた、秋暉の畑にまで相應深く突込んでゐる。

四條派では、吳春がよく鴨を見せ、景文あたりに來ると、全く四條派の鴨が壺にはまつてしまつてゐる。藤田ではあるが、一つの特徴を見せ、景文あたりに來ると、全く四條派の鴨が壺にはまつてしまつてゐる。藤田家の所藏品に『渡鴨』といふのを見たが、如何にも景文らしい筆の味であつた。

竹田の作 南畫では、竹田によく見る、松本双軒庵舊藏の『蘆花双鴨』の如きはその適例で、蘆花には翡翠をも一羽點出してゐる、賛に曰く



羨魚臨水亦徒爾、自有閉門結網人

と、如何にも竹田らしい、此の外、竹田には雪松に鴨を畫いた名作がある、川崎男爵家の舊藏であつた。

◇  
近代及現代作家の作 明治以降の人の作では、穂庵に『寒竹遊鴨』の達者な作を見たことがある、春草には、『月下飛鴨』の面白い作がある、新畫壇の先驅をつとめた抱負が見える、現代の人でも、花鳥畫を畫く人は、秋冬の題材として、喜んで鴨を畫く、全く一々枚舉に違のない程である。

先づ荒木十畝氏は昭和九年の尙美展に、寒汀と題し、枯れた野薔薇に鴨を配して瀟洒な作を見せ、中村岳陵氏も同年の六潮會に、『霜晨』と題して、刈田の上に飛ぶ鴨を描いた、田の畦には淡く霜を置いてゐる、かうした飛鴨を畫いたものでは小林古徑氏にもあり、川端龍子氏の『南飛』は一層規模を大きくしたもので、月下に群飛する鴨を畫き、その群青の魅力ある空の色がまだ印象に残つてゐる、森白甫氏が昭和十年の讀畫會に出品した『飛鴨圖』もよく畫けてゐたし、第十五回の帝展には、西澤笛畝氏が『群鴨』で評判を取り、上村松篁氏の『雪』も『群鴨』を面白く扱ひ、昭和十年の戊辰會には松本姿水氏が、冬暖と題して、日だまりに集る鴨を描き、二十一回院展には、前田青邨氏の『鷹狩』に、鷹に追はるゝ鴨の群れのさまざまの姿を右半双に畫いたのが、當時評判となり、感銘を深くせしめた。

◇

夥しい種類 鴨には種類が極めて多い、日本で見られるものだけでも三十種に上る、併しその中で、一般的に知られてゐるもの、若しくは、藝術に關係あるものとしては、あまり多くない、その中でも一番普通に知られてゐるのは眞鴨である。

眞鴨 眞鴨は鴨類の代表ともいふべきもので、青首とも稱せられてゐる、鴨類の中では形も大きく、色彩も美しい、雄は頭から頸にかけて金屬的光澤を帯びた暗綠色で、白い輪があり背は褐色に灰色を交へ、尾羽は十八枚乃至二十枚、嘴は黄綠色を呈してゐる、雌は褐色で色彩の美も遙かに雄に劣る。

小鴨 小鴨は鴨の中で、一番小さく、翼長僅か六寸内外である、特長は雄は眼から上頸に達する幅廣い紫綠色の帯があることで、その前後は褐色であり、眼の下、此の紫緑帯と褐色との間に細い白色帯がある、雌は背が褐色で嘴は淡黒色、脚は灰黒色を呈してゐる、樺太、北海道、本州の北部等でも繁殖し、冬になると南方へ渡つて来る、地方ではタカブと呼ぶ。

巴鴨 巴鴨は鴨の中で極めて美しい種類である、巴といふ名は顔が黒と黄と白と緑色が相交錯して巴形になつてゐるからで、よく繪にも畫かれてゐる、雌は小鴨の雌と同じやうな色彩であるが、大きさは小鴨よりはやゝ大きい。

葭鴨 葭鴨はまた特長のあるもので、雄は頭が栗色で、顔が緑色を呈し一寸白い帯があり、三列の風切羽が鎌のやうに曲り一種の飾り羽になつてゐる、雌は矢張り褐色で、黒色の細かい斑紋がある、支那では羅文



鳥と薬術

鴨と呼ぶ、その羽毛の色からの名であらう、本邦には多く見ることが出来る。

緋鳥鴨ひとりがもは、緋鴨、又は赤頭など、いひ、支那では丹毛鳧、赤頭鳧など、呼ぶ、大きは鴨の中では中位で、その名は顔が赤味を帯びてゐるからで、肩羽は灰色で黒の細かい斑點があり、一寸特長を有してゐる。

尾長鴨は顔は褐色、胸から腹へかけて白色翼は緑や白や黒や美しい色彩が交錯し、尾羽の中二枚が特に長く伸びてゐる、尾長鴨の名はこれから來てゐるので、支那では尖尾鴨とも呼ぶ、雌は褐色が大部分を占めてゐるが、腹は白い。

嘴廣鴨はその名の通り、嘴が廣く匙形をなし、雄は黒色、雌は褐色である、雄は頭及び上頸が紫綠色で、間肩部が暗褐色、胸は白く腹へ來て褐色を呈してゐる、此の鴨は泳ぎ方に特長があつて車狀に游泳する。

輕鴨 輕鴨は、眞鴨と略同じ位の大きさで、雌雄同色、色彩は頭が黒く眉から頬へかけて帯白色で、嘴の基部から眼へかけて黒い線があり、嘴は大體黒色であるが、先端の黄色を帯びてゐるのが特長である、支那では夏鳧と呼ぶやうに、夏も此の種類だけは見られる。

この外學ぐれば澤山あるが、藝術に關係を有するものは以上の種類位である、なほ鳧は眞鴨から出來た家禽である、これは後に記すこととし、鴛鴦も鴨の類であるが、これは項を別にして記すこととする。

鴨と文學 鴨の文學的方面を見やう、春去つて秋來るといふ渡りも、よろづ感傷的な我が上代の詩人の心

を動かしたことはないふまでもないが、その寂しい鳴く音は、更に一層の思ひを深からしめたものがある、『萬葉集』を繙いても、

吉野なる夏實なつみの河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かけにして 湯原玉

といひ、また、防人の歌に

葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば偲しのばむ 作者不詳

と歌ふ。

更に、鴨がその嘴を翼の間に挟んで眠る、所謂「鴨の浮寝」も、詩人の詩興を唆ること深かつたものと見え

輕の池の浦うら行きめぐる鴨すらに玉藻のうへに獨り宿やどなくに 紀 皇女

だの、また

吾妹子に戀ふれにかあらむ沖に住む鴨の浮宿の安けくもなし 作者未詳

など、詠じてゐる。

その雌雄の睦しさを詠み込んだ『古き挽歌』が、第十五卷に收められてゐる。曰く

夕されば、葦邊に騒ぎ、明け來れば、沖になつさふ、鴨すらも、妻と副たごひて、我が尾には、霜な降りそと、白妙の羽指し交へて、打ち拂ひ、さ宿やどとふものを、逝く水の還らぬ如く、吹く風の、見えぬが如く跡もなき、世の人にして、別れにし、妹が著せてし、褰衣ひたぎ、袖片敷きて、獨かも寝む。



丹比大夫

と情緒纏綿たるものがある。

俳句の方では、冬の季題になつてゐる、古來いろ／＼の方面から觀察され、吟詠に上つてゐる、有名な句を少し引いて見やう。

水底を見て来た顔の小鴨哉

丈 草

この句は實景であるが鳩にもかうした感じがある。

鴨鳴くや弓矢を捨て、十五年

去 來

鴨の句の中での一異彩である。

くる／＼と堀江に鴨の浮寝哉

支 考

繪にはよくこんな情景が描かれてゐる、また

明け方や城を取まく鴨の聲

許 六

これは東京でも半蔵門から櫻田門へかけての辨慶澤あたりで偲ぶことが出来る。其の他

湖を鴨で埋たる夜あけかな

士 朗

我門に来て瘦鴨と成にけり

一 茶

鈴鴨の虚空に消る日和哉

蒼 虬

など、とり／＼に面白い。



家鴨 鴨を記した序に、家鴨にも一言及んで置く必要がある、それは家鴨が相當に藝術と交渉があつて、繪畫に現はるゝことも多いからである、さて家鴨は、前にも一寸記した通り、眞鴨の變化したもので、我々の祖先が、野生の眞鴨を捕へ、これを飼慣らし、食用とする爲めに多肉な體質に變化せしめ、それが今日のやうになつたのである、何時頃から此のことが行はるゝやうになつたか、それは今から推定することも困難であるが、恐らく有史以前のことであらう、かうして人に飼はれるやうになつてからは、自から食物を求むる爲め活動する必要もない、卵は雞が孵化してくれるので、渡りをする面倒もなく、その爲めに翼を働かせる事もないので、翼などはだんだん退化して飛ぶことさへ出来ないやうになつてしまつた。將に生活環境から來る變化である。

その代りには、野生の鴨のやうに人を恐れて警戒するやうなことはなく、無遠慮に人に慣れてゐる、殊に支那人は家鴨を飼ふのに妙を得て、長江を下る筏船の上に、家鴨數百羽を飼つて悠々とあの大河を這つてゆく話など何となくのんびりしてゐる。

家鴨の畫 繪畫に現はれたものでは、第四回の淡交會に竹内栖鳳氏が出品した『秋興』が先づ目に浮かぶ、蓮池に家鴨が群れてゐる構圖で、よく纏まり、例の通り洗練し切つた筆である、西村五雲氏にも『漁村風景』



と題し、家鴨の群れを畫いた作があり、五島耕畝氏が昭和六年の帝展出品『汀に群る』も家鴨の群を畫いた平和な作であり、同年に榊原苔山氏の『午睡』も家鴨を畫いてゐる、但し、これは油桐の若葉の下に、家鴨の仔が睡つてゐる一層平和な環境を畫いたものである。

◇ 家鴨は、驚とも書く、その『あひる』呼ぶとは、足大きく水掻がよく發達してゐるので足廣、即ち『あひる』の轉化であるといふ。漢名では、家鴨、舒鳧、などとも書く、人が水に溺れて息絶えた時、此の腦血を絞つて灌げば忽ち復活するといふことが古書に見える、勿論あてにはならぬ話である。

#### 四七 鴛鴦 (をしどり)

鴛鴦は鴨の一種、鴛鴦はいふまでもなく鴨の一種である、普通なら鴨の項中に記すわけであるが、かうした學術上の分類を離れて鴛鴦を見る時は、その色彩から、形状から、果たまた此の鳥の有つ傳説や口碑、文學的方面まで、立派に獨立的價值を具へてゐる、そこで、特に鴛鴦の一項を設けたわけである。先づ繪畫の方から筆を進めて見る。

鴛鴦の思ひ羽 此の鳥が、古來もの繁く繪畫などに描かれる理由の一つは、將にその色彩と形状である鳥

の中には随分美しい色彩を有するものがあるが、水禽では先づ鴛鴦を第一とする、尤も美しいのは雄丈けでその色彩の如き、治く人に知られてゐるので、こゝに贅するまでもないが、その特長とするのは、後列風切羽の一枚が變化した、あの褐色の銀杏葉である、誰がつけたか、全く銀杏の葉によく似てゐる、その上を向つてゐる先が尖つてゐるので、劍羽ともいひ、思ひ羽とも呼ぶ、劍羽といふのは、漢の白靈が故事で、この羽で帝の首を斬つたので、かう呼ぶといふことが昔の俳書にあるが出所詳かでない。思ひ羽は誠にやさしい名である、その殿上人の眉のやうな冠羽も面白ければ、淡紅色の嘴も綺麗である、雌はこれに比較すると、色彩も單調で、全體が灰褐色で唯斑があつたり、腹が白かつたりする丈けである、併し雄も夏の換羽期になると、美しい羽毛も抜けてしまひ、雌と同じやうな色彩となつてしまふ、だから、此の鳥を眺めるには秋の末から春までがよい。

鴛鴦の番ひ 『鴛鴦の番ひ』といふて、夫妻愛を象徴した鳥といはれ、凡そ目出度い事の席にはよく此の鳥を描いた作が用ひられるが、畫題にも、二三ある。

畫題の鴛鴦 先づ『掖庭鴛鴦圖』で、これは楊貴妃と明王とが、興慶池で帳の中に晝寢をしてゐる、多くの官女が水殿の欄干により、柱に凭つて池の鴛鴦を眺めてゐる處を描いたもので、花鳥畫ではない、人物畫の範圍である。

『春塘並夢』は青柳の芽の綻びる水邊、鴛鴦が無心に遊いでゐる處、『牡丹鴛鴦』は、水禽中の花形と、百花



の玉とを對照せしめたもの、『浪暖桃香』は、柳と桃に春の陽長閑な水邊に、鴛鴦の遊いでゐる構圖である。

若冲の『雪中鴛鴦の圖』さて鴛鴦を畫いた名作を擧げると、先づ第一に帝室御物、伊藤若冲の『雪中鴛鴦圖』を擧げなければならぬ、水邊の垂柳は、長く枝を伸ばして、面白く畫面を構成し、これに鳩と鵝と鸚を配し、下の岩上には鴛鴦の牡が片脚をあげて何物かを凝視し、牝は水中に潜つて、半ば身を没してゐる、その岩石の蔭からは山茶花が美しい姿を見せて雪に蔽はれてゐる、此の作は寶曆九年己卯仲春、若冲の畫技最も圓熟した四十七歳の時のもので、若冲が大典禪師の爲め京の相國寺に寄進した三十幅中の一で、大典禪師はこの作を受けて大に喜び、直ちに『藤景和畫記』一篇を草して若冲に贈つたが、その文中、此の圖に就いて

其爲寒渚聚奇、湖上雪堆、垂柳連白以覆水、山茶載素而懸岸、溪鶉刷羽、立乎石之側々、其雌浮水而陷其首、柳上復有三禽彩毛鮮翅、以點綴皚々中云々

と、蓋し畫面の趣を寫し得て餘蘊なきに近い。

此の作に似た構圖のものに、早川千吉郎氏舊藏であつた『雪中游禽圖』がある、鴛鴦の位置や姿は、前者の通りであるが、垂柳に代ふるに梅を以てし、山茶花の下には水仙を配し、橋上には大瑠璃、目白、四十雀などが配されてゐる、前圖に比すると畫面や、複雑で、貴品に於て缺くる所もあるが、構圖は此の方も中々巧

みで、矢張り若冲の傑作たるを失はぬ。

立原杏所の名作 立原杏所にも鴛鴦の名作がある、原富太郎氏の秘藏する處、蘆荻の下には河蓬が咲いてそこに鴛鴦一番ひが配されてゐる、翠軒これに賛して曰く

荻蘆日暖水烟圍、願影夢樓倚石磯、何處多情玉人手、描來錦翅繡春衣。

と、此の作、畫品高雅に筆致謹嚴、珍らしい作である。

光琳の屏風 光琳には、二曲半双の水禽屏風がある、鴛鴦を中心として、數種の鴨類を集め描いたものであるが、その配置は光琳一流の技巧を以てしてゐるので、えもいはれぬ趣きがあり、普通なら纏め難い構圖をよく描き活かしてゐる、光琳の構成的手腕を見るべきであらう。

豪華を極めたものでは、山雪に『金地雪中老松鴛鴦屏風』がある、凡そ美しいもの、限りを集めて、此の一雙を成したかと思はるゝ位である。藤田香雪齋舊藏である、此の外

鴛 鴦

文 晁  
抱 一  
景 文  
應 舉  
嶽 山

梅花鴛鴦圖  
寒梅鴛鴦  
水中鴛鴦圖  
鴛鴦南天圖  
鴛鴦圖

大橋新太郎氏藏  
小坂順造氏舊藏  
淺見家舊藏  
川崎男爵家舊藏  
高橋是清氏舊藏



などを擧ぐべきであらう。

現代畫家の作 現代の人々の作にも鴛鴦は中々多い、その中で、構圖の最も面白いのは、川端龍子氏の、『愛染』である、銀地に一面散紅葉を浮べ鴛鴦一羽之を縫つて水は巴形に渦巻く處、銀と朱との圓舞曲を爲してゐる、誠に人目を眩するばかりの美しさである、氏にはなほ、花鳥十二月の一月に『晴雪』と題して、雪中にこれを畫いてゐる。

荒木十畝氏には、『秋江群禽』の大作がある、蘆邊に鴛鴦や小鴨など群れた圖で、極めて繊細な作、また、『山澗雪霽』がある、残雪なほ溪間を彩る處、梅花笑ひ、鴛鴦遊ぶ、長閑な境地である。

福田平八郎氏にも、『鴛鴦』の佳作がある、これは、一番ひの鴛鴦水中に游泳してゐる處を畫いたものであるが、鳥の美しい色彩と共に波の描寫に氏一流の工夫が見えて動いてゐる、非常に面白い作である。此の外十四回の帝展に太田秋民氏の『清流鴛鴦』があり、十五回の院展には岡田壺中氏の『水禽』、十八回には田中案山子氏の『四季草花圖』に之が配せられ、二十回には奥村玲瓏氏も美しい筆で之を畫いてゐる。

鴛鴦の問題作 鴛鴦を畫いて問題となつた作には、第九回の帝展に、上村松篁氏の『蓮池群鴦』がある、古書に従へば、鴛は牡であり鴦は雌であるといふ、然るに此の作は、蓮華の咲き競ふ池中に鴛鴦雌雄群れてゐるのであるから、群鴦といふのは當らぬし、殊に蓮の花咲く頃は鴛鴦は丁度換羽期であるから、このやうに

美しい姿をしてはゐない、全く季節違ひである、但し、王維の雪中芭蕉式に考へれば、別に不思議はないわけだが、これ程に深い意あつての作とは考へられない、不思議な作として、今に話題に残つてゐる。

萬葉集の鴛鴦 鴛鴦がこのやうに繪畫によく現はれるのは、形の優雅と、色彩の美しさによるのであるが文學の方面では、比翼連理の鳥として、その愛情の濃かな點に於て代表的となつてゐるからである、古く、『萬葉集』十一卷にも

妹に戀ひ宿ねぬ朝明に鴛鴦のここゆわたるは妹が使か

柿本人麿

があり、二十卷には、『式部大輔中臣清麿の宅にて宴せる歌』として、大原今城の

磯のうらに常喚び來棲む鴛鴦の惜しき我が身は君がまにまに

と、皆これ戀々の情を抒へたるもの、別に三卷には鴨足人の

人榜がず在らくも著し潜する鴛鴦と鵜と船の上に住む

といふ一首がある、これは高市皇子薨去在して、天の香具山には住むべなく、埴安の池の舟の上には鴛鴦と鵜とが寂しく棲んでゐるといふのである。鴛鴦の歌としては、變つたものである。たかべとは小鴨のこと。

『をし』の語源 その名の『をし』といふのは『愛し』で愛情の濃やかなるをいふのだとは、新井白石の東雅の記す處、『和漢三才圖會』にも



本綱、鴛鴦者鳧之類也、有湖溪棲于土穴中、大如小鴨、黄色有文彩紅頭翠鬣黑尾紅掌頭有白長毛、垂之至尾、交頸而臥、其交不再、其雌雄不相離、人獲其一則、一相思而死、故謂匹鳥。その雌雄相愛の傳説は、古來いろ／＼の方面に現はれてゐる。

群棲する鳥 その肉は甚だ美味で、よく賞翫されたものであるが、あの美しい鳥を獵鳥とするには忍びないとおつて、その捕獲は禁止されてゐる、その爲め、今日では都會地の水邊などにも、群飛するやうになつた、現に東京の和田藏門附近には毎年晩秋から早春にかけて、二番ひの鴛鴦が現はれるし、麴町紀尾井町の伏見宮邸の御池、關口の細川侯邸内の池などには、二三百羽の鴛鴦群を見ることが出来るし、地方にも鴛鴦ヶ淵とか、鴛鴦島といふやうな名のつけられてゐる名所も少くない、飼ひ鳥として人に愛せられてゐることは、今更いふまでもあるまい。

俳句の鴛鴦 俳句には「鴛鴦の沓」といふのがある、その形が沓に似てゐるからであらう。

鴛鴦のちぎりや沓のみぎ左 藪 太

など面白い。

鴛鴦の盃とちようすごほり 其 角

放れ鴛鴦一すねすねて眠りけり 一 茶

### 四尺 千 鳥 (ちどり)

千鳥と文學 千鳥は名から優しい、如何にも日本人の趣味にあひさうな鳥である、それ故、萬葉の昔から

淡海あふみの海夕浪千鳥ちどりが鳴けば心もしぬいにしへ思ほゆ 柿本人麿

の絶誦となり、また

ぬばたまの夜の深ふかけぬれば久木ひさぎ生ふる清き河原に千鳥ちどり數かず鳴く 山部赤人

の名歌となり、更に降つて鎌倉右大臣の

淡路島通ふちどりのしはくもはねかくまなく戀ひやわたらん

となり、また藤原定家卿の

はまちとりつまとふつきの影寒しあしのかれ葉の雪のうら風

となる、その寂しくも、ものおもはせる千鳥の聲は、或はつま戀ふ心の緒琴に觸れ或は假寢の枕をうるほすかくて、よろづ感傷的な詩人の吟詠に上ること、幾百千首なるを知らず、月に波に、雪の河原に、千鳥は冬の景物として逸すべからざるものとなつてゐる。





繪と千鳥 繪畫に於ても、月に千鳥、波に千鳥は、將に好個の畫題、和歌と相俟つて藝術上に大きな題材を提供してゐるのである。

山雲の『雪汀小禽屏風』 その千鳥を畫いた名作の中で、第一に推すべきは、京都の細辻伊兵衛氏が秘藏にかゝる狩野山雪筆、『雪汀水禽圖屏風』であらう、山雪は山樂の養子で、慶安四年六十三歳を以て歿した人、永徳、山樂の桃山藝術の豪華を繼いだ力作で、繊細流麗なる波の描線に、残月淡くかゝり、その波の上には、百五羽の千鳥が群れては舞ひ、舞ひては跳る千變萬化の姿態を描いて思はず恍惚たらしむるものがある。構圖の豪華、用筆の瑰麗、まことに桃山藝術末期の一光彩である。

應舉の『月に千鳥』 應舉にも、『月夜千鳥』の名作がある、紙本で上部に片われ月、下に二羽の千鳥を畫いた、其の筆の輕妙圓熟、構圖の餘韻嫻々たる、ともすれば、寫生に捉はれて生硬になり勝な應舉の作風を離れて、誠に洒脱を極めてゐる。これは説田鶴翁秘藏品の一つであつた。

光琳の『千鳥の型』 光琳も波に千鳥を畫いた、然も光琳は、千鳥を畫くに、寫生から離れて、極めて簡素な形を案出し、それがピタリとはまつてゐる、そして此の千鳥の形は、他の工藝美術にまで少からぬ影響を與へた。彼の偉大さを物語る有力なものである。

抱一の作 抱一にも『月波千鳥』の傑作がある、著者の見たのは、越後石田家の舊藏で、これはもと琳派の蒐集家を以て聞えた、埼玉の大澤家傳來の品で、月下に七羽の千鳥が翔り、下に雄渾な筆で波を畫いてゐる、

この千鳥の形にも抱一獨特の工夫が見えてゐた。

狩野家では常信によい作がある、藤田雪齋舊藏の一で、中は張果老、左は鳩に燕、右が此の波に千鳥で矢張七羽の千鳥を畫いてゐるが、此の千鳥には少からず寫實が加はつてゐる。

是眞もよく波に千鳥を畫いた、その得意とした漆器などには、好んでこれを畫いたもので、如何にも達者であつた、野口幽谷、今尾景年、西郷孤月等の作にも面白いのがあり、橋本雅邦にも名作が遺つてゐる。

百種の『荒磯』 近年のものでは、平福百穂の『荒磯』が有名である、あの豪宕なる岩、波の聲咽ぶが如き處千鳥がその上に群れてゐる、總體の感じが中々面白い作、荒木十畝氏もよくこれを描く、殊に先年個人展覽會を開いた折の瀟に千鳥は、寧ろ山水畫に屬するものであつたが面白く、『瀟聲』と題した大作もあり、これには岩上に千鳥が群れてゐる。

川端龍子氏の作では、先年個人展覽會に、『銀瀟』と題して波に千鳥二羽も配したものがあつたが、更に昭和十年春の青龍展に、『浪戲』と題した二曲半双が面白かつた、これは濱邊に浪の引いたあと形さまざまに残る波あとに一羽の千鳥を配したもので、着想が如何にも清新である、勝田蕉琴氏は、久邇宮邸御襖繪に『波濤群鶴圖』の大作を畫いてゐるが、第十回の帝展にも『海濤圖』と題して、岩に碎くる瀟の豪壯なさまを畫き千鳥を配してゐる、この外、第一回の青龍展の丸丹心氏の『浦浪』や、九回帝展の高木保之助氏の『濱なす



の濱』にもこれが描かれ、石川寒巖氏の『凜雪』と題した作にも、千鳥の一種の『めだいちどり』が畫かれてゐた。此の外枚舉に違もない。工藝品では博物館と青山子爵家舊藏に有名な蒔繪の筥がある。

千鳥の種類 千鳥は千鳥科といふ一科を爲してゐるが、この中には、鳴といふ名をつけられてゐるものもありし、『けり』も含まれてゐる、そして一般に千鳥と呼ばれてゐるものばかりでも五十餘種に上る、然し、繪に畫かれてゐるものはその中の極く僅かで、『いかるちどり』『こちどり』『めだいちどり』、稀に『むなぐろちどり』などが出て来る、中でも最も多いのは『いかるちどり』で、十畝氏の作も、百穂氏の作も、龍子氏の作も大抵此の『いかるちどり』である。それは、『いかるちどり』や『こちどり』が最も人の目にふれ易い處に多いからで、河原など好んで翔つてゐるのも此等の種類である。その音が優しいので、文學的興味を唆り、いろ／＼これに絡はる物語や傳説などもある、千鳥の香爐、太田道灌の逸事など有名である、これは拙著『鳥』に記したからこゝには省く。

千鳥の形態 その形態は恰く知られてゐるので、今更贅説する要もないが、『いかるちどり』等には、額に黒色部があつて著しく、首の周圍にも黒い輪をめぐらしてゐる、此の輪、『こちどり』の方がやゝ太い、『めだいちどり』は目の上から胸へかけて褐色の部分のあることが、他の二種と違ふ處、脚の指は何れも三本で、後趾がない、これが鳴と違ふ特長である。

荒磯やはしり馴れたる百千鳥  
村千鳥その夜は寒し虎が許  
有明となりて一群千鳥かな  
打よする波や千鳥の横歩き  
浦千鳥だまつて卵取られけり

去 來 共 角 桃 隣 燕 村 一 茶

四九 都 鳥 (みやこどり)

『伊勢物語』の都鳥 都鳥といへば、直ぐに隅田川を想ひ、隅田川といへば都鳥の姿が偲ばれる、それはいふまでもなく、『伊勢物語』の一節が、極めて印象が深いからである。

なほゆきゆきて、武藏の國と下總との中に、いと大なる川あり、それを隅田川といふ、その川のほとりに群れ居て思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや船に乗れ、日もくれなんといふに、乗りてわたらんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さるをりしも、白き鳥の喙と足と赤き鳴の大きな、水の上に遊びつゝ、魚を食ふ、京には見えぬ鳥なれば、皆人見しらず、渡守に問ひければこれなん都鳥といふと聞きて



名にしおはゞいざこととはんみやこ鳥我がおもふ人ありやなしやと  
と、よめりければ、船ごぞりてなきにけり。

謡曲『隅田川』これが謡曲の『隅田川』になると

名にしおはゞいざ事とはん都鳥、我思ふ人は有りやなしやと、のう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、  
都にては見馴ぬ鳥なり、あれをば何と申し候ふぞ、  
「あれこそ沖の鷗候ふよ、  
「うたてやな浦にては千鳥とも云へ、  
「鷗とも云へ、  
など此隅田川にて白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ、  
「實に實に誤り申したり、  
名所には住めど心なくて、都鳥とは答へ申さで、  
「沖の鷗と夕波の<sup>メ</sup>昔にかへる業平も、  
「有りやなしやと事問ひしも、  
「都の人を思ひ妻<sup>メ</sup>妾も東に思ひ子の、  
ゆくへを問ふは同じ心の<sup>メ</sup>妻を忍び、  
「子を尋ぬるも、  
「思ひは同じ<sup>メ</sup>戀路なれば、  
我も又、いざ事とはん都鳥、  
我思ひ子は東路に、  
有りやなしやと、問へどもく答へぬは、  
うたて都鳥、  
鄙の鳥とやいひてまし。

となつてゐる。

此の謡曲の中の『浦にては千鳥とも云へ、鷗とも云へ、など此の隅田川にて、白き鳥をば都鳥と答へ給はぬ』といふ一節に興味がある、即ち、關東邊で俗に都鳥と呼んでゐるのは、『ゆりかもめ』のことで、別に千鳥の類に『みやこどり』と呼ぶのがあつて、學名で、『みやこどり』といへば、此の千鳥科の方をさして呼んでゐるのである。



季節の違ひ 處で面白いのは、業平が東下りをして、隅田川で都鳥を見た時季である、鳥學者の川口孫治郎氏は、『博物館研究』七の十一で、これに關する疑義を述べ、業平が東下りして隅田川に着いたのは、その前節、『宇都の山』の條から推して、陰曆六月頃になる、  
「今でいへば、陽曆七月になつてゐるから、如何にその年が不順で寒かつたにしても、ゆりかもめは皆蕃殖に行つてしまつて、隅田川附近には一羽も居ない筈である、加之、その頃になると、ゆりかもめの頭のみは、クッキリ焦茶色になつてゐる筈、  
嘴と足の赤いのが、目につくほどに近寄つてゐるなら、頭の顯著な焦茶色が目につくべき筈なのに、それが文句に現はれてゐない』のはどうも變である、併し『唯……白き鳥で、嘴と脚との赤い、中鳥で水上に遊びつゝ、魚を食ふ點では、ゆりかもめ、即ち、關東邊でいふ都鳥に相違ない。そこで問題は、どうしても『陰曆六月』になるのであるが、『伊勢物語』の此の項には明白に季節は記して居ないし、たとへ、宇都の山越をしたのが『五月のごもり』頃にせよ、その一ヶ月後に必らずしも隅田川に着いてゐるとのみ判ぜられない、途中でいろ／＼と路草を食ひ、隅田川に着いた頃は、初霜を見るころであつたかも知れない、さう解釋すれば、『陰曆六月』を強調する必要もない、況んや、本文の中に書いてゐる形態が立派に今の都鳥であるに於てをやである。



北齋の『隅田川』かうして推してゆくと、更に不思議なものがある、それは葛飾北齋の筆になつた『西瓜



と都鳥』の作である、これは北齋八十八歳の時の筆、記號の落款があり、絹本で、水の流れに、皮のみ残された西瓜の食べ殻が浮び、その傍に都鳥が遊いでゐる、構圖が第一に面白いし、色調の配合に、いふべからざる妙味がある、外狩素心庵氏は、此の作に就き

四國の阿波で森といふ藍の大間屋さんが長らく秘藏してゐたものだつた、六七年前に東京へ出て、本山豊實氏が非常な高金を拂つて手に入れた、一昨年(昭和五年)の末頃から殆んど無理矢理の熱望で現所蔵者なる大阪の坂田作次郎氏に移されたものと記憶してゐる。

と『浮世繪藝術』の誌上にこれを紹介してゐるほどの面白い作である。

その都鳥の姿は、實に立派な寫生で、一點非を打つべき所がない、併しその傍に西瓜の食べ残りが浮いてゐるので、此の羽色と合はぬことになる、即ち西瓜のある頃は、頭が焦茶色に變つてゐるばかりでなく、遠くシベリヤの奥に去つてゐるので、日本では見られぬからである、北齋の眼には、冬、隅田川邊へ來たのを見てこれを寫生し、夏と冬と、羽色が變ることなどは知らず、唯形と色彩との面白味から、食べ残された西瓜の皮に、冬見る色の都鳥を配したけである、無理もない事ながら、妙なことになるものと思ふ。

◇  
都鳥即ち『ゆりかもめ』こゝで都鳥と呼ぶ『ゆりかもめ』の形態を記して置く必要がある、黒田長禮博士の『鳥類原色大圖説』に従ふと

夏羽は頭珈琲褐色、圍眼部に白輪あり、前方中斷す、冬羽は頭白く、耳羽に暗色斑あり、頸體下面及び尾白色、下面に薔薇色を帯ぶことあり、禽及び脚は深赤色(夏は暗赤色)幼鳥は後頭主として灰褐色、禽褐色、雨覆の或羽灰色、外側初列風切黒く、白色中央帯あり、尾の亞帶黒褐色、嘴帶黄色先端帶黑色、脚暗赤黄色なり、成幼中間の羽あり、翼二八三(雌)―三二五(雄)尾一一二―一二九(雌)、跗蹠四一―五〇・五(雌)、嘴峰三三・五―四一・五(日本の例による)

千鳥科のみやこどり とあり、一方千鳥科の『みやこどり』に就いては、次のやうに記して居る。

成鳥は頭、頸及び背面黑色、眼下の小點腰、尾基部、下喉以下の下面及び翼裏面白色、初列風切黑色にて、羽軸の先端近くは白色、第六羽以下の羽軸及び其外瓣白し、上尾筒白色にて先端黑色、大雨覆及び次列風切中部白色、小翼及び中雨覆先端白し、尾白色先き三分一黑色、嘴鮮橙黄赤色、先端黄色脚紅色趾爪淡褐色虹彩深紅色、眼臉鮮橙赤色なり、幼鳥は體の黑色部の羽縁白く喉を横切る白帯あり、嘴橙黄赤色先端暗色、脚淡蒼肉色、虹彩濃茶色、眼臉橙黄色なり、翼二五四―二七六(雌)、尾一〇六―一一四(雌)跗蹠四八―五五・五(雌)、嘴峰八八・五―九六(雌)、大形肥大の鳥類にて學術上の『みやこどり』なり。

とある。即ち大きさも色彩も變つてゐる、そして、藝術上に現はれたる『みやこどり』は、『ゆりかもめ』の都鳥で、千鳥科の『みやこどり』ではないこと、これに依つても明かである。

ゆりかもめは、冬はかく東京附近に現はれるが、夏はカムチャツカ方面で繁殖し、樺太から北海道、千鳥



から本州へ渡るし、千鳥科の都鳥は、東部シベリヤから、カムチャツカ方面で繁殖する。

『萬葉集』の歌 文學の方面では、『伊勢物語』が有名であること今更いふまでもない、然しそれより古く、『萬葉集』に唯一首都鳥の歌がある。

ふなきほふ堀江の川のみなきはにきみつなくはみやこ鳥かも  
堀江の川といふからには、難波にも都鳥は姿を見せてゐたのである。

讀人しらず

『夫木集』の都鳥 『夫木集』は此の一首の外、各集から九首を抜いてゐる、曰く

いささらはむかしをとはんみやことりなには堀江にいまも鳴くなり

中務卿のみこ

ふねとむる難波堀江にきあるなりこれはたかつのみやこ鳥かも

權僧正公朝

こしのうみにむれてゐるともみやこ鳥都の人そこひしかるべき

順 忠

やそ島の都とりをそ秋ののにはなみてかへるたよりにはみる

好 忠

わひ人のすみくるやとのみやこ鳥ことつてたえて年をへぬらむ

讀人しらず

ふるさとをこふるねさめのうら風に聲なつかしきみやこ鳥かな

相 模

名にしおはゞしらしなわたの都とり心つくしのかたはとふとも

俊頼朝臣

思ふ人あるにつけてもみやこ鳥あはれいまはとのりのかはおさ

寂蓮法師

こと間はんはしとあしとはあかさりし我こし方のみやこ鳥かも

安嘉門院四條

で、安嘉門院四條の歌は、『路次日記』の中にあるので、歌のまへに、なるみのかたを過ぐるにしほひのほどなれば、さはりなくひがたをすぎてゆく、すみだ川のわたりにこそありとききしかど、みやこ鳥といふのはしとあしと、あかきは此のうらにもありけり」と記してゐる。

この外、『十六夜日記』や、『古今著聞集』にも都鳥のことを載せ、隨筆には、松浦靜山公の『甲子夜話』や、『武者物語』の中にも出て来るが、これは著者の前著、『鳥』の中に引いてゐるから、こゝには略く。

山雪の傑作『波水禽屏風』 繪畫に現はれたものゝなかでは、先づ有名な狩野山雪の『波水禽圖屏風』を挙げなければならぬ、細辻伊兵衛氏の藏で、京都博物館にも陳列され、東京では昭和十年四月の名作屏風展に初めて出陳された、右半双が都鳥左半双が千鳥で、巧妙を極めた波に、形面白く岩を配し、これに老松一群枝を伸ばし、十數羽の都鳥が、或は翔り、或は泳ぎ、或は岩に翼を休めてゐるなど面白く、松や岩に降り積つた雪の色も美しい、千鳥の外には、翡翠と、鶺鴒が各一羽づゝ配せられてゐるが、これもよい調和で、此の右半双は、蓋し都鳥を畫いたものゝ中で随一のものではあらう。

この外の作では、前の北齋の名作の外に、抱一には『月下都鳥』の作があるし、廣重が、版畫の中には、蘆の間に都鳥を配したものがよくある、山水畫に、隅田川を畫いたものは大抵都鳥を畫き、然も季節に無頓着



なにも相當にある、故人では、なほ、渡邊省亭によくこれを畫いたものがあり、手近い處では、東京の歌舞伎座に、京都の小川翠村氏が此の鳥を畫いた作を額にして掲げてゐる。

五〇 鸚 哥 (インゴ)

羽毛の色彩美 鸚哥は形も面白く、色彩も美しく、その上物真似が巧みなので、飼鳥家の愛嬌ものになつてゐる、従つて人にも馴れ易く、よく藝を教へこんだ鸚哥となると、その値も非常に高いものである、繪に畫いても面白く、興味の深い鳥である。

鸚鵡の渡來 鸚鵡類はいふまでもなく日本の鳥ではない、漢洲邊を原産地とするものもあれば、南米あたりを故郷とするものもある。日本に渡來したのは随分古くからで、史を繰つて見ると、大化の三年に、新羅から孔雀と鸚鵡各一隻を獻じたことが見えるし、承和十四年には、入唐僧慧雲が孔雀と鸚鵡を齎らし歸り、これを朝廷に獻じたことが記され、グツと新しくなつて慶長十五年には安南から鸚鵡一羽孔雀一羽が輸入されたことが見える。

夫木集の歌 だから、和歌などにも、極めて少いが詠せられた例はある、『夫木集』に  
哀れともいは、やいはんことのはをかくすあうむのおなし心に 寂蓮法師

の一首があるし、『枕草紙』にも

ことところのものなれど、あうむ、いとあはれなり、ひとのいふらんことをまねふらんよ、  
など、いふてゐるし、『空穂物語』にも「孔雀あうむの鳥あそばぬばかりなり」など、ある。

詩文に現はれた鸚鵡 支那には、殊に古く傳へられてゐたらしく詩文には少からず散見する、白樂天は

耳聽心慧舌端巧、鳥語人言無不通

といひ、殷大珪は

才子愛奇吟不足、美人憐爾語初成

といふ、更に何孟春は

去陳誇俗費精神、識字應無快活人、飛鳥何須巧言語、金籠不得自由身。

と同情してゐる。

雪衣娘 更に鸚鵡に對しては、『雪衣娘』の畫題ともなつてゐる、これは唐の玄宗皇帝の開元年中、嶺南から白鸚鵡を獻じたものがある、これを宮中に養ふてゐたが、此の鸚鵡極めて聰慧でよく人の言葉を聞分けたので、帝も楊貴妃も非常にこれを愛して、『雪衣娘』と呼んだといふのである、帝と妃が籠の鸚鵡を眺めてゐる處を畫いたのが、此の題である。

綠衣使者 また「綠衣使者」といふ異名もある、これは長安の人、楊崇義の妻が密夫をこしらへ、私かに相



會つてみたのを、鸚鵡が何時か二人の私話を聞き覚えこれを真似し出したので二人の不義が露はれてしまつた、开で時の帝此の鸚鵡に『綠衣使者』の名を賜つたといふことから來てゐる。

◇ 夥しい種類 普通にいま鸚鵡と呼ばれてゐるのは、鸚鵡科の中の『きばたん』のことで、これはもと濠洲産であり、全身白色、鮮紅色の冠羽を頂き矢が薙刀やうに曲つてゐる、古史實などに現はれてゐるのは此の種類をやうである。

此の種より小形のものに、『こばたん』がある、矢張白色で冠羽は黄色、物真似が殊に巧みなので人に愛せられる、冠羽は幾筋にも分れて三角形をなし、形の上にも面白味を添へてゐる、南洋セレベス、マラツカ地方の原産である、『すほばたん』もよく行はれてゐるもの、形大きく物真似が巧みで、全身白色、冠羽は淡紅色である。

鸚鵡と呼ばれてゐるものは以上が主なもので、色彩もあまり複雑ではないが、これが鸚哥カウとなると、色彩もいろ／＼あつて、應接に違がない。

先づ頬に紅く丸い斑點があつて愛嬌のある『おかめいんこ』、これは飼鳥として極めてよく行渡つてゐる、その原産地は濠洲である、全身濃淡の綠色で、顔から頭へかけて眞黒な『黒髪いんこ』、これは南米パラグアイの原産、頬は朱鷺色、尾羽三枚と翼羽の末端を除く外、全部目覺めるやうに美しい緋色の『金剛いんこ』、

同じ形で反對に全身鸚色の『鸚金剛いんこ』何れも中米から南米へかけての所々に産するもの、まだ此の一種に背が瑠璃色、腹が黄色で、顔がほの紅い『瑠璃金剛いんこ』一時非常な流行を極めて飼鳥界を風靡しまた下火になつた『背黄青いんこ』これは濠洲産、全身綠色で、頭部が黄色、雨覆が黄色で翼の末端に一寸紅のある『黄帽子いんこ』これは南米ゼネーラ産、首から胸にかけて深紅色でその他は紫色の『火花いんこ』の雌、但し雄は綠色、これは南洋ニューギニアの産、鸚鵡によく似て淡紫色の羽毛を有し、尾羽の紅い『洋鸚』は阿弗利加の産であるが、物真似では鸚鵡目中第一といはれてゐる。かうして擧げて來ると枚擧に違もない位である。

◇ 柳里恭の鳥類譜 繪畫に現はれた鸚鵡いんこ類では、古く柳里恭の『鳥類譜』の中に、鸚鵡やいんこ數種の寫生があるが、色彩もよく實地を寫生し中々面白く畫けてゐた、それから若冲にも、架木にとまつた鸚鵡を謹嚴な筆で畫いたものがある、石川確治氏の藏する處、これは支那古畫の模しであらう、なほ芦雪には木蓮に鸚哥を畫いた作があり、秋暉には『花籃小禽圖』と題して絢爛な筆で寫した作もある、橋本辰二郎氏が藏してゐる、まだ此の外いくらかもある。

現代の諸作 現代では橋本關雪氏好んでこれを描く、『桃紅雪衣』『石榴雪衣』の如き、此の得意の壇場堅山南風氏も曾て、葡萄の絡まる石榴に一羽の鸚哥を配した作があつた、第九回の院展出品である、川端龍子氏には『馴語』と題し、青草の中に鸚哥の籠を置いた作があり、山村耕花氏は個展に『背黄青いんこ』を描き、



柳原紫峰氏も、克明な筆を以て活けるが如くこれを圖したものが畫集の中に收められてゐる。

五一 鴛 鳥 (がてう)

華山の『秋奔鴛鳥圖』 華山の傑作に、有名な『秋奔鴛鳥圖』がある、これは『溪澗野雉圖』と共に、華山の花鳥畫に於ける代表的外品と稱せられてゐるもので、此の作は、華山が藩主三宅侯の命に依つて、田安一橋家の爲めに畫いたものといふ、二説あり、一は三宅侯の姫が輿入の祝ひ品であり、圖中の白鴛は、婚儀の白衣になぞらへたものといひ、一は田安一橋家から、奥州二本松の城主丹羽侯の新築祝に贈られたもので、一橋家から三宅侯に華山の揮毫を依頼したのであるといふ、後の説の方が眞に近いらしい『依君命爲田安侯畫之』とあるのを見てもわかる、それだけに非常に謹んだもので、落款も特に『臣渡邊登謹寫』と書いてゐる。

此の作、幅一尺八寸七分、堅四尺一寸四分の双幅で、爾來永く二本松城内の襖繪となつてゐたが、戊辰の役兵燹に遭ひ、危く灰燼に歸せんとした際、心ある藩士によつて、襖から切抜き運び去つたので、その難を免れたものといふ。その後、荒井泰治氏の有に歸した處、その賣立に双幅は別れ別れとなり、一は橋本辰二郎氏の手に入り、一は小坂順造氏の有に歸した、所が昭和九年六月、小坂氏の賣立で橋本氏に落札し、こゝに久し振りに双幅が揃つたわけである。

構圖は右に黒白の双鴛を描き、岩石を配しその岩の蔭からは、黃蜀葵と雁來紅と、稻穂を見せ、下草に野菊をあしらつてゐる、左は岩石の下が流れとなつて、白鴛が泳いでゐて藻の中に潜まうとする鮒を覗つてゐる、岩の彼方には芙蓉が花を開き、野菊の間には、紅葉した野薔が交り咲いてゐる。

應舉の『王右軍歎池鴛』 鴛鳥を畫いた名作としては、應舉に『王右軍觀池鴛』の圖がある、『陶靖節放白鷺』と双幅で、もと江州淺見家の所藏であつた、『天明壬寅仲秋寫』とある、水亭に臨み、案に倚つて想を練つてゐる王右軍が、不圖池中に白鴛一雙あつて喜遊するを眺めてゐる處、構圖整然として、よく此の好畫題を寫し得てゐる。

王右軍は、古來書道の聖と稱せらるゝ人、諱は羲之、字は逸少、東晉の生れで、右軍將軍會稽内史となつたので、王右軍又は王會稽と稱した、七歳にして既に書をよくし、十二歳の時、其父の所藏する『前代筆說』を竊み讀み悟る處少からず、二十三歳にして越州内史となり、永和九年三月子弟と共に山陰の蘭亭に遊び、曲水流觴の遊を試み、蘭亭序を書いた、三十七歳の時、黃庭經を書いたが、共に斯道の精髓と稱せらるゝ、そして書體何れにも通じ一家の法を成して、つひに書道の聖と稱せらるゝに至つたのである。

愛鷺の故事 『王右軍愛鷺』は、好畫題としてよく畫かるゝ處、その故事は次の逸事から來てゐる。

山陰に道士があつて、鷺を飼つて居た、王右軍がそれを見てゐると、道士の曰く、希くは道德經を寫し



て給はれ、我れこの鸞を與へやうと、王右軍は欣で道士の爲めに道徳經を書いた、寫し終り、道士の家から鸞を受け取るや否や、籠を開いて放してやつた。  
この物語、非常に畫趣豊かなので、應舉の上記の作をはじめ、いろ／＼の人に依つて畫かれてゐる、華山にもその作あり、司馬江漢にもあり、雅邦翁もこれを畫いてゐる。

◇  
錢舜舉『白鸞圖』 鸞鳥を主として畫いたもの、また古來少くない、傑れたものとしては錢舜舉に『白鸞圖』がある、唯二羽の白鸞を畫いただけであるが謹嚴なる筆、よくその眞を捉へて居る、これは、もと松浦伯爵家の襲藏する處であつた、同家にまた、王若水の『蓮花双鸞』の圖があり、努力したものであるが、品位に於て前者に一步を輸つてゐる。

この外、琴川錢恩にも、『柳蓮白鸞圖』があり、花鳥三幅對の一つで、矢張白鸞を扱つてゐる、日本の作家では、華山の外に椿山がよくこれを畫いた、殊に變つてゐるものに『雛鸞圖』がある、略筆ではあるが、よく生動し面白い構圖を見せてゐる、椿山これに題して曰く。

宣和畫院、好作雛鸞圖、極工緻、余仿其意而以致筆爲之、時嘉永元一年暮春。  
と、その變化のある姿態を描いてゐるのが興を惹く。

近頃の作では、第七回の帝展に、木島櫻谷氏が『遅日』と題して、支那の風俗を畫いた中に鸞鳥を畫いてゐ

るし、同時に梅崎朱雀氏にも『双鸞』の作がある、翌年、第八回展覽會には故廣瀨東畝氏の『池畔』があつた、額の花や萩の繁る水邊に、三羽の鸞が配されてゐる、五月雨頃の氣分がよく出てゐた、最近では、第十九回の日本美術院展覽會に、田中案山子氏の『水邊』がある、合歡の木の下に鸞鳥を描いたもので、筆致が清新で感じのよい作であつた。

◇  
鸞鳥の先祖は雁 鸞鳥はもと野生の雁を飼ひ馴らしたものである、それは丁度鴨を馴らして家鴨といふ新しい種類が出来たやうなものである、鸞鳥といふものが何時頃現はれたか詳かでないが支那の上古であつたことは疑ひなく、唐雁といふ文字が、その儘存してゐるのでもわかる、別に、舒雁とも呼び、『かりがね』を鸞に充てゝゐる人もある、『禪話爾雅』に曰く

鸞鸞は野鸞なり、これを古來より『かりがね』と讀むなり

と、更に、鸞が雁の馴らされたもの、記録としては、『爾雅釋鳥篇』に

舒雁、鸞、李巡曰、野曰雁、家曰鸞

とあるし、『倭名抄』には、

鸞、音義、形狀如雁、人家所畜也、一名唐雁、古名オホカリ

とある。

——梅村載筆——



日本に渡來の始 その日本にこの鳥が傳へられたことに就いては、『日本後紀』二八に弘仁天皇十一年五月、新羅人李長行等進<sub>二</sub>鶯<sub>一</sub>とあるのが、最も古い記録であらう。

◇

文學方面の鶯 文學の方面にも、流石に書聖王羲之に愛された鳥だけに、よく現はれて來る、その中で最も印象に残るのは、天田愚庵の『鶯の歌』である、曰く

諸越の文字かく聖古いにしへに愛でけむ鳥そはしきこの鳥

百千この文字にも代へて此の鳥を君子飼よきひとへりうつくしの鳥

此の鳥は何といふ鳥とよる人の影さす見れば鶯とぞ答ふる

人皆は正なこととして隠るゝをあからさまにも名なのる鶯の鳥

うらくと照れる春日を鶯の鳥の玉水かづき遊ぶよろしも

鶯の鳥と我がうつくしみ今日もか池べにさらず見つゝ暮らしつゝ

と、此の鳥に對する愛着の深さがよく現はれてゐる。

現代の人の作では、吉植庄亮氏の集の中に左の二首を見出した。

しきりにも鶯鳥の立つる水明り蓮の花はすでに暮れたり

湯に居れば鶯鳥鳴きつれて來りけりいまだ光らぬ空の月かけ

と、共に繪のやうである。

俳句には季節に加はつてゐないので、従つて、これを吟じたものもあまりない。

腰元を追ふ鶯鳥あり赤椿

などは珍しい。

鶯鳥と詩文 支那の詩文には、王羲之の愛鳥であつただけ、いろ／＼に現はれてゐる。

駕鶯引頸回、似我胸中字、右軍數能來、不爲口腹事、

の如き矢張王右軍が出て來る。又、白樂天は

雪頸霜毛紅網掌、請看何處不レ如レ君

といひ、李商隱は

眠レ沙臥水自成群、曲岸殘陽極二浦雲一

といふ、宛らの繪である。その他

偶尋騎鶴侶、來レ此看鶯群。

鶯鶯曲頂、向天歌白毛。

などの句がある。

東洋城

失名

揭 賓 王  
賁 賓 王



鷺鳥の習性 鷺鳥はかうして、いろくど藝術の方面に現はれて来るが、その扱はれてゐる種類は、鳥學上では支那鷺鳥と稱するもので、もと『さかつらがん』から生ぜしめたもの、飛行力なく、色彩は殆んど同じやうであるが、白鷺と稱して純白なるものもある。その特長としては、嘴短かくその上部に圓い瘤のあることとで、雌雄その色を異にしてゐる、春秋二季に二十個乃至三十個、十個乃至十二個の卵を生み、卵は三十日間で孵化するのを常とする。

その群をなして水邊に鳴き立つる聲は、かなり喧しいものであるが、若し聞き慣れぬ足音のする時は、忽ち鳴くのを歇めたり、或は反對に、靜かであつたのが、突然の侵入者に驚いて騒しく鳴き出すこともある、そこで此の鳥を飼ひ盜賊の用心にする家もある。

『和漢三才圖會』には、『本草綱目』を引いて

鷺人家畜之、狀似雁而舒緩也、有蒼白二色及大而垂胡者、並綠眼黃喙紅掌、善聞其夜鳴應更、性能啖蛇及蝮制射工、故養之、能避蟲虺。

禽經云、脚近蹠者能步、鷺鷥是也。

按似雁而大、故俗曰唐雁、人家畜之、多白鷺也。

と、『夜鳴いて更に應ず』といふところを見れば、昔から此の鳥の鳴くことに注意を拂つてゐたことが知られる。

これを繪畫に表現する場合、多くは夏か秋の季節を寫してゐる、池畔とか、沼澤など、を背景として描かれることが多いので、配される植物の如きも自然に局限されてゐるわけである。

## 五二 雞 (にばとり)

最も古い家禽 雞は鳥類の中で、最も人の生活に深い交渉をもつてゐる、家禽として、恐らく雞位古く飼養されてゐるものはあるまい、支那では既に三千年前にこれが飼養せられたといひ、日本でも神代の昔から既にこれが飼はれてゐたことは、天照大神が、天の岩戸にかくれさせ給うた物語に現はれて來るのでも知られやう、歐洲にも随分古から傳へられ、西班牙邊から、漸く中央に、そして露西亞の如き最も養雞の盛だつた國といはれてゐる。

雞の原種 一體、雞の原種といふのは何か、何處の原産かという、鳥學上では野雞と呼ばれ、印度の北東部から中央部、スマトラ、フィリッピン、セレベス地方に分布し、叢や林の中に棲息し、植物質や穀類、昆蟲類を食とする、雄は頭部から頸部の羽が黄金褐色で紅を帯び背は紫褐色、腹は緑を帯びた黒色で光澤があり、尾も黒く金屬性の光彩がある、極めて複雑した色彩を呈してゐるが、雌は褐色を基調とした不鮮明な



色彩で雄のやうに美しくない。これが、今日のやうに全世界に家禽として分布され、更に幾百千種の種類を生んだのである。

◇ 『本草綱目』の説 かうして古くから人に飼育せられたものだけに、此の鳥に關しては、いろいろと研究されてゐる、『本草綱目』に依ると、その雞の音「ケイ」と呼ぶのは「稽」で、時を稽かたがへるからだといひ、大なるものを獨といひ、大なるものを荆、その雞を鷓と呼び、其類甚だ多く、形も大小あつて、その鳴くや、よく時刻を知りその棲むや陰晴を知るといひ、更に面白いのは、外腎を缺き、小腸を有たぬといふ。

その鳴く聲に對しても、古來いろいろにいつたもので、何の事故もなくして、群雞が夜鳴く時は、これを荒雞というて不祥であり、夕方一羽で鳴く時は、天恩あるとし、これを盜啼といひ、老雞となると人語を通ずるなどともいひ傳へられる。

◇ 『雞の五徳』 更に古書には、雞の五徳を數へてゐる、即ち、頭に冠を戴くは文であり、足に距かかを搏つかつは武であり、敵前にあつて敢へて闘ふは勇であり、食を見て相呼ぶは仁であり、夜を守つて時を失はぬのは信であると。

◇ 『雞の靈異』 それから雞に就いては、これを靈鳥として位づける爲め、種々の傳説がある、例へば、古井の水に毒のある場合がある、これを知るには雞の毛羽を採つてこれを試むるので、井中に投じ、直ちに落ちて

行くものは毒が無くクル／＼廻つて容易に落ちないものは毒があると、瓦斯など發生するものをいふのであらう、一面の眞理はある。それから又、池や川に人が溺れて、その死骸の上らぬ時は、雞を筏に乗せて水上に泛べると、雞はよくその所在を知つて鳴く、その箇所を探れば必ず其の死骸があると、これは戯曲の、『菅原傳授手習鑑』道明寺の段に取入れられてゐる。

◇ 『雞の名稱異名』 雞は、名稱もいろいろある、漢字の雞の外に鳩七咤、燭夜、日本の名では、庭に飼ふ處から、『にはとり』古く『かけ』、『くだかけ』、『にはつどり』、『八聲の鳥』、『木綿もめんつげ鳥』、『白邊鳥』、『長鳴鳥』などある『かけ』は家雞の字音の縮小のやうに思へるが、事實はさうでなく鳴き聲から來た名であり『くだかけ』の『くだ』は家のこと、白邊鳥は、白の傍に飼はれるといふ家禽の意味、木綿つげは、その昔、世に騒亂ある時、四境の祭とて、雞に木綿を着けて京城四境の關に祀つたといふことから來てゐる、長鳴聲や、八聲の鳥に就いては説明の要もあるまい。

◇ 『天岩戸の長鳴鳥』 日本に於て、雞のことの最も古く現はれてゐるのは、いふまでもなく『古事記』で、天照大神が、天の岩戸に隠こもりました條に

是を以て、八百萬神、天の安河原に、神集ひて、高御産巢日神の御子、思金神に思はしめて、常夜の長鳴鳥を集へて鳴かして……云々



とあり、雞を鳴かせて、夜明けを促がしたわけである。

『萬葉集』の歌 『萬葉集』にも、雞の詠せられたものが二三ある、十一卷の

旭時あかときと雞かひは鳴くなりよしゑやし獨宿ひとりよる夜は明けは明けぬとも

里中こもりに鳴くなる雞かひの喚こゑひ立て、いたくは鳴かぬ隠妻こもりづまはも

十二卷には

物思ふと宿いねず起きたる朝けには佗いびて鳴くなり庭にわつ鳥さへ

がある、何れも作者は未詳であるが、當時既に雞が一般の家庭にも飼はれてゐたことがよくわかる。

『伊勢物語』のくだかけ 『伊勢物語』にも、雞に關した一條がある、昔ある男おとこが陸奥むつに旅した、京男みやこおとこの優に

やさしい姿は、陸奥の女どもの惱みの種となること珍しいことではなかつた、つひにさる女と一夜の契を結んだが、女に

なか／＼に戀に死なずは桑子くわにぞなるべかりける玉の緒ばかり

とさも田舎人らしい氣持を歌にして送つた、男はその思ひにほだされて、又女のもとに通つた、夜半に男が歸らうとすると、涙に咽なみだびなが又一首詠んで男に見せた

夜もあけば狐きつねに食くめなむ雞かひのまだきに鳴きて夫おとこなをやりつる

といふのである、歌の心は、まだ夜もあけもせぬのに雞が鳴いたので、男は歸つてしまふ、此の雞、夜が明

けたら狐に食はしてしまふといふ、雞に對する恨みである。

諫鼓の鳥 支那では雞を平和の鳥として珍重した、その表はれの一つが『諫鼓の鳥』である、諫鼓といふのは、天子に非行ある時、これを諫むる爲めに鳴らすもの、其昔聖帝堯が之を置いて訴人に打たしめたものであるが、太平打續き、民よく和するので、太鼓を鳴らすものがない、そこで、朗詠の所謂『諫鼓者深うして鳥驚かず』で、雞も安んじて、諫鼓の上にとまつてゐる、將に平和の圖で、此の諫鼓の上に雞のとまつてゐる對照が面白いので、よく繪などに畫かれたものである。函谷關の故事も有名で誰もよく知つてゐる。

雞と畫題 次に雞に關する畫題である、今よく繪畫に見る處のものは

忠孝聯芳 石に蜀葵に、雞を配した謎語畫題。

朝天高唱 東天光と鳴く處を畫く。

闔家全慶 雌雄の番ひに多くの雞を配し一家團樂の象徴、慶は雞と音相通してゐる。

明王闘雞 唐の玄宗皇帝、雞を闘はせ、その負けたるを射る圖。

朝天雞鳴 秋葵に雞を配したもの。

雞群一鶴 この場合多くは、雞頭花に一羽の丹頂を配す。

かうした畫題は昔からよく畫人の間に畫かれてゐるが、また此の外に『祝雞養雞圖』など、時に人物畫とし



て現はれて来る。  
 祝雞翁が澤山の雞を飼つてゐる平和な圖で、此の翁、雞を養ふこと數千、晝は放つてゐるが、夜になると悉く樹上に眠らせる、そしてその雞には皆名があり、翁が強いて名を喚べば、いそ／＼としてやつて来る、誠に愉快な題である。

◇  
**雞の觀賞** 雞はかく古くから家禽として飼養された處から、自然人工に依りいろ／＼の種類が出来た、元來は雉科、雞類に屬してゐるのであるが、その姿も色彩も、人がこれを飼ふ目的に依り、いろ／＼に變つて來たのである、例へば卵を産ませるのが目的のもの、或は肉を食用とするもの、或は闘雞、或はその鳴音を賞美するもの、唯に形態の美を眺めるもの、それ／＼に變つてゐる。

その種類に向つて總てを記すことは、本書の目的でないから、こゝには最も藝術に深い關係を有する種類のみを擧げることとする。

**大和雞** その第一は大和雞である、『しよこく』と呼ぶ、雄は眞紅の肉冠と肉垂、頭羽は黄白色で腹は黒褐色、金屬性の光澤を帯びた尾の鎌羽の上には白い細羽が叢のやうに垂れてゐる。雌は背が灰褐色、風切羽や尾羽は褐色、頭には黒い斑點がある、形はよく、これまで日本畫にはよく現はれてゐる。

**烏骨雞** 烏骨雞は全身純白で、羽毛は絹絲のやうである、そこで絹羽雞の別名がある、頭は小さく顔は黒

く、嘴の上には紫黑色を帯びた圓い肉冠がある、此の種は他の雞と違つて、足に五趾を有してゐる、もとアジヤ東部の産であつたが、支那に多く繁殖し、日本へは支那から渡來したものである。

**矮雞** 矮雞には、桂矮雞だの義引矮雞だのいろ／＼あるが、桂矮雞は最も親しみが深い、脚が短かく、殆んど腹を地につけてゐるやうな姿、朱色の肉冠肉垂に對し、黄色の嘴と脚、白色の全身に黒色白線の諸羽、純黒色の尾羽、その調和が實に面白い、白矮雞は、桂に比し、尾羽まで白い處が變つてゐる、義引矮雞は、頭羽から上尾筒へかけて紅色を帯びた金茶色、此の上筒尾の羽毛は長く延びて、叢のやうになつてゐる。

**長尾雞** 長尾雞は『さいなみ』といひ、原産は朝鮮から輸入したものであるといふが、今では土佐特有となつてゐる、その尾羽が長く伸びて五尺から二十尺に達するものがある、蓋し雞の種類の中で、最も變つたものといへやう、今日では天然記念物に指定されてゐる。

**軍雞** 軍雞は俗に『しやま』といふ、暹羅から渡來した意味であらう、原産は馬來半島邊であるが、日本に渡來してから、形その他總て變化したやうに思はれる、闘雞用として古から到る處に弄ばれた、性勇敢にして敵手を仆さずばやまぬ勢ひがある、繪畫にはよく畫かれる。

この外、『こうちん』と稱せられるのは、交趾支那から渡來せるもの、此の外、『ぶらま』『れくほん』『みのるか』などといふ歐洲種が盛に渡來し、繁殖を圖りつゝある。



蘿窓の名畫 雞を畫いた名作を擧げると、先づ第一に蘿窓の作を推さねばならない、雞といへば直ちに蘿窓を聯想する程有名であるが、さてその作はあまり多くない、淺野侯爵家に傳はる作の如きは蓋し珍中の珍と稱することが出來やう、上部に水墨で竹を描き、下に白い雞を地隈を塗つて白く残し、これに僅かに線を入れてゐる、當時にあつては實に思ひ切つた技法と稱すべきであつたらう、竹の下に落款を入れ、傍に題して曰く

東京有精色、瞻顧候明時、幽々落五德、意在五更初。

と、蘿窓は南宗の畫僧、牧谿と時代を同うして然もその筆致までも似てゐる、『君臺觀左右帳記』には下の部に入れてゐるが、その筆致は中々に高邁、將に一方の名手である。

若冲の傑作 伊藤若冲も、雞の畫家である、彼は常に雞を多數飼養し、朝夕その行動習性や、羽毛の色彩に注意してゐたといふ、雞の作は従つて多く、いろいろの構圖によつて之を畫いてゐる。その中でも有名なのは、今は帝室御物となつてゐる花鳥三十幅中の一、『群雞圖』である、各種の雞十三羽を一幅の中に描き込んでゐる、その姿態、羽色等精細に描き分けてゐる處流石に若冲であるが、聊か標本じみて、却つて略畫や水墨などの方に面白味がある、併し此の作は相國寺舊藏のものであるから、若冲としては少からぬ努力を拂つたものである。

此の外に、雞十二羽を描き込んだ屏風が、片岡直温氏遺愛品にあつた、極く略筆の奔放なもので、六曲一雙一扇に一羽づゝ描き、柴野柴山その他が賛をしてゐる面白いものである、此の外、若冲が雞を畫いた作は枚擧に遑あらず、然もその添景としては、あらゆる植物を配してゐるが、最も奇抜なのは仙人掌さつまてんてんに雞を配した作である。

應擧の雞 應擧には、祇園に自作の雞の額を掲げて、觀客の批評に耳を傾けたといふ程の傳説があるだけに、雞の作は極めて多い、然も應擧の雞は、姿態羽毛、極めて精緻なる寫生に終始してゐる、藤田男爵家の『矮雞育雛』の如きはその代表作と見るべく、松本双軒庵舊藏の『双雞圖』の如きも中々の力作で、これは安永丁酉五十一歳の筆とある。

此の外、高野山寶龜院の直庵の花鳥屏風の雞、波多野古溪氏舊藏の華山の『子母雞』并上侯爵家の松花堂の『竹雞』いろいろの意味で面白い。

現代作家の雞 なほ、現代の人々の作で、雞の畫かれた重なる作を擧げて見やう。

西村五雲	日照雨	十二回帝展出品
木村武山	黎明	十八回院展出品
榊原紫峰	牡丹双雞	畫集所載
横山大觀	蜀葵	十五回院展出品



荒木十畝	關家全慶	畫集所載
根上富治	風	十回帝展出品
山口蓬春	葵	昭和九年尙美展
堂本印象	朝	同上
池上秀畝	苦屋の秋	十四回帝展出品
山本倉丘	英國の黎明	同上

三二〇

軍雞とその名作 雞の中でも、軍雞は特種な存在である、姿態如何にも豪壯、毅然として立つ處は、雞の他の種類の女性的なのに對し將に男性的である、故に繪畫としてこれを畫くもの古來少からず、殊に近年、軍雞の種類漸く減少の傾向があるので、此の機會を逸してはとの考へから、これを畫題とするもの亦少からぬ有様である。

先づその主なるものを擧げると、荒木寛畝翁にその傑作がある、梧桐の下に一羽の軍雞を描いてゐるのであるが、眼光炯々として端嚴貫すべからず、軍雞の作中、特筆すべきものである、その嗣十畝氏が、第十一回の帝展に出品した『軍雞』も、用筆洗練渾熟、背景に玉蜀黍を畫いたのであるが、整然たる構圖は一點一劃の加除も許さない。

西澤笛畝氏にも、『黒軍雞』を畫いた佳作がある、これは黄葉した禰の木の下に點出したので、配合も面白く、好評を博した、此の外第十三回帝展の村島酉一氏の『日午』、第十八回日本美術院展出品の吉田澄舟氏の『軍雞』、同十九回の富取風堂氏の『軍雞』、昭和九年尙美展出品の兒玉希望氏の『軍雞』、此の作は、栗の花を添へたのが珍しい。

動的のものでは、竹内栖鳳氏の『蹴合』が記憶に新である、二羽の軍雞が、今や躍りかゝらんとしてゐる刹那の光景を畫いたもので、老手ではなくては、よくする處ではない。

鳥骨雞の作 鳥骨雞は、色彩が變つてゐるので面白い、これは、昔から時々畫にも畫かれてゐるが、近代の人の作としては、故速水御舟の作によいものがある、白い羽毛と、あの紫黒色の顔との對照も面白く、此の種に限つてある五本指の脚も、手際よく描かれてゐた。

なほ、雞の作としては、菊澤武江氏がよく研究して屢々これを畫いてゐるし、洋畫でも山下繁雄氏は、特に軍雞に興味を有て、屢々大作を物にしてゐる。

### 五三 鳳 (ほうわう)

鳳凰は四瑞の一 鳳凰は昔から、瑞鳥として拵らへあげられた理想の鳥で、麟、龜、龍と共に四瑞として



尊重され、その形は莊嚴華麗を極め、鳥類のもつ凡ゆる美と、威嚴を備へ、目出度いものには絶えず、この鳥が現はれて来る。

その形態に就き、『本草綱目』の記す處に従うと、此の鳥の狀、前は鴻の如く、後は麟の如く、頷は燕の如く、喙は雞の如く、頸は蛇の如く、尾は魚の如く、類は鸛の如く、文は龍の如く、背は龜の如く、羽には五采を備へ、高さは四五尺、四海に翱翔し、天下に道有れば則ち現はるゝといふ。

更に曰く、翼は竿の如く、其の聲は簫の如く、生ける蟲を啄まず、生の草を折らず、群居することなく、侶と行かず、梧桐に非ざれば棲まず、竹の實に非れば食はず、醴泉に非ざれば飲まず、其の鳴くや五音に中り、飛べば則ち群鳥これに従ふ、雄を鳳となし、雌を凰となし、天に在つては朱雀となり、羽ある蟲三百六十にして鳳はこれが長となる、故に文字は凡に従ふ、凡は總ての意である、其の種に四つある、赤多きものを鳳となし、青多きものを鸞といひ、黄多きものは鵠、紫多きものは鸞、白多きものは鸞鵠といふ。

**北甘山の鳳凰** 南思州北甘山は壁立千仞、猿も至ること能はず、鳳凰はその上に巢喰ひ惟蟲魚を食す、大風雨に遇へば飄り墮つ、其雛小きもの猶鶴の如く、而して足や短かく、鳳凰は脚の下に白い物がある、鳳凰臺と名づく、其味辛平である、鳳は靈長であるが、時に飛來ることがある、その棲止つてゐる處を伺ひ、土を掘ること二三尺、圓きこと石の如く、白きこと卵に似たるものがある、併し鳳の來る處、必ず竹があるわけがなく、竹のある所、必ずしも鳳が來るとはいはれない。

**鳳凰の詩** こんな風に、理想の鳥であるのに、それが實在の鳥のやうに誠しやかに書いてゐる。韓愈は、その詩の中に

昔周有盛徳、此鳥鳴高岡。

と書いてゐるが、杜子美の詩にも

自天銜瑞圖、飛下十二樓、圖以奉至尊、鳳以垂鴻猷。

とあり、更に、その形にいろいろの意味をつけてゐるのは、『廣雅』の記す所である、曰く

鳳凰、雞頭、燕頷、蛇頸、鴻身、魚尾、餅翼五色、首文曰徳、翼文曰順、背文義、腹文信、膺文仁、

雄鳴曰即々、雌鳴曰足々、昏鳴曰固常、嚴鳴曰發明、晝鳴曰保長、舉鳴曰上翔、集鳴曰歸昌。

と、愈々此の鳥の瑞鳥たることを強めてゐる。

鳳

**桐竹鳳凰** かうした目出度い鳥であるから、至上の召さるゝ御袍には、桐竹鳳凰の模様を織り出しその他諸々の調度の上にも此の模様が畫かれる。

風

さて鳳凰は、何時の頃から斯く瑞鳥として藝術の上に現はるゝやうになつたかという、恐らく唐の時代からであらう、我等の知る範圍に於て、その最も古いものを擧げて見ると、大和國高市郡南法華寺藏の鳳凰甌の如き、最も注目すべきものである、勿論その形の如きは支那の作に倣つたものであること勿論であるが、



その姿勢の優雅なこと驚くばかり、後世鳳凰の型の上に、幾多の影響を與へてゐるのは注目される、これは我が白鳳時代の工芸美術の中で有名なものであるが、西洋でも、それから二百年以後、東羅馬皇帝即位時代の製作といはれる象牙寶石箱に、此の鳳凰に最もよく似てゐる瑞鳥の彫刻されてゐるのは注目に値する。

**正倉院御物の鳳凰** 奈良正倉院御物の中には、絹織の中に鳳凰の模様の現はれてゐるものがある、これは白鳳より少し降つた弘仁時代に支那から將來したもので、形はやゝ前の甄に似てゐるが、様式はだんくんと精緻になつて來てゐる。正倉院の御物の中には、なほ彩繪油色漆器に唐草と共に畫かれて面白い鳳凰があり、法隆寺には、有名な鳳凰の天蓋があり、漆藝では、有名な木屎漆像彌勒菩薩の後背に鳳凰雲形と寶相華を現はしたものがあつた、此の鳳凰の形は極めて單純であるが優雅にして清楚、鳳凰の一の型として立派なものである、東大寺の彩繪油色漆經箱の鳳凰は、以上の數點より遙かに複雑になつてゐる。

**鳳凰堂** それから鳳凰の藝術として逸することの出來ぬのは、宇治平等院鳳凰堂屋上の鳳凰である、これは後冷泉天皇の永承七年の製作であり、首、體、翼、足總て銅を以てし、形に一種尊嚴な處があり、非常な名作といはれ、昔は風のまにまに／＼回轉したといふ、鳳凰堂の名もこれから起つてゐるのである。

京都の金閣寺の屋上の鳳凰も有名である、これは平等院の作に倣つたものといはれてゐるが、平等院のものに比すると遙かに散漫で前者ほどの威はないが、形には多少面白味がある、これらの諸作が基となつて、後世、いろ／＼の方面に鳳凰が使はれ、神輿の上など必ず金光燦たる鳳凰を見るやうになつた。

鏡に鳳凰を現はしたものには、朝鮮總督府博物館に、双鳳鏡があり、雲形の中に鳳凰を交互に飛ばせた意匠は面白く、彫刻では、グツと新しくなり俗にはなつてゐるが、日光東照宮社殿彫刻の鳳凰など絢爛華麗を極めてゐる。

**林良の傑作** 繪畫の方面を見る、先づ第一に擧ぐべきは京都相國寺の重寶林良筆の鳳凰である、雄勁なる水墨畫で、古木に一羽の鳳凰を配し、修竹を以てその周圍を飾つてゐる、如何にも姿態躍動し豪快極りない林良は巧善といひ、廣東の人、弘治二年薦に因つて孝宗の畫匠に召され、呂紀と共に錦衣指揮となり、内庭の供奉に任じ院中にその技を揮つた、その翎毛は特に絶技といはれてゐる。

**沈南蘋の作** 井上侯爵家には有名なる『朝陽鳳凰』の名幅がある、筆者は沈南蘋で、沈南蘋としての大作に屬する、古く黄筌にも鳳凰の大作がある、笹川喜三郎氏の所藏で、梧桐の上に雌雄を畫いてゐるのが珍らしい、黄筌は五代の畫人、字は要叔、成都に生れ若年にしてその名聲を恣にし十七歳にして待昭となつた、花鳥はその得意とする處、筆々躍動、然も品位を失はぬ處に價值がある、呂紀の作はもと鳥津家にあつた、鶴や鴛鴦を配した賑やかなものである、戴文進の作といふ京都龍光院の鳳凰も有名であり、松浦家舊藏の孫億の鳳凰錦雞双幅も非常な力作である。



若冲と常信 我が國の畫人の作では、先づ若冲の『老松白鳳』を挙げなければならない、若冲一流の豪宕瑰偉の作で、老松の緑に、白鳳の絢爛なる姿態を配し、堂々として人を壓するものがある、永徳には金地桐鳳鳳八曲屏風の大作がある、神戸川崎男爵家の舊藏で、古畫の鳳凰をよく咀嚼し獨特の味を出してゐる。狩野家の人々では、なほ常信を逸することが出来ない、殊に東京美術學校所藏『桐花鳳凰屏風』一雙は常信の代表作ともいふべきもの、濔たる金屏風に鳳凰數羽を描き、流れを見せ、桐花笑ひ、鳳凰は或は翔り、或は踞し華麗の中に尊嚴の態を失はず、誠に素晴らしい大作である、常信にはなほ、中は蓋菜、左右桐鳳を畫いた美しい三幅對もある。

爲恭の傑作 土佐派では光起がよくこれを畫いた、密なる筆致、華麗なる色彩で、和みある筆致でよく一家の體を爲してゐる、松本双軒庵舊藏の『桐花鳳凰』や、江州田村家藏の鳳凰など聞えてゐる、冷泉爲恭にも『旭日鳳凰』の素晴しく美しい作がある、爲恭としては非常な力作である、これはもと高橋是清氏の所藏であつた。

變つた處では島津家に雲鵬の『旭日群鳳』といふのがある、非常な密畫で筆も達者である、雲鵬は姓を龜田といひ東京の人、篆刻を巧みにしたが餘り知られない、神田の田村家には破笠の西王母鳳凰の幅がある、破笠は姓を小川といひ、英一蝶の門下で、中々腕の達者な人であつた。

現代の人々は特別な場合でなくては、餘り鳳凰など畫く機會はないやうである、曾て荒木十畝氏は久邇宮

家の御下命で、聖上御慶事奉祝の爲めの献上畫として、白鳳の大作を揮毫したことがある、氏はこの作を爲す爲め、凡ゆる古畫を探索し、これに氏の理想を加味したものであつた、そして之が研究の一端は別に『白鳳』の作となつて帝展で發表された。

小室翠雲氏にも『朝陽鳳凰』の一曲一雙の大作があり、これは宮内省の官吏から、聖上御慶事の記念に献上した大作、今は御物となつてゐる。

◆ 鳳凰表現法の變遷 かうして見て來ると、鳳凰は古來、いろいろの人に依つて畫かれて來たが、その形は

古ければ古いほど單純であり、それが時代の移るに伴ひ、技巧がだん／＼に加はつて、徳川時代には最も華麗な形となつてしまつた、日光東照宮の彫刻などは、よくその傾向を表はして居るものといへやう。

鳳凰と植物 鳳凰を畫くに當つて配せられる植物は、桐竹の二種である、古文には梧桐とあるが、畫に畫かれてゐるのは、梧桐でなく油桐である。それに竹を添へて畫いたのが一番多い、竹は竹の實でなければ食べぬといふのであるからこれを畫くのは當つてゐるが、北甘山は千仞の絶壁の上といふ、そこに梧桐のあるのは少し當を得ない、併しさうした小さい詮索は別として、鳳凰に桐の花といふのは、如何にもよく調和して面白い。



11283

術 藝 と 鳥

鳥 と 藝 術 (終)

かの斥鴳が蓬生の宿は、膝をいゝに過ねば、大鵬の雲の萬里をうらやまず、さらばおのれをたのしむのみにして、かならずうらやむ方にもあらず、彼鳳凰といふ鳥は、いかなる鳥にかあらむ。  
——百鳥譜—支考——

三二八

昭和二十三年三月十五日印刷  
昭和二十三年三月二十日發行

鳥 と 藝 術  
定 價 百 圓



著 者 金 井 紫 雲  
發行者 芸 艸 堂 出 版 部  
本 田 壽 次 郎  
大寶印刷株式會社  
京都市中京區麩屋町二條北  
印刷者 石 井 喜 太 郎  
京都市下京區東九條山王町三八

發行所

京都市中京區麩屋町二條北  
芸 艸 堂 出 版 部  
電 話 上 三 九 四 一 番  
振替京 都 二 六 三 五 〇 番  
會 員 番 號 A 二 二 一 〇 〇 四  
配 給 元 日 本 出 版 配 給 株 式 會 社

落丁、亂丁は直ちにお取かへ致します



700  
Ka 44

月 日 1059

昭和廿參年六月廿八日

関野清

# 金井紫雲著の解説の書

第八輯 器 物(三)	第七輯 器 物(二)	第六輯 器 物(一)	第五輯 茶 掛	第四輯 墨 蹟	第三輯 茶 室	第二輯 茶 庭	第一輯 茶 會	茶道精観	芽 の 味 覺	松
<p>「松」ほど東洋の文學に取り入れられてゐるものはない。松に一番愛着をもつ著者が繪画、工藝、行事、論曲、遊劇、詩歌、生態等科學性にまで涉り多年の研究を發表せるもの。B 6 判三二八頁圖版四頁定價六十圓送料十圓</p>								<p>疎開あとに、道ばたに、手近にある雜草、その雜草のもつ芽の味覺、著者が多年に渉る食覺が簡単な調理法迄添へ俳句等の文學的表現を以つて世に送るもの、食通、主婦の必讀書。B 6 判一七五頁 定價五十圓送料十圓</p>		
<p>わかつてゐる様でわからない茶道、は入り易い様で仲々は入りにくい茶道を、専門家には便宜であり時間の足りない勤勞者にも觀てわかる様に圖と解説とを以つて編纂せる案内書と指導書を兼ねたるもの。圖は岡本東洋の藝術寫眞を鮮明美麗なるコロタイプ版とし解説は金井紫雲の名解と併せ觀てもたのしいもの。A 四判各判二〇—五〇圖紙入</p>								<p>第一輯第八輯定價七十圓 第七輯定價六十圓 第二輯—第六輯定價五十圓送料各十圓</p>		
<p>京都市中京區 鉄屋町二條北</p>						<p>芸艸堂出版部</p>		<p>電話上③三九四一番 振替京都二六三五〇番</p>		



終

芸艸堂  
出版部

御嶽雷鳥

仿古版御影

運一刻

